そして魔女は祈りを謳う

神宮寺飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そして魔女は祈りを謳う

【Ｎコード】
Ｎ８４７７Ｄ

【作者名】
神宮寺飛鳥

【あらすじ】
魔女の旅――。それは、魔の力を持ち人を喰らう化物が“生きる事を許される為”の旅。魔を狩る教会が彼女達に与える選択は二つ。火刑か、旅か……。大陸中の教会で許しを請う巡礼の旅。両手を手錠でつながれた少女達は、修道士と共に旅を続けた。エトリアの魔女と呼ばれた幼い少女もまた、自らが生きる資格を得るために旅に出る。人を喰らい魔の力を持つ魔女……しかし少女の本性は、人よりも余程優しい無垢なものだった。これは幸せを求めて旅をした、優しい魔女の物語――。不定期更新。１２／８：一年ぶりに更新。

#1　エピローグ（前書き）

一応ファンタジー？
よろしくお願いします。

#1　エピローグ

吹雪の中、わたしは棺を牽いて歩みを進める――
果ての見えぬ純白の闇の中、終わりを信じて歩みを進める。どこまでも続く、目の届く限り全てを多い尽くす白い雪。マントが風に靡き、凍えるそれらは髪も睫も凍てつかせ、わたしの体温を急激に奪っていく……。

「……」

旅の終わりはすぐ目前。長い間待ち望んでいたものが目の前にあるのならば、最早帰り道の保障など不要。投げ捨てる荷物には食料が。資材が。旅先で手に入れた数々の思い出の品が。雪に埋もれて取り残されていく……。
結局の所、そうなのだ。最後に私に残されるのはこの棺と、棺と共に抱く本当に大切な思い出だけ。
雪の重さは棺桶をより重く感じさせ、わたしの手足から体力を奪っていく。だが、歩みを緩めはしない。ブーツの中にまで入り込む雪は感覚を奪い、自分が歩いているのか止まっているのかも判らなくなる。
それでも歩みを止めはしない。歩き続けている自分を信じ続ける。わたしの旅はこんな所で終わるはずがないのだ。そう、終わらせるわけには行かない……。

「マスター……」

あなたなら、きっとそうしたはずだと思うから――。あなたなら、きっとこの吹雪の中、何の保証もない明日と自らの命を根拠もなく

信じ続けたはずだから。
否。そこには確かに根拠がある。自らが踏み固め道としてきた過去がある限り、その先に続く自分を信じている限り。
旅は終わらない――彼はそう言ってわたしに笑いかけるだろう。だからわたしは彼が信じたわたしを信じたい。
走馬灯のように脳裏を過ぎる様々な人々の感情。怒りや憎しみ、罵倒。けれど、笑顔や優しい言葉とて皆無ではなかった。
旅は確かに意味があった　悲しみや苦しみがその記憶の殆どを彩っていたとしても、それは決して無意味などではない。
雪の中、倒れる。足が止まる。息が切れる。棺桶が重い……。棺を引く手の感覚がない。震えているのは重さのせいなのか、それとも寒さのせいなのか。
どちらにせよ関係などない。凍りついた瞼が痛く、重く……。呼吸し続ける事さえ億劫で、このまま眠るように息絶えてしまえたらどれだけいいだろうとさえ思う。
それでも棺桶は手放さない。これを手放してしまったならば、わたしの今までの旅は全て無駄になってしまう。何よりこれを手放してしまったならば、彼に別れを告げなければならなくなる。
約束を、破る事になる。わたし自らの手で彼の顔に泥を塗る事になる。だから手放してはいけない。何があったとしても、決して……。
雪の大地を這う。足跡も残らないような激しい白の中、一歩ずつ、ゆっくりと、それでも歩き出す。
前は見ない。先に何も見えずとも、わたしは諦めたりなどしない。絶対にたどり着き、そして果たすべき約束を果たすのだ。
そして願いの先にある、わたしの幸せを取り返すのだ――。

「もう少し……」

――もう少しなのだ。

「あと少しで……」

――化物だなんて言わせない。

「マスター……」

――どうかわたしに力を貸して欲しい。

「人間に……」

――化物のわたしが、人間になるために。

辿り付く先は巨大な聖堂。大きすぎる鉄の門を叩く。けれども音は弱弱しく、吹雪の音に掻き消されてしまう。

それでも尚、必死で戸を叩き続ける。誰かがきっと応えてくれる。そう信じて歩んできたのだから。

「誰か……！」

――お願い。

「誰か……！！」

――いくら戸を叩いても返事はない。腕が痺れ、段々と上がらなくなってくる。

扉に背を向け、力なく座り込んだ。息が上がっている。　体力的にもどうやら限界らしい。

瞼が重い。　誰の声も聴こえない。真っ白すぎて馬鹿馬鹿しくなってくる。

ああ、一人だ。一人しかいない。他には誰も居ない。わたしと、マスターと、あとはもう誰もいない世界に来てしまった。

「……」

……だが、それも悪くはないのかもしれない。
誰も居ない場所で、誰にも知られずひっそりと死んでいく…きっと化物にはお似合いの最期だ。
目を閉じてしまった。一度閉じてしまったらもう開くだけの力は残されていなかった。
だから全身から抜けていく力を感じながら、わたしは静かに最後の一息を吐き出す。

ああ――。

世界がひどく、静かだ――。

吹雪の中、力なく棺桶から手を離す。
音も無く倒れた棺から、わたしが書き溜めた沢山の羊皮紙が飛ばされていく音が聴こえた気がした。
わたしが生きた証。わたしが記した日記。彼がこの世に存在したという証。わたしがこの世に存在したという証。
どうか消えてしまわないで。どうか飛ばされてしまわないで。どうか忘れてしまわないで。

伸ばした手は白い記憶の中に消えて、後はもう何も残されはしないだろう。わたしという存在さえ白で塗りつぶし、全て無かった事にされてしまうのだろう。

こんな最果ての雪の中、消え去ってしまうのがわたしの運命だとでも言うのだろうか――？

ならば神よ――。どうか、わたしを地獄へ落として下さい。

貴方の元に召されるくらいならば、わたしは魔女としての人生を全うしたい。

どうか神よ――。彼の魂だけは、天国に召されるように祈りたい。

今まで一度として欠かさなかった祈りの代価を、今こそ頂戴したい……。

「どうか、神よ……」

彼を癒して。

白い景色の中、彼がわたしに手を伸ばしている景色が見える。わたしは子供に帰ったように、無邪気な笑顔を浮かべながらその大きな胸に飛び込んだ――。

そして魔女は祈りを謳う

#1　エピローグ

――――旅の始まりは、暗い森の中からだった。

#1　エピローグ（後書き）

何を血迷ったのかこんなのを書こうと思ってしまったので書こうと思います。

#2　魔女は棺を牽いて行く

おれの父さんは言っていた――。世の中には想像もつかないような、とんでもない不思議で溢れているんだって。

たまにしか家に帰ってこない冒険家の父さんは、家に戻ると一晩中おれに冒険の話を聞かせてくれた。

おれたちの暮らしている大陸がユーテリアと呼ばれている事。親父が旅した村の外の事……。

鬱蒼とした森を抜け、険しい山を越えた先にはとんでもなく広い都があって、そこには村の何十倍もの人が暮らしているってこと。

不思議な機械の話や、不思議な生き物の話。そのどれもがおれにとっては不思議で、わくわくして、最高のお土産だった。

特におれが好きだったのは――――魔女の話だ。

この世の中には、魔法が使える人間がいるらしい。そういうのは皆魔女とか魔人と呼ばれていて、そいつらは人間を生で食べてしまうんだとか。

他にも火を吹いて町を焼いたり、討伐しようとした人間の兵士をばったばったと皆殺しにして笑っているとか、とんでもない話だった。

その話をするときの父さんはいつもどこか寂しげで、魔女をさんざおっかなく言うと、おれの肩を叩いて眠るように促すのだ。

そうして父さんの背中におやすみを告げて、翌朝目覚めると父さんはもういない。それがおれの父さんのあたりまえだった。

毎年おれの誕生日には必ず帰って来てくれた父さんが帰らなくなって二年が過ぎた。

おれはまだ、父さんの言う魔女の話を信じている……。

#2　魔女は棺を引いて行く

「小僧……じゃなくてくそガキ……でもなくて、少年……少年、ああ、この辺りが妥当か。おい少年、親御さんは居ないのか？」

生憎その日は雨が振っていて、外で遊べないのでおれは家の中で父さんが残した旅の記録に目を通していた。

父さんが戻ってくるたびに増えていったその羊皮紙の束はおれにとってはこの上ない宝物で、見ているだけで胸がわくわくする代物だった。だから雨が降ったりして外で遊べない時や、近所の悪がきと喧嘩したりしたときはきまってこの記録を眺める。そうしていればなんだかおれもいつかはそんな冒険の世界に旅立てるんじゃないか。そんな風に思えてくるから。

けれど、そんな胸躍らせる雨の日に我が家の扉を叩いたのは、ずぶ濡れになった神父だった。鋭い目つき……左目には黒い眼帯をはめていて、余計に人相が悪く見える。銀色の髪からぽたぽたと水滴を零しながら、やたらと図体のでかい神父はおれを見下ろしていた。

「何あんた……？　怪しすぎるにも程があるんだけど……」

「ああ……。まあ、あれだ。俺は優しくて心が広いからな。クソガキに生意気を言われても喚いたりはしない。だからさっさと家に入れろクソガキ、ぶっ飛ばすぞ」

言っている事がめちゃくちゃだこいつ……。なんだか良く分からないけれど、家に入れたら大変なことになる気がする。とにかくこの半分開いている扉を閉めなくては。

しかし扉を閉めようとした途端、神父は腰に携えていた剣を抜き、

おれの首筋に当てて悪人面で笑う。ぎらりと刃が光を弾き、思わず背筋がぞくりとする。

「さっさと入れろ」

神父どころか強盗だった――。仕方なく家に上げる。濡れた黒いロングコートを脱いで神父は剣を収めた。

「おい、お前もいつまでもそんな雨の中に立ってないでご厚意に甘えろ」

何がご厚意だ、明らかに強制だったくせに……。そんな事を考えながら扉の向こうを見て、おれは思わず息を呑んだ。

小柄な影が一つ、雨に打たれていた。ローブのフードを脱いで顔を上げるその子の蒼色の髪は濡れていて、見入ってしまう程きれいだった。

……なんて、勿論絶対に口には出せない。おれは慌てて頭を振り、変な考えを振り払う。家に上がってきたのは強盗神父と、かわいい女の子だった。

村で一番かわいい女の子よりも断然かわいいその子は黒いドレスの上にローブを羽織り、何故か巨大な棺桶を背負っていた。その棺桶は大人が入る程の大きさではなかったけれど、きっと女の子くらいならすっぽり入ってしまうのだろうと思うと、まるでそれは女の子が自分のために牽いて歩いている棺桶のように思えた。

蒼色の髪を強盗神父が布で拭き、朱と蒼、両目でそれぞれ違う輝きを放つ瞳を閉じて女の子はじっとしていた。水滴が零れる上着を壁にかけて二人は勝手に部屋の椅子に腰掛ける。殆ど丸太小屋当然のこの家に来客……しかも怪しい神父と女の子という組み合わせだ。その様子が余りにもへんてこすぎて、おれは言葉を失った。

神父はテーブルの上にあったクッキーを無断でつまみながら女の

子の髪に触れ、それから少女が背負っていた棺桶を床に下ろす。よくみれば女の子の両手は手錠でつながれていて、自分ひとりでは棺桶を下ろすだけでも大変そうだった。
しかしなんでそんなことになっているのかよくわからない。まるで囚人……いや、そんな生易しいものじゃない。テーブル越しに二人と向かい合いながら、おれはじっと神父を見つめた。

「どうした小僧……もしや俺に惚れたのか？」

「そんなわけがあるかっ！？　なんなんだよおまえ！　勝手に家に入ってくるし！！」

「何だ、礼が欲しいのか？　なら、これを……くれてやる」

神父が荷物の中から取り出したのは難しい言葉が書かれた白い紙だった。その紙切れが一体どんな意味を持つのか、おれにはさっぱりわからない。というか、こんなのでお礼になると思っているこいつがどうかしてる。

「なんだよこれ。こんなの見たことないぞ」

「ありゃ、どうやらガキには価値がわからないらしいな」

「そんな事を言ってだますつもりなんだろ！　そうはいかないぞ！」

テーブルを叩いて神父を睨み付ける。背の高い神父は濡れた前髪の間から余裕の笑みを浮かべていて、それがまた気に入らない。明らかにガキだからって見下している顔だ。だまそうったってそうはいかないぞ。そうやって大人たちは汚い手段で人をだますってことをおれは知ってるんだ。

「さっさと出て行けよ！　お前らみたいなのは、雨に打たれて死んでしまえばいいんだ！」

「ほう。では一つ訊くが、小僧……このいたいけな少女まで風邪を引いてのたれ死んでもいいと言うのか？」

「うっ！？」

そう言われると言い返せない。何しろ女の子はさっきから困ったような顔でおれを見つめているのだ。

なんだか照れくさくて文句も小さな声になってしまう。ぶつぶつとはっきりしないトーンで出て行けだの胡散臭いだの口にしていると、少女が立ち上がって神父の手を引いた。

「この人、困っています……。マスター……」

きれいな声だった。けれど、とても申し訳なさそうな声……。だから何故か自分が悪い事をしているような気分になり、いても立ってもいられなくなる。

「あぁもう、仕方がないなあ～……。いたいけな少女を雨の中に放り出すクソ生意気な畜生小僧のせいで俺たちはのたれ死にか～……あ～あ～」

これ見よがしに叫んで男は小屋を出て行こうとする。さもおれが悪者で、二人を追い出したみたいな言い方で……。

「……くそう！　もう勝手にしろよ！」

「じゃあ勝手にしよ～っと」

男は早々と元の位置に戻ってけたけた笑っている。女の子は申し訳なさそうに微笑んでいた。

冷静に考えてみれば、この温かい春先。雨に打たれたくらいで死ぬはずなんか無い。その事実に気づいたおれは頭を抱えた。

夜の雨は確かに冷たい。でも死ぬほどじゃない。結局完全に体よく居座られただけじゃないか……。

しばらくそうして頭を抱えていると、じいちゃんが家に帰ってきた。そして、椅子に座って偉そうにふんぞり返っている神父を見て、震える声で言ったのだ。

「しゅ、修道騎士様……！？　何故このような辺境に……！？」

「おっ？　じいさんの方は少しは話が通じるみたいだな」

「……修道騎士？」

かねてからこのユーテリア大陸は小国と様々な土地の領主との間で争いの耐えない場所だった――。

そんな長い争いの歴史に終止符を打った勝利者である、聖クィリアダリア王国。その国教であるヨト信仰を司る教会の騎士――それが修道騎士らしい。

ちなみに、現在ユーテリア大陸のどの国もこのクィリアダリアの支配下にあるため、大陸の人間全員がヨト信仰に入信しなければならない状況にある。そうでなくてもじいちゃんはヨト信仰の信者なので、そのじいちゃんが言うには胡散臭い神父は『様』をつけて呼ばねばならないようなえらい人だったらしい。

とまあ、そんなことはおれにとってはどうでもいいのだ……。結局えらい神父だろうがなんだろうが、こんな横暴ばかりを通す嫌な

やつが良い人なわけがない。
どうせこういう一部の権力者が幸せに生きるためにおれたちみたいな下っ端の生活が苦しくなる仕組みになっているんだ。そうでなければじいちゃんが毎日毎日畑仕事をしてがんばってるのにぜんぜん生活が楽にならないなんておかしいじゃないか。。
それに、ヨト信仰だかなんだか知らないけれど、そんな神様がいるのならどうしておれの両親が居なくなるのを止めてくれなかったのか。全てを見通す万物の神様だっていうのなら、いなくなってしまったのはそいつのせいじゃないか。
じいちゃんが長々と語るその話を最後まで聞かずにおれは部屋を飛び出した。どうせ部屋は三つしかないので、飛び出した先は隣の部屋だったわけだけれど。
そこは一応おれの部屋で、壁にはとうさんが持ち帰ってきた書物が棚にきちんと整理整頓されている。おれが一番落ち着く、おれのためだけの部屋だ。

「ちぇ……。なんだよじいちゃん……」

修道騎士だかなんだか知らないけど、あいつ絶対性格悪いのに。家に入れるどころか、今晩は泊めて食事まで用意するなんて。そんなことしている余裕なんかうちにはないはずなのに。
ベッドの上に腰掛けて読みかけの物語を覗く。とうさんが家に帰ってこなくなった理由はなんなのだろう。旅先でとんでもない大発見をして、今はそこで幸せに暮らしているのだろうか。
そうして幸せになりすぎて、おれの誕生日の事も忘れてしまったのだろうか。だからかあさんは何も答えてくれなくて、かあさんまで居なくなってしまったのだろうか。
そんな事を考え始めると胸の奥がもやもやしてきて、何故だか涙が溢れそうになる。それを拭って心を強く持つ。そうしていなくちゃきっととうさんは帰ってきてくれないから。

冒険者のとうさんの口癖は、心を強く持て――というものだった。それは今でもおれの中で大事な言葉で、多分これからも変わらない。けれども、どうしてもくじけてしまいそうな時はどうすればいいのだろう。とうさんは、どうしていたのだろう……。

訊いてみたい。冒険の真相を。魔女は本当にいるんだって言って欲しい。悲しくなった時、それを乗り越える方法を……。とうさんならきっと知っていると信じているから。

そんな事を考えていると、急に扉が開いた。その音に慌てて書物を背中に隠すと、入り口には女の子が立っていた。灯りもつけない部屋の中を見渡し、おれに向かってゆっくりと歩いてくる。

「なっ……！　なんだよ？」

「……ごめんなさい。急に、押しかけてしまったから」

「あぁ……？　いや、別にいいけどさぁ」

全然なにが別にいいのかはわからなかったけれど、とりあえずそう言うしかなかった。

「……何か、わたし達の事が気に入らない理由があるのですか？」

「気に入らないっていうか……明らかに胡散臭いし」

そう真正面から真っ直ぐに見られると返答に困ってしまう。確かにとうさんは、困った人は出来る限り助けるように……何てことも言っていたけれど。

じゃらりと音を立てた女の子の両手をつないでいる鎖。視線を向けると、少女は恥ずかしそうにローブの中に両手を隠した。

「なあ？　おまえ、なんで両手鎖でつながれてんの？」

「……わるいことを、したからです」

「え？　わ、悪い事って？」

「……」

女の子は答えない。何か拙い事を訊いてしまったのだろうか。答えづらそうに視線を逸らしていた。
そのよどんでしまった空気を吹き飛ばしたくて明るい話題を探すのだけれど、結局女の子を喜ばせてあげられそうな話は一つも思いつかなかった。気まずい雰囲気が流れたままで、おれは少しだけ考えこんだ。

「あ、そうだ。　おれ、イーサっていうんだけど……おまえは？」

結局そんな事しか言えなくて、なんだか情けない気分になる。でも女の子は目を丸くして、それからおれの名前を繰り返してくれた。

「イーサ？」

「そう、イーサ」

「わたしは……レヴィアンクロウ」

「れび……？　な、なんだって？」

「……長いので、レヴィでいいです」

「あ、そう……レヴィ、ね。　あっちの神父は？」

「イルムガルド様です」

「イルムガルド……？　なんか揃ってややこしい名前してるんだな」

「……そうですね」

小さく笑う女の子。なんだか気まずくなるくらいその子は可愛くて、胸がドキドキしてしまった。

何歳くらいなのだろうか？　おれと同じか少し上くらいだろうか？　何故神父と旅なんかしているのだろうとか、なんでおれの家を選んだのだろうとか、なんでこの町に来たのだろうとか、様々な疑問が頭の中に浮かぶのだけれど、いまいち声をかける事が出来ない。

そう、なんというか……。声をかけてはいけないような、そんな不思議な雰囲気をその子が持っていたからなんだと思う。あの神父はどうだか知らないけれど、この子はきっと悪い子なんかじゃない。おれはその時なんとなくそんなことを思ったのだった。

さて、実際のところ女の子……レヴィは良い子だった。うちの仕事を何から何まで手伝い、文句一つ言わずに働く。

そんなことはしなくてもいいんだとおれもじいちゃんも言ったのだけれど、まるで聞きやしなかった。レヴィはひたむきに黙々と働き、息を切らして汗を拭っていた。

レヴィが部屋の掃除をしているのを眺めながら、一方神父はあろうことかあくびをして眠そうに本を読んでいた。何やってんだと訊いたところ――、

「俺は偉い神父でレヴィは俺の従者だからな。ま、働くのはそいつの仕事だ。せいぜいこきつかってやれ」

――と、当たり前のようにほざいた。まったく、ああいう大人がいるから世の中がよくならないのだと思う。

町外れにあるじいちゃんの畑にじいちゃんとおれ以外の姿があるのは新鮮で、不思議で、でも少しだけ楽しかった。農作業の経験でもあるのか、レヴィは黙々と、しかし確かな段取りで収穫を手伝う。作業中くらい着替えればいいのに、真っ黒のドレスのまま。それがまたちょっとおかしくて、おれは笑ってしまう。笑っているおれを見ると、レヴィは恥ずかしそうに俯いた。

休憩時間、差し込む太陽の光から逃れるように木陰に据わったレヴィにおれは質問してみることにした。どうしても気になっている事が、いくつかあったから。

「なあレヴィ？　なんでおまえ、棺なんか背負って歩いてるんだ？」

「……そういう旅なのです」

「変わってるなあ。あとさ、仕事中くらいその鎖外したらどうなんだ？」

「いえ、そういう決まりなんです……」

つくづく変わっている。変わりすぎている。

一見しただけではどこかの貴族のお嬢様のようにしか見えないのに、やっていることはなんだか妙だ。

質問しなければろくに口を聞く事も無い物静かな女の子は、しかし黙っていても農作業を手伝う活発な一面も持ち合わせていた。故に彼女の性格をうまく掴みきれず、対処に困る事もあった。けれど

結局日が暮れるまで過ごすと、自然と彼女たちはもう一泊していくことになった。
むしろレヴィが手伝ってくれるお陰で仕事は捗ったし、部屋はきれいになった。神父は結局ひがな一日寝て過ごしていたようだが、この分ならずっといてくれたって助かるくらいで。
夕飯の後片付けも手伝うレヴィ。彼女はふと訪れたおれの部屋で、机の上に放り出されていた羊皮紙を手にとってそれを眺めていた。

「あっ！？　お、おい……！　勝手に見るなよ！」

「あ……！　ご、ごめんなさい」

「いや、別に怒ってないけどさ……」

申し訳なさそうに羊皮紙をおれに手渡すレヴィ。しかしその顔色はどこか浮かなかった。

「もしかして、読んだ……？」

「……少しだけ」

やっぱり……。町のみんなと同じく、彼女も思ったのだろう。
手にした羊皮紙にはとうさんの冒険で一番おれが好きな魔女の話が記されていた。
魔女を冒険者であるとうさんがやっつけたというエピソードだ。そこには口から火を吹き人間を喰らう魔女の姿が鮮明に描かれていた。
けれどこれを見た誰もがとうさんを馬鹿にした。おれの事をうそつきだと言った。確かに不思議だしありえないようなことだけれど、でも世界には不思議な事が沢山あふれているんだ。とうさんの冒険

をうそだのなんだの馬鹿にされるのは、正直許せなかった。
だからこそじいちゃんと一緒にこの外れの畑に暮らしているのはそれほど悪い生活ではない。町の子供たちはおれをみるとうそつきと馬鹿にするから。
レヴィも同じようにおれの事をうそつきだと言うのだろうか……？　そう考えると無性に悲しくなり、何も言葉に出来なくなった。

「……魔女、いると思いますか？」

「えっ？　あっ、いや……その」

いると思うに決まってる。けど、そういってしまったら決定的に彼女と何かが食い違ってしまうのではないか…そんな恐怖が脳裏を過ぎる。しかし少女はおれの手を取って、確かな口調で語った。

「魔女は、います」

「えっ？」

「魔女は、います。口から、火を吹いたりはしませんが……」

「あ、会った事あるのか！？」

思わずレヴィの手を握り返してしまった。少女は驚きながらも、上目遣いに小さく頷いた。

「イーサは……魔女、嫌いですか？」

「とんでもない！　いるなら是非会ってみたいよっ！！　なあなあ、その魔女とどこで会ったんだ！？　教えてくれよ！！」

「え……っと……？　あの……聖都オルヴェンブルムのはずれにある……森で」

「オルヴェンブルムの森かあ～～～～っ！！　すげえ～～～～っ！　随分と遠くから来たんだな、おまえら！」

「は、はい」

「それで！？」

「は……はいっ？」

「魔女ってどんなやつだったんだ！？　火を吹かないなら何を吹くんだ！？　片手で鎧を纏った騎士をひねり潰すんだろ！？　人間に呪いをかけて苦しめたり、頭から人間を丸呑みしたり、矢で射抜かれても死ななかったりするんだろっ！？」

「え、ええ？　そ、そんなことは……ないと思います……たぶん」

「え……？　そうなのか……？」

「あっ！？　い、いえ！　で、でも……地震を起こしたりは出来ます」

「おおおっ！？　それで都を滅ぼしたりするんだなっ！？」

「わたし、そんな怖いことはしません……」

「そりゃレヴィはしないだろうけどさ…？　なあ、もっと聞かせて

くれよ！　魔女の話っ！！」

目を丸くして驚き、けれど小さく頷いたレヴィは最高にかわいかった。

それからずっとレヴィは魔女の話を聞かせてくれた。その話は確実にあった事があるんだって思えるくらい現実味を帯びていて、まるで本物の魔女に話を聞いているようだった。

時間を忘れて語り合い、下らないことで笑いあい、気づけば真夜中になっていて。その感じがまるでとうさんが帰ってきてくれた夜みたいで、なんだか懐かしくなってしまって。小さく溜息を着いて窓の向こうを眺めていると、レヴィは眠たげな目を擦りながら言った。

「イーサの両親は……？」

「あぁ……。とうさんはさっき話したけど冒険家で、家に帰ってこないんだ。かあさんはとうさんが帰ってこないもんで自殺した」

「えっ？」

「ん？　ああ、もう結構前だよ？　でも本当何やってんだろうな、とうさんは。母さんの葬式にも帰ってこないんだもんな」

苦笑して誤魔化す。本当はこんな事誰にも話したくないはずなのに、不思議と話してしまうのだ。それはきっとこの女の子がとても優しくて、おれの話を何でも素直に聞いてくれるからなのだと思う。

「おれさ、町の子供たちにうそつき呼ばわりされてるんだ。魔女なんていうわけないとか、非現実的だとかでさ」

「……」

「でも、おまえは信じてくれた。レヴィだけだよ、おれの話を笑わないで聞いてくれたの」

ありがとうと言って手を差し出すと、レヴィは握手に応えてくれた。そうして彼女は真剣な眼差しでおれに告げたのだ……。

「あの……」

翌日――。畑仕事をさぼっておれは町に下りてきていた。

辿り付いたのは町の子供たちが集まる噴水の広場。そこにはやっぱり子供たちが集まっていて、おれの姿を見るなり遊びを中断して集まってきた。

「おいみんな、嘘つきイーサが来たぞー！」

「何しにきたんだよ、嘘つきイーサ！」

「言ってろ！　今日はな……おれが嘘つきじゃなかったって証明をしにきたんだよ！」

おれの背後にはローブを纏ったレヴィがついてきていた。そう、レヴィは昨日の晩、ここにつれてくるようにとおれに言ったのだ。

作戦はこうだ。レヴィが町の子供たちにあの臨場感たっぷりの話をする。これでみんな魔女の話を信じてくれるはずだ。そう思っていたのに、レヴィの姿を見ても町の連中は首をかしげて笑うだけだ

った。

「なんだそいつ？　全然見たことない顔だぞ」

「こいつはレヴィだ。旅をしてる子で、魔女に会った事だってあるんだぞ」

「そんなわけないだろ……！　魔女なんかいるわけないんだ！　お前また嘘をつくためにそんなやつ連れてきたのかよ！」

「お前は畑仕事でもしてろっての、嘘つきイーサ！」

子供達は口々にそんなことを良いながらおれにむかって小石を投げつけてくる。

せめてレヴィだけはそんな目にあわせちゃいけないと思って前に出ると、あろうことかレヴィは自ら小石の雨の中に身を乗り出した。

大粒の石がレヴィの額にぶつかり、血が滲む。流石にやりすぎたと思ったのか、一瞬だけ子供たちの手が怯んだ。

「――イーサは、嘘つきなんかではありません」

鋭い目つきで、朱と蒼の瞳で、子供たちを睨んでレヴィは手を空に翳す。

「その証拠を、今お見せします」

レヴィが天に翳した手を振り下ろした瞬間、大地が揺れた――！

敷き詰められたレンガがぐらぐらと揺れ始め、子供たちだけならず周囲を通りかかる大人たちも慌て始める。

地震……。滅多に起こるはずのない事態の到来に町中が浮き足立

っているというのに、ただ一人その少女だけ落ち着いた様子で蒼い髪をなびかせている。
なびかせている――？　その髪は風もないのに不思議と煽られ、強く靡いていた。まるでその女の子を中心に風が巻き起こっているかのような、不思議な情景。それに気がついた子供たちが腰を抜かしたようにその場から逃れられないまま、震えた視線でレヴィを見ていた。

「わ、わたしは悪い魔女です……！　とっても悪いです……！　鎧の騎士を片手でひねり潰したり、火とか吹きます……！」

「な、なんだってっ！？」

風は強くなり続け、レヴィの近くにいたおれは吹き飛ばされてしまった。町の子供たちを庇うように前に出ると、レヴィに叫んだ。

「う、嘘だろ！？　レヴィが魔女なわけがない！　だ、だって魔女ってのはもっとおっかなくて……！」

「では、その証拠をお見せする……のだぞう……！」

なんだか中途半端に怖い口調になったレヴィは噴水を指差す。すると噴水から流れていた水が宙を舞い、子供たちの頭上から降り注いだ。

「ひゃあああああっ！？」

それだけでもう大パニックだった。ずぶ濡れになった子供たちは右往左往……。おれは口をぽかんとあけたままレヴィを見ていた。
間違いない。こんなことが出来るのは魔女だけだ。どうすればい

いのだろう。レヴィをここにつれてきてしまったのはおれだ。このままじゃおれのせいで大変な事になってしまうのではないか――そんな予感がした。
慌てて拾い上げたのは剣ではなくて木の枝だった。でもきっととうさんだったらこうしたはずだ。どんなにむかつくやつらでも、人々を守る。とうさんがそうしたように、おれもそれを嘘にしてしまわないように。

「やめろレヴィ！　これ以上やるようなら、大変なことになるぞ！」

「はっはっは～……わたしは悪い魔女なので……子供たちを食べちゃうぞお～」

「うわああん！　おかーーさーーんっ！！」

「誰か助けて～～っ！！　パパ～～っ！！」

泣き喚く子供たち。大人たちも集まってきてはいるのだけれど、風のせいでレヴィには一歩も近づけない。それに仮に近づけたとしても、魔女という異端の存在に近づこうという勇気を持つ人間はこの場に一人も居なかった。
けれどおれにはやっぱり理解出来ない。レヴィがそんなことをするような女の子には見えない。とうさんが言っていた、火を吹いて、人を丸呑みして、矢で貫かれても死なない……そんな存在にはどうしても見えなかった。

「かかってこないのなら～……。こっちからいっちゃうぞお～……」

指先をこちらに向けるレヴィ。気づけばおれは風の中駆け出し、レヴィの頭を棒で叩いていた。けれど……“しまった”――そう思

った。レヴィの顔をみていたら、強く叩けるはずなんかなかったのだ。
こんなかわいらしくて、やさしくて、働き者で、おれの話を笑わずに聞いてくれたこの子が、悪い子なんかであるはずがないって、判りきっているから……。当然、棒は情けなく頭の上に乗っただけだった。なのに――。

「うわあ～、やられた～……。さすがは冒険者の息子、イーサの剣だ～……！　このままではやられてしまう……。もう二度とこの街には来ないようにするのだ～……」

「え――？」

拍子抜けする。あんなに強く吹き荒れていた風は止んで、レヴィはおれの目の前で寂しげに微笑んで見せた。
それから振り返り、駆けて行く。だれもその背中を追いかけるやつはいなかったし、最後の笑顔をみたやつもいなかった。

「……す、すごいぞイーサ！！　お前、嘘つきどころかすごいやつだったんだな！！」

「え？　え？」

大人たちも子供たちもおれを取り囲んで持て囃した。遠く消えていくレヴィの背中……。おれは、何にもしてなんかいないのに。
昨日まで…いや、つい先ほどまでおれを嘘つき呼ばわりしていた連中は口々におれを勇敢だの英雄だのと褒め称えた。けれど、嬉しくない。確かにこれで明日からおれはみんなと仲良くできる。けれど、最後に彼女が言っていた言葉が胸に突き刺さって抜けなかった。

“もう二度とこの街には来ないようにする”――。

そんなこと、おれは言って欲しくなんかなかったのに……。

「じいちゃんっ！！！　レヴィはっ！？」

人の山にもみくちゃにされながら必死でそれを抜け出し、全力で走りぬけて家に戻る。

扉を強く開いて中を見渡すけれど、あの怠け神父の姿も、レヴィの働いている姿も……まるで全て幻だったかのようにそこには存在していなかった。

「おぉ、イーサか。旅の修道騎士様なら先ほどご出立なされたぞ。連れの女の子も一緒じゃった」

「ええっ！？　ど、どっちに行ったのか知らない！？」

「ん～、確か次はリーベリアを目指すとか仰っていたような……。それよりイーサ、畑仕事をさぼりおって……」

「ごめん、それはまた後にして！」

「これ！　イーサっ！」

じいちゃんの怒鳴り声を無視して家を飛び出す。太陽が沈みかけている夕暮れの空。赤く染まった空の下を駆け抜けた。

まだ会って三日目じゃないか。もっとゆっくりしていけばいいじゃないか。せっかく仲良く……友達になれたのに。

何で居なくなっちゃうんだよ。もっと話したい事沢山あるのに。
もっともっと、案内してやりたい場所も沢山あるのに。
坂道を駆け上る。紅い日差しに照らされて伸びる大小の影。その背中におれは思わず叫んでいた。

「待ってくれ〜〜〜〜っ！！」

立ち止まる。息が切れる。苦しくて胸を押さえた。
クソ神父に背中を押されてレヴィはゆっくりと歩いてくる。レヴィのところに駆け寄って、その手を強く掴んだ。

「もう、行っちゃうのかよ……！？」

「……はい。イーサにはお世話になりました」

「もっとお世話になってもいいんだぞ！？　っていうか、むしろこっちが楽なくらいだしっ」

息切れしながら必死で語るのに、レヴィは嬉しそうに首を横に振る。そう、嬉しそうだった。とてもその表情は満ち足りていて、だからかけるべき言葉を見失ってしまう。
強く彼女の手を握るおれの指先に触れて、ゆっくりと、その指を解きながらレヴィは言った。

「まだ、旅の途中なので……。またいつか、会いに来ます」

「本当か……？　本当にか！？　おれのこと、忘れたりしないよな……！？」

「はい」

「あと、ええと……。お前、本当に魔女――なのか？」

彼女は何も答えない。言葉で答えない代わりに、指先から風を起こした。夕日の景色の中を草原の草達が舞い飛んで、紅い光を乱反射しながら空へ吸い込まれていく。

そんな景色に一瞬目を奪われていると、手を掴んでいたはずの少女は坂道の上……遠い場所で棺を背負って背を向けていた。

「きっとだぞ！　また、またいつでも来いよっ！！　くそ神父も一緒でいいから、また……っ！！」

レヴィは遠くで小さく頭を下げてゆっくりと手を振った。段々とその背中が見えなくなって、おれは力なくその場に座り込んだ。

夕日が段々と沈んで空が暗闇に飲み込まれる頃……。立ち上がり、おれは自分の家に戻ることにした。

たった三日間だけ――。そんな短い間。まるで夢のようで。だからきっと、とうさんもそうだったのだと思う。

けれどもたしかにおれは嘘つきなんかじゃない。おれは、魔女に会ったんだ――。

その日、おれはレヴィの夢を見た。

きっと本当の魔女っていうのはあんな可愛くて優しい女の子で、人間なんか食べたりしないごく普通の女の子で。

だから、そんな話をしたら今度こそ嘘つき呼ばわりされてしまいそうだけれど。けれどおれはそれでも構わない。

確かに彼女はここにいた。確かに魔法を見せてくれた。それは人を殺したりしてしまうような危険なものではなくて。とても優しい、温かいものだったけれど。

「イーーサーーっ！　あーそびーましょーっ！！」

眠気の拭い去れないベッドの中。差し込む朝日と一緒に元気な声が聴こえてくる。
起き上がって窓を開くと、家の前には町の子供たちが手を振っていた。もう嘘つきなんかじゃない。だから、胸を張って遊びにいける。畑仕事はあんまり手伝えなくなるけど、じいちゃんも許してくれるよな。

「お〜〜っ！」

手を振り返す。
今頃あの子はどこにいるのだろう。
まだあの子は棺を引いているのだろうか。
まるで夢のように、蒼い髪を靡かせて。

魔女は、棺を牽いて行く――。

#2　魔女は棺を牽いて行く（後書き）

～そし魔女劇場　教えてレヴィ子さん～

イーサ「なあレヴィ？」

レヴィ「なんですか？」

イーサ「こんな街中で魔法使ったら……大聖堂が黙ってないんじゃないか？」

レヴィ「……」

イルムガルド「全くしょうがねえな。何もわかっていないクソガキの為に俺様が説明してやろう」

レヴィ「イル様！」

イルムガルド「この街では魔女は信じられていない……というのが主な理由だな」

イーサ「まあ、だからおれはうそつき呼ばわりされてたんだしなぁ」

イルムガルド「魔女は教会公認の存在だが、魔女の旅を知っている人間は基本的に居ない。魔女の存在は信じている地域と信じていない地域に分かれていて、特に金に縁がない地区の人間は教会とも縁が薄く、魔女なんているわけねえと思っている」

イーサ「なんでそこで金が関係するんだよ……」

イルムガルド「そりゃ大人の事情ってヤツだ。だからその後豊かなリーベリアにはちゃんと危険を知らせる情報が入ってるだろ？　まあ、田舎農民が化け物が出たって話をしたところで教会はいちいち取り合わないんだよ」

イーサ「……い、いちいちムカツク」

レヴィ「つまり、田舎だから魔女が出ても大丈夫って事ですね！」

イーサ「……レヴィまで……ちくしょうっ！！」

イルムガルド「とはいえちょっとやりすぎだな。教会に通じている人間がいたらヤバかった所だ。基本的に魔法を使うのは控えろよ」

レヴィ「は、はい……。ごめんなさい」

#3　蒼い宝石箱の中で

「美しくない！　こんなの全然、わたくしに相応しくないわっ！！」

――そう、美しくないのだ。退屈なのだ。

毎日毎日同じような事が繰り返される日々……お屋敷の小さな窓から見下ろす世界。ああ、なんと退屈なことでしょう。これも全てはわたくしが美しすぎるから。自分より美しいものが見つからないから、ちっとも満たされないのだ。

執事の困った表情から視線を逸らす。何が献上品の宝石だ。こんなのちっともきれいなんかじゃない。わたくしに相応しくない。

「だってそもそも……その宝石、蒼くないじゃないの！」

「は……っ。ですが、献上品の中で最も高価なもので、旦那様もお嬢様の為を思って……」

「もういいわ！　お父様に言って換えてきてもらって頂戴！　蒼くない宝石なんて、醜いだけだわっ！！」

頭を下げて慌てて部屋から出て行く執事。そう、わたくしに似合う色は“蒼色”だけ。だから部屋も真っ青　屋敷も真っ青。街も何もかもま～～～～～っさおになればいい。

だって蒼が一番好きだから。蒼が一番綺麗だから。蒼以外の色なんてなければいいのに。溜息ばかりが出てしまう。

今日のわたくしのドレスも蒼一色。これ以上に綺麗なドレスなんかないから、クローゼットの中には同じ衣装がずらりと並んでいる。

だってこれ以外のドレスなんて全然綺麗じゃない。お父様はそれがわかってないから、赤とか白とか、そんな色のドレスばかりわた

くしに買い与える。でもそれってわたくしのことわかっていらっしゃらない証拠。お父様なんて、どうせわたくしのことなんかなぁんにも考えていないんだわ。
そう思うとなんだかイライラする。蒼いウサギの縫いぐるみを壁に投げつけ、蒼い縁の窓を開け放つ。空しか見ない。だって空は蒼いから。下を見たところで、蒼いものなんてなぁんにもありはしないもの。

「はあ……。どうしてわたくし、海辺に産まれなかったのかしら」

わたくしほど蒼の似合う女性なら、やっぱりとんでもなく真っ青なものの近くにいるべきだと思うのに――。
溜息を着きながら窓辺に手を触れる。気分はいつも通り憂鬱――――そう、気まぐれで下を見てしまうまでは。
そこには旅人の姿があった。片方は神父。顔は確かにちょっとは整っているけれど、真っ黒の装束でちっとも美しくなんかない。わたくしが感動したのはその傍らを歩く蒼い髪の少女だ。風に煌く蒼い髪――――あんな髪色、見た事がない。

「あれよ……。あれこそわたくしに相応しいわ……！」

何て美しい少女なのだろう。気づけばわたくしは部屋を飛び出していた。
スカートを捲し上げて廊下を走る。蒼いカーペットの上を。そうして吹き抜けの螺旋階段の上から、玄関を掃除している執事に叫んだ。

「セバスチャンッ！！　蒼よ！　蒼い女の子よっ！！」

「は……？　お嬢様、今度は何を……？」

「だから、蒼なのよ！　真っ青の女の子！　とっても素敵！　あれ欲しい！　欲しいのっ！！」

ああもう、じれったい！　どうして判ってくれないのかしら。そんな間の抜けた顔しなくたっていいじゃない。

階段を駆け下りながら叫び続ける。自分でも興奮しているのがよくわかった。でも仕方ない。だってあんなの――素敵すぎる。

「すごく欲しいの！　あれ、わたくしのものにしたい！　セバスチャン、つれてきて！　早くしないと彼方に消えてしまうからっ！！」

「は……？」

「いいから早く！　今すぐ扉を開け放って！　全力で駆けなさい！！」

「かっ、畏まりました……！　不肖このセバスチャン、老体に出来うる限り全力で……！」

「も～～！　いいから早くしなさいよ愚図っ！！　天使が消えてしまったら、貴方の責任問題ですからねっ！！」

「は、はいっ！」

扉が放たれる。興奮と素敵な予感に背筋がぞくぞくした。あれこそ、わたくしが長年求めてきた究極の美しいものなのだと、確信しているから――。

#3　蒼い宝石箱の中で

「で――？　何で俺たちは呼び止められたんだ？」

客間の椅子に腰掛けた柄の悪い神父はそう言って腕を組んだまま首をかしげた。

セバスチャンがつれてきた二人をお父様には内緒で客間に案内し、お父様にはばれないように外にセバスチャンを待機させた。広い広い客間の中では多少の声なんて外には聴こえないし、ここでなら思いっきり、しかもゆっくりと話が出来る。

問題はこの神父だ……。やたら長身でよく見れば細いくせにがっちりした体型をしている。腰には剣を携えていることから、恐らくはヨト信仰……つまりはクィリアダリアの“修道騎士”。

クィリアダリアと言えば大陸最強最大の宗教国家。しかも肩に携えている金の装飾と装束の襟章からして、恐らくはそれなりに地位のある騎士だ。下手な事をすれば計画が看破されるどころか、我がハートウェイト家に不利益な影響を齎されるかもしれない。

セバスチャンとわたくしの二人だけではどう考えても取り押さえる事なんて出来そうもないし、衛兵を使おうにも目立ちすぎる。そもそもこの騎士、先ほどから一瞬たりとも剣から手を離していない……。つまり最初から警戒されているということ。

「旅の修道騎士様とお見受け致しますが……いかが？」

ここは適当な言い訳で丸め込み、とにかくこの屋敷に滞在させるように差し向けなければ。時間さえ稼げれば、その間に手段はどうにでもなるだろう。

「わたくしはリーベリア領主、ロイド・ハートウェイトが長女……アミュレット・ハートウェイトと申しますわ。どうぞ、以後お見知りおきを」

「そいつはご丁寧にどうも……。俺は聖クィリアダリア王国第二法位聖修道騎士イルムガルドだ。で、こっちはレヴィアンクロウ」

くああっ！！　小さく頷く女の子……レヴィアンクロウと言うのね！　とってもらぶりーでちゃーみんぐで……し、死にそうだわっ！

でも問題はこの男がクィリアダリアの“聖騎士”というところにある。聖騎士と言えばただの修道騎士などではない、神官相当の権限を持つ退魔討伐のエキスパートではないか。　これは予想外だ……。何より絶対数が限りなく少ない聖騎士がこんな場所で、こんな格好で、こんな態度で現れるなんて予想出来るはずもない。けれどその驚きは胸の中で。表面上は穏やかに……。それくらい出来なくて次期リーベリア当主は名乗れない。

神官相当の権限など、クィリアダリア王国内部では口を利くことさえ恐れ多い立場だと聞くけれど、この町じゃ知った事ではない。何せこの町は独立自治をクィリアダリアに許されたリーベリア領なのだから。そしてわたくしはリーベリア領主の娘――。となれば、彼と対等に口を利くくらいの権利は持ち合わせている。少なくともこの町の中だけならば。

それにしても気に入らないこの目つき……。まるで全てを見透かしているような、見下しているような目。これだからクィリアダリアの騎士は嫌なのだ。戦争勝利国だかなんだか知らないが、何がヨト信仰なんだか。そんな事をしている暇があったら民の為に施政して欲しいところである。

まあいい……。他国の宗教など興味はない。どうせまだリーベリアにはヨト信仰なんて広まっていないのだ。完全にこちらのホーム。

臆する事無く堂々と胸を張っていれば良いのだ。

「イルムガルド様、どのような目的で旅をされているのかは推し測りかねますが、何か大義のご様子。こちらで一晩、旅の疲れをゆるりと癒して行かれてはどうでしょうか？」

「何だ、泊めてくれるのか？　よかったなレヴィ、今日は野宿しなくて済みそうだぞ～」

「マスター……いいのですか？」

何て綺麗な声！　なんだかわたくしドキドキしてきてしまったわ……。

「あ？　別にいいんじゃねえか？　あー……アミュレットお嬢様？　泊めてもらう間はこの小娘を好きに使ってくれていいぞ」

「好きに使っていい、ですって！？」

思わず机を両手で叩いて身を乗り出した。はしたないけれどそんなことはどうでもいい。今この男は何て言った？

“好きに使って良い”、ですって？　何て幸運！　ああ、ハレルヤ！　ヨト信仰万歳！　聖騎士万歳！！！　大慌てでテーブルの向こう側まで回りこみ、少女の小さな手を両手で握り締めた。

「それじゃあレヴィアンクロウ！　今日は一日わたくしと一緒に働いてもらいますからねっ！！」

「え……？　え……あ……？　は、はい……？」

驚いたレヴィアンクロウの表情。ああ、可愛らしい……そう思って見蕩れていたら、わたくしは重大すぎる事実に気づいた。この女の子――なんとオッドアイなのだ。左が蒼で、右目は……ああ、なんてことでしょう？　赤い色……。
わたくしはすぐさま少女の右目を手でふさぎ、自らの蒼いドレスの裾を引き裂いてレヴィアンクロウの右目に巻く。これで蒼一色。ああ、美しい。これでこそわたくしの天使……。

「これでよし……。それではイルムガルド様はお部屋で休んでいてくださいませ。執事に部屋まで案内させますわ」

「あいよ。おいレヴィ子、しっかり働けよ」

「はい、マスター」

「それでは失礼致しますわっ！　うふふふ～！」

少女の手を引き部屋を飛び出し、螺旋階段を駆け抜けて自分の部屋にまっしぐら。部屋に飛び込むと鍵をかける。その音に驚いた少女が目を丸くしているが、そんなのは関係ない。
クローゼットを開いて蒼いドレスを用意する。蒼いリボンも必要だろう。後は蒼いぬいぐるみ。大丈夫、蒼いものならこの部屋に足りないものなんて空と海くらいのものだ。

「さっ！！　まずは着替えましょうか！？」

「え……？　あっ、ひゃあっ！？」

「もう、抵抗しても無駄よ……？　さあ、さっさとお脱ぎなさいっ！！」

「マスターっ！！　マスタ〜〜っ！！」

そんなわけで数分後。しっかりと蒼い衣装に着替えたレヴィアンクロウは、とっても、とっても、とおーーっても、美しかった。

素敵過ぎて溜息が出てしまう。胸に手を当てながらその周りをグルグル回ってあらゆる角度から堪能する。ああ、なんて美しい。

「素敵だわレヴィ……！　貴女まるで奇跡のようね！」

「え、えぇと……？」

「まあ、ベッドに掛けて？　うん、とっても素敵！　似合ってるわ……。貴女、どこからいらしたの？」

「……クィリアダリアの王都から」

「あら、オルヴェンブルム？　“魔女狩りの町”ね……。随分と遠くから」

「はい……」

気のせいだろうか？　魔女狩りの町、という言葉を耳にした瞬間、レヴィの表情が曇ってしまったような気がする。聖王都オルヴェンブルム――。異端を狩るヨト信仰の最も盛んな王都では、頻繁に魔女狩りが行われていたと聞く。

見聞を広める意味で魔女狩りの記事を調べた事があるけれど、誤認で沢山の女性が殺められたらしいその事件は、やはりオルヴェンブルムの民にとっては余り好き好んで聞きたいような言葉ではなかったのかもしれない。

「ごめんなさいね。少し、気が利かなかったかしら」

「あ、いえ……大丈夫です。ありがとうございます」

「そう？　ふふふ……っ！　ねえ、そう畏まらなくてもいいのよ？　どうせわたくしたち、歳は似たようなものでしょう？　わたくし今年で十六になるのだけれど、貴女は？」

「今年で十三になります」

「まあ、可愛らしい！　ねえ、ちょっと抱きしめてもいいかしら？」

「えっ？　えっ？　え……ど、どうぞ」

「んぅ～～～～っ！　素敵だわ！　とっても綺麗な髪っ！　蒼くて綺麗！　素敵、綺麗、素敵っ！！」

「ううっ」

思わず抱き寄せて頬擦りしてしまう。それくらいに愛らしいのだ。最早これは人を殺せる領域に違いない。ああ、らぶりー。

恥ずかしいのか視線を逸らして頬を赤らめているのがまた堪らない。リボンで髪を結わいながら背後から少女に尋ねた。

「あなた、どうしてこんな髪の色をしているの？　まるで青空を切り取ったみたいに真っ青なんて」

この世の人間にこんな髪色が存在するのだろうか？　わたくしがいくら望んでも、髪と瞳だけは蒼にできなかったというのに。

どんな財力を以ってしても叶えられない理想。ならばそれを実現している人間に手段を問いたくなるのは仕方のない事だろう。しかし少女は自らの髪を指先で摘みながら、悲しそうに首を横に振った。

「こんなの……全然、綺麗なんかじゃありません」

「あらどうして？　とても素敵じゃないの」

リーベリアの民がそんな事を言ったのなら打ち首にでもしてやりたい気分だけれど、彼女が言うと何故だか許せる気がする。優しく問い掛けると、少女は小さく溜息を着いて蒼い瞳でわたくしを見つめた。

「アミュレット様は……」

「呼び捨てでいいわよ」

言葉を遮る。言葉を飲み込んでレヴィは目を丸くした。

「んと……アミュレット様……」

「呼び捨てにしなさい」

「……むりです」

「良いから早くしなさい」

「……」

何度も口を開き、助けを求めるような視線を向けてくる。　それ

が堪らなく可愛くて、また意地悪をしたくなる。しばらくにやにやしながら眺めていると、少女は目を伏せて小さな声で呟いた。

「……アミュレット……さん」

「ま……そのへんで妥協しておくわ。　それで、何かしら？」

「アミュレットさんは……蒼い色が好きなんですか？」

「そうよ？　見たでしょこのリーベリアを」

そう、リーベリアの町にある建造物は何もかも真っ青なのだ。外装を全て蒼のペンキで塗りつぶし、定期的に舗装も行っている。領主であるこのハートウェイト家の屋敷だって蒼一色。ここに至るまで全てが蒼一色で、わたくしの部屋にも蒼以外のものなんて存在しない。

「だって蒼より綺麗なものなんてありはしないもの。蒼色以外なんて、必要ないわ」

「そうでしょうか……？　わたしは、この髪――嫌いです」

「えっ？」

理解出来ない……。レヴィは俯き、鏡の中に映りこむきらきら光る蒼い髪を見つめ、目を細めていた。何故そんな顔をするのだろう。こんなにも綺麗な、素敵な、最高な姿で、何故。

「それに、アミュレットさんは十分綺麗ではないですか」

「そんなの当たり前じゃない。だってわたくしなのよ？　綺麗でないはずがないわ。それより蒼い貴女の方が素敵だってことよ」

「……あの、どうしてそんなに蒼にこだわるのですか？」

「どうして、ですって？」

小さく頷く顔。わたくしは腕を組み、天井を見上げて考える。そういわれてみると何故蒼が最高で何故蒼が究極で何故蒼が素敵なのか、良く分からなくなる。

確かに理屈もなく素晴らしいものってあると思う。分けが判らなくても伝わるものってあると思う。例えば異国の言葉で綴られた音楽とか、どういう成り立ちで構成されているのかさっぱりわからない絵画とか。

でも素晴らしいものは確かに素晴らしく、見た瞬間心に、魂に、訴えかけてくる何かがあるものなのだ。それはわたくしにとっての蒼となんら変わらない。

「理由なんて必要ないわ。美しいものは美しいもの」

「あの……。では、他の色はどうして美しくないのでしょうか？」

「どうして、ですって？」

全く同じ言葉を繰り返す。他の色はどうして美しくないのか。これまた理由を丁寧に考えてみると良く分からなくなってくる。けれどその時わたくしはその理由を深く考える事はしなかった。その理由が何であれ、蒼が最高の色で最高に綺麗だという事実は何ら揺るがないのだから。

日が暮れるまでレヴィを弄繰り回し、一緒にお風呂に浸かり、夜

になるとベッドに一緒に入り、彼女を抱いて眠った。そうして一日が過ぎると既にレヴィを手放したくなくなっている自分がいて、わたくしは迷わずに計画を実行に移した。
翌日の早朝……。まだ眠ったままの神父を縄で縛り、地下牢に閉じ込めた。しばらくそのまま眠っていた神父だったが、流石におかしい状況に気づいたのか目を覚まし、両手足が縛られている事に気づくとあくびをしながら言った。

「あー……？　なんだこりゃ？」

「うふふふっ！　貴方には申し訳ないけれど、貴方達の旅はここで終わりを告げるの。イルムガルド様の旅は終了、レヴィアンクロウはこれからわたくしが責任を持って面倒見ますから、安心してそこで朽ち果ててくださいな」

「おいおい、冗談だろ？　つーか俺の剣はどうした」

「剣は騎士の魂……最高の得物ではないですか。それをむざむざ騎士と一緒にするなんて事しませんわ。この剣はわたくしが責任を持って管理します」

「……そんなに責任持ってくれなくてもいいんだけどな」

「セバスチャン、あとは任せるわ。あとこの牢の扉は厳重に鍵を掛けて誰も近づかないように管理すること」

「しかしお嬢様……これは流石にやりすぎでは……」

「お黙りなさい！　そろそろレヴィが起きてしまうわ。わたくしも部屋に戻らなくては……。それでは失礼、聖騎士様」

背後でなにやらぶつぶつ言っている聖騎士を置き去りに地下牢を後にする。ああ、すっきり！　これでレヴィアンクロウはわたくしだけのものになる。これほど幸せな事ってないわ。今となっては蒼い町も、館も、部屋も、まるで意味をなくしてしまったよう。

最高に幸せなものが目の前にあるとそれまであったちっぽけな幸せなんて色あせてしまうものなのだと、わたくしはその時初めて気づいた。ステップでも刻みたい気分で部屋に戻ると、起きたばかりなのか眠たげに目を擦っているレヴィアンクロウの姿があった。

「おはよう、レヴィ。気持ちの良い朝ね」

「はい……。あの…おはようございます」

蒼い髪についた寝癖を丁寧に宝石で装飾された高価な櫛で梳く。その滑らかな指通りはまるで流水の中に手を入れたような心地よさだった。

ああ、なんという幸運！　この子がいかなる理由で旅をしていたのかは知らないけれど、この館の中より幸せなことなんてないはず。旅なんて続けていても辛い事ばかりだし、この館に居れば生活に苦しむこともない。何より蒼に囲まれていて、彼女が嫌いだというその髪も目立たなくなることだろう。

そんな事を考えながら着替えを済ませ、二人で朝食を摂りに向かう。どうせ今日もお父様もお母様も顔を出さないだろうから、一緒に行ったところでなんら問題もない。二人で螺旋階段を降りて食堂へ……。セバスチャンに予め用意させておいた料理は二人分。隣り合った席につき、わたくしたちは朝食を開始した。

しばらくは寝ぼけていたのか、うとうとしながらパンを齧っていたレヴィだったが、やがて異変に気づく。そう、つい昨日までずっと連れ去っていた旅の同士が居なくなっていたのだ。無論、聖騎士

様は地下牢に繋がれているので食卓に顔を出すはずも無いのだが。
口元にブルーベリーのジャムをくっつけたまま不安そうにレヴィはわたくしのドレスの裾を引き、首をかしげた。

「あのう……？　マスターは……？」

「そういえば、聖騎士様の姿が見えないわね。彼、朝早くにどこかに出かけたみたいだったけれど、まだ戻らないのかしら？」

「え――っ」

かたん――。

レヴィの手からバターナイフが転がり落ちて軽い音が食卓に響いた。驚いたのはわたくしの方だった。レヴィはすぐさま立ち上がると慌てた様子で食卓を飛び出していく。

「ま、待って！　レヴィ！」

慌ててその後を追う。少女は玄関を飛び出し、太陽の下、蒼いドレスの裾を掴んで懸命に走っていく。きょろきょろと、周囲を見渡して……。どこにいるかも知れない、旅の同士を探す。いや、その眼差しはまるで迷子になってしまった幼い少女のようで、とても切羽詰っていて、とても寂しそうで。

「マスター――――っ！！」

大きな声で叫ぶ。とは言え、実際はそれほど大きな音量ではなか

ったのかもしれない。けれどもわたくしには判る……。その小さな声は、彼女に出せる最大限の大きな声なのだ。
何度も何度もその名前を叫び、当ても無く走り回る。その速度はわたくしのハイヒールでも追いつける程で、とてもゆっくりだったけれど。懸命に……。

「マスター！　マスターっ！！　マスター、マスターっ！！」

あんまりにも何度も何度もその名前を呼び、挙句の果て泣きながらその場に座り込んでしまうものだから。胸がずきずき痛んで、今までどんなに横暴な事をしたって全然胸なんか痛まなかったのに、急に苦しくなって。
少しだけ離れた場所で少女を眺め続ける。蒼い髪の少女は太陽の下、惜しげもなく涙を零しながら空に叫んでいた。何故、あんなにも悲しそうなのだろう……。

「そ、そのうち戻ってくるわよきっと。それまでわたくしの部屋で休みましょう？　ねっ？」

レヴィの涙は止まらなかった。まるで世界が終わってしまったかのような悲しみ方をする。両手で涙をずっと拭い続け、綺麗な蒼い瞳が涙で輝いて余計に綺麗に見える。けれど何故か嬉しくない……。部屋に戻ってもレヴィは泣き続け、ベッドの上で枕を抱いてずっと嗚咽を殺し続けていた。

「ねぇ……」

少女の隣に腰掛ける。その背中を擦り、肩を抱き寄せながら尋ねた。

「そんなに……あの騎士様が大事なの？」

いまいちそれは理解出来ない感情だった。だって、人間なんて変わりはいくらでもいるじゃない。

死のうが増えようが、そこそこバランスが取れるように出来てる。余程の飢饉や疫病でも蔓延しない限り、人はそこそこ増えて、そこそこ死ぬ。別に一人や二人いなくなったところでいちいち悲しむ必要なんてないのに。

レヴィは泣きはらした瞳でわたくしを見つめる。それから甘えるように胸に飛び込み、弱弱しい力でドレスを掴んだ。

「わたしには……イル様しか……いないんです…」

「どうして？　貴女ほど可愛い女の子なら、他にも男なんていくらでも作れるじゃない」

「……」

「それにあいつ、どう考えても態度も悪いし平民出身に決まってるわ。自分の身が可愛くなって、旅が面倒になったものだから、貴方をおいて逃げ出した可能性だって……わあああああっ！？　大丈夫！　きっと戻ってくるわっ！！　一緒に信じて待ちましょうっ！？」

今にも泣き出しそうなうるんだ瞳で見つめられるともうそれ以上何も言えなくなってしまった。けれどイルムガルドは戻らない。何せ地下牢に入っているのだ。わたくしが開放しない限りあの男はあそこから一歩も出てくることはないし、誰かに見つけられて救助される可能性もない。

つまり、今泣きじゃくっている女の子を救えるのはわたくしだけ。皮肉にも彼女を泣かせているのも、その涙を止める事が出来るのも、

わたくしだけだったのだ――。

さて、ここで少し昔話をしようと思う――。

リーベリアという町は、山岳地帯にある小さな町で、しかし各方面を山を経由して繋ぐ町として交易に栄えた。代々ハートウェイト家の人間が町を管理し、政を執り行い、人々の上に立ってきた。

それはちょっとした由緒正しい家柄……いや、ちょっとしたなんてものではない。かなり。由緒正しい家柄だ。故にお父様もお母様も町のことに夢中でわたくしにはお構いなしだった。昔は寂しくてよく泣いていたものだけれど、気づけばお父様はわたくしに様々な送り物をして機嫌をとるようになり、わたくしもそれを要求し続けその贈り物はどんどんエスカレートしていったように思う。

そうなってくると最早気が弱く、ハートウェイト家に嫁入りしたお母様が口を挟める余地は無く。だからわたしは贈り物を求め続けた。もっと綺麗なものを。もっと素敵なものを。もっともっと、楽しいものを――。

寂しさも悲しさも必要ない。時には街の人間にわたくしのための歌を歌わせたり、旅の芸者を一ヶ月屋敷に寝泊りさせて毎日毎日違った芸をさせたりもした。けれどどこか物足りない。何をさせてもなんだか気分が晴れない。だから気づけば、青空のような自由な蒼を好むようになっていた。

その理由は他にもある。それはずっと忘れていたけれど、わたくしがまだレヴィよりも幼かった頃の話だ。一度だけお父様が自分の手でわたくしに贈り物をしてくれた事があった。最近は執事越しに、というのが当たり前になり、顔さえみていないようなお父様だけれど、昔、たった一度だけだけれど、プレゼントを手渡ししてくれた事があったのだ。

その時お父様がわたくしの髪につけてくださったのが、蒼い蝶の

髪飾り――今もそれはわたくしの髪に留まったまま、蒼い光を反射している。蒼はお父様がわたくしに送ってくれた美しさの象徴だった。そうしてもっと愛を、もっとプレゼントを……そう願っている内に気づけば蒼だらけになってしまったのかもしれない。

そう――。幸せなんてものは、いざ手に入れてしまうと物足りなくなり……。もっともっと、今よりもっと幸せを。今日より明日に幸せを。明日より明後日に幸せを……そうやってエスカレートしていく欲望のせいで、わたくしの世界は蒼一色になってしまっていたのかもしれない。

だからそうなのだ。レヴィアンクロウを手に入れたと思った瞬間、何か全てが物足りなくなってしまったではないか。蒼い壁紙もカーペットも椅子もテーブルもなんだか空しく見える。いや、元からそこに価値などあったのだろうか。

どれも所詮は思い一つだ。だからその想いを越えるものに出会ってしまった時、感動は色あせてしまう――そう、この壁紙やカーペットや椅子やテーブルのように。

膝の上に乗せたまま、俯いている少女を背後から抱きしめる。この少女は美しい。美しく、可憐で、純粋で――まるで子供が持つ美しさを凝縮した、空が落とした涙のような奇跡。だからこそわたくしは彼女に惹かれた。蒼ければ良いというものではない。自分で選び、自分で決めたのだ。

けれど、わたくしは彼女の幸せを奪ってしまった。大切な人を奪ってしまった。代わりなんているはずがないのだ。だから、そうなんじゃないのか。代わりなんかいないから、ずっと求めていたのではないのか。

わたしがお父様にプレゼントをねだり続けるのは何故？　蒼でなくては許さないなんて、わがままを言い続けていたのは何故？　判らなくなる。自分のしてきた事の意味が……。少女は純粋すぎて、わたくしが思いも寄らないような一面を映し出してしまう。

泣き疲れて眠るレヴィをベッドの上に寝かせて部屋を出ると、廊

下ではセバスチャンが待っていた。

「セバスチャン……。どうかしたの？」

「お嬢様！　ご無礼を承知で申し上げさせて頂きます……！」

深々と頭を下げるセバスチャン。けれどわたくしはそれを制して顔を上げるように促した。金色の髪を掻きあげ、首を横に振る。毎日毎日わたくしにお説教ばかりするものだから、もう言われなくても判るようになってしまったわ。

「やりすぎだって言いたいのでしょう、セバスチャン」

「は……。あのような幼い少女が悲しんでいるのを見るのは、セバスチャンには辛いのです……。まるで幼き日のお嬢様を見ているようで…」

「……え？　わ、わたくし？」

「左様でございます」

それは、予想しなかった言葉だった。白髪だらけの髭を生やした執事は頷き、遠き日々を思い出すように懐かしそうに目を細めて笑った。

「お嬢様には昔から手を焼かされました。しかし、本当は寂しくて……故にセバスチャンめを困らせていたのでしょう。普段はどんなに笑っていても、どんなに強がっていても、お嬢様は寂しがりのどこにでもいる女の子でしたからな」

「セ、セバスチャン……！　余計な事を言うと許さないわよ！」

「ほっほっほ……。ただ…それでもお嬢様があの少女を手にしたいというのであれば、セバスチャンめも硬く口を閉じてお嬢様についていきましょう。私にとって大切なのは、お嬢様……あなたが笑ってくれていることなのですからね」

「……」

目を丸くする。それから小さく溜息を着いて、眉を潜めて微笑んだ。

「何よ……。まるでわたくしが、全部悪いみたいじゃないの――――」

セバスチャンの手から南京錠の鍵を受け取る。重くて冷たいその鍵は、自分自身を閉じ込めていた扉を開け放つ鍵だったのかもしれない――。

「本当に、ごめんなさい」

太陽の下、深々と頭を下げる。ずっと縄で縛られていた両手が痛いのか、神父はしきりにそこを擦りながら眠たげにあくびをしていた。というか、どうもこの神父地下牢に閉じ込められている間ずっと眠っていたようで……。一体どんな神経の持ち主なのか正気を疑うばかりだけれど、なんにせよ特に怒っても居ない様子だったのでこちらとしては救いなのだけれど。

棺桶を担ぎ、レヴィは困ったような表情で顔を上げる。その格好は蒼いドレスのままで、髪は蒼いリボンで結ばれている。太陽の光

を透かし、蒼は美しく光沢していた。

「あの……アミュレットさん……」

「いいのよ、もう……。本当にごめんなさいね。謝って済むようなことではないけれど……」

屈んで小さなお嬢様の頬に触れる。レヴィは首を小さく横に振り、それからわたくしの手を取って微笑んだ。

「なんだか……お姉さんが出来たようで……楽しかったです」

「お姉ちゃんって呼んでくれても良かったのに。わたくしも、貴女みたいな妹がいたら良かったわ」

頭を優しく撫で、それから自分の髪に留まっていた蒼い蝶を羽ばたかせる。思いを乗せた蝶はわたくしの髪から少女の髪へと移り、静かに羽を休めた。

「お詫びにもならないけれど、旅のお供に連れて行ってもらえるかしら？」

「……はいっ」

「またいつか会う時、その髪飾りがあればわたくしはすぐに貴女を見つけられるわ。髪の色が違ってしまっても構わない。けれどねレヴィ、その髪は貴女にとって変えようの無いものだから。変わらない美しさだから。嫌いなんていわないで、もっと好きになってあげて」

少しだけ困ったような表情を浮かべるレヴィだったが、最終的には小さく頷いてくれた。その髪色にどんな曰くがあるのかは判らない。人と違いすぎる事が苦しみになることもあるのかもしれない。けれどそれは贔屓目に見なくたって美しい。

それはまるで異国の言葉で綴られた歌のように。わけのわからない構造の絵のように。当たり前のように心を打つ素敵な問答無用――。

「イルムガルド様。これは少ないですが路銀の足しにしてください」

「おっ、助かるぜ。掴まってよかったくらいだ……なぁ、レヴィ？」

「もう……マスター！」

いくらかの宝石を詰めた蒼い宝石箱。それを手に取り、レヴィは微笑んでいた。棺桶を牽き、少女は歩き出す。その背中が見えなくなるまで見送って、それからわたくしは空を見上げた。

「あ～あ、行っちゃったかあ」

これでも、結構がんばったのだ。泣かないように、こらえたのだ。本当に妹になってほしいって、思ってしまったのだ。呼び止めたくて、一緒にいてほしくて、でも我慢したのだ。

「うん……。よし……！」

気分を入れ替えよう。気づけば周囲は草原。木々が風に揺れ、緑が踊っている。ざわめき揺れる木漏れ日の下、深く息をついた。

「――悪くないじゃない、緑とかも」

そんな事を呟きながら振り返ると、セバスチャンが慌てた様子でこちらに向かって走ってきた。歳なんだから無理せず歩けばいいのに、必死で息を切らしながら駆け寄ってきたセバスチャンは無言で一枚の手紙を手渡した。

「け、今朝……ポストに入っていたものです……！　隣町の……ヨートリアで……ま、魔女が出たそうで……っ！」

「魔女？　魔女ってあの、魔女？」

「はい……！　地面を裂き、津波を起こし、竜巻で家を倒壊させたとかで……！　今、近隣の町に警戒が促されているようです！」

「そりゃ物騒ねぇ……。お父様に伝えて対策を練らないと……」

「い、いや……それがですね。その魔女というのがですね……」

歯切れ悪く語るセバスチャンの手から引ったくり、手紙を見る。魔女の特徴と人相――。幼い少女で、髪色は蒼。宝石のような朱と蒼の瞳が特徴で――。

「……そう。あの子……魔女だったのね」

「いやいや、お嬢様……魔女だったのねとか、そういうことではございませんぞ……！？　ああっ！？」

思い切り手紙を細切れにちぎって風に飛ばす。白い紙の断片は風に乗って蒼い町に降り注ぐ。その景色を見送り、風に吹かれて目を細めた。

「お、お嬢様！？」

「だったら気にする事はないわ。彼女たちの旅が成功するように、ここでわたくしも応援します。異論は認めませんよ？　それよりセバスチャン、用具室からペンキを持ってきて。しかもありったけの量を」

「は、はあ……。して、何色を？」

腰に手を当て、毅然として。白い歯を見せて、無邪気に笑って見せるのだ。

「うちにある全色、ありったけよ！」

絵の具と言う絵の具でわたくしの世界を塗り替えまくってやる。わたくしにはセバスチャンがいる。一人なんかではない。お父様がいる。わがままに付き合ってくれる町のみんながいる。

今度は何かみんなに贈り物をしよう。けれどまずはその前に――この町が真っ青なだなんて、言われないように。

ドレスの裾をたくし上げ、縛る。　袖を捲くり、髪を結わう。セバスチャンが持ってきたペンキがたんまり詰まった缶に巨大な刷毛を突っ込んで屋敷の壁に向かって大きく振るう。

力いっぱい、蒼を赤で塗りつぶして――。

「次にレヴィが来る時には、『虹色の街』なんて呼ばれてる……そんな未来、どうかしら？」

困った顔でセバスチャンは笑う。頬についたペンキを拭い、汚れ

まくったままわたくしたちは一緒に屋敷の壁を塗りつぶした。
使用人の一人が悲鳴を上げる。直にお父様が駆けつけて、思いっきり怒られるだろう。それはそれで構わない。セバスチャンと一緒だから怖くない。それに、一度くらい、思い切り怒られるべきなのだろう、わたくしは。
太陽に手を翳し、全てを過去にする――――。結局幸せはすぐ傍にあって、わたくしはそれを塗りつぶしてしまっていた。

「こらーーーー！！　何をしているんだ、アミュレットォ！！」

「ごめんなさい、お父様〜〜っ！！」

カラフルに、子供っぽく、ふっとばしてやるのだ。
この、蒼い宝石箱を――。

#3　蒼い宝石箱の中で（後書き）

～そし魔女劇場　教えてレヴィ子さん～

レヴィ「あのう、アミュレットさん？」

アミュレット「何かしら、レヴィ」

レヴィ「リーベリアは自治領なんですよね？　自治領ってなんですか？」

アミュレット「現在ユーテリア大陸を支配しているクィリアダリアに、自治を任され、宗教、政治等の面において自由を約束されている場所の事よ」

イルムガルド「通常、クィリアダリア支配下にある大陸ではヨト信仰が強制化され、領土もクィリアダリアの息のかかった者が治める事になるのは知っているな？」

レヴィ「は、はいっ」

アミュレット「でも、それじゃあ上手く行かない場所も少なくないのよ。特にリーベリアは昔からの中立地帯で、魔女戦争末期にクィリアダリアから戦争後の自治化を約束してもらって加担したという取り決めがあり、特例として自治を許されている場所なのよ」

クィリアダリア「リーベリアの領土内であれば、何が起きても全て責任はハートウェイト家にあるわけだが、逆に言えば領土内なら何をやってもいいわけだ」

アミュレット「ええ。そこの聖騎士さんよりよほど力があるのよ」

レヴィ「……アミュレットさんって、とってもすごい人だったんですね」

アミュレット「ふふふ、まあそれほどでもあるけどね」

レヴィ「あの、もう一ついいですか？」

アミュレット「なんでも聞きなさい！」

レヴィ「あの、なんでお肌は蒼くしないんですか？」

二人「「　え？　」」

レヴィ「だって、蒼が一番綺麗なら、お肌も青く塗るべきなんじゃ……」

アミュレット「……」

イルムガルド「……。邪魔したなアミュレット。俺たちは行くぞ」

レヴィ「え？　え？」

イルムガルド「いいから来い……」

レヴィ「えっ！？」

#4　エトリアの魔女（前書き）

本当ならこれが第一話。
あとなんか昨日ログインできませんでした・・・なんで？

#4　エトリアの魔女

バッタリと――。唐突に倒れたレヴィはぴくりとも動かず、降りしきる雨のに打たれながら顔面から泥水に向かってダイブしていた。
リーベリアを後にして丸一日が過ぎた。目的地に向かう為に超えねばならない山脈の険しい道は俺が思っていた以上にレヴィの体力を奪っていたらしい。
とにかく、そこが子供の限界だったのだろう。ぱったりと倒れたまま全く動かないレヴィを置いていくわけにも行かず、仕方なく立ち止まる。

「おい」

返事がない。いつもなら少し声をかけるだけで懸命に追いついてくるのだが、ぴくりとも動かない。
振り返り、屈む。棺桶に押しつぶされそうになっている小さな体。手を引き、もう一度呼びかけてみる。

「起きろレヴィ。　んなところで寝ていたら流石に死ぬぞ」

「……う……っ」

ようやく反応する。泥の中から顔を上げようとして、それからもう一度そこに顔を突っ込んだ。もう本当に一歩も動けない状態にあるらしい。手を離すと、小さな手は泥水の中に音を立てて埋もれた。
悪天候のせいでぬかるんだ大地は……俺にはともかく、レヴィにはつらいものだったらしい。まあ当然の事だ。俺のペースに合わせて来たのだ、倒れない方がおかしい。
予定ならば既に山小屋に到着し、休んでいるはずだったのだが、

悪路に苦しめられ予定より進行が大幅に遅れてしまった。とっぷりと日は暮れ、しかし休める場所などない。雨に打たれながら必死に歩いていたレヴィだったが、だんだんと足取りが重くなり……結局は倒れた。

「起きないのなら置いて行くぞ。お前の旅はここまでだ。俺はクィリアダリアに帰る……それが嫌ならば立て。立って歩け」

「……」

泥に爪を立て、小さな体を震わせて必死で立ち上がろうとするレヴィ。しかしやがて動かなくなる。大量の荷物も衣類も雨水を吸い込み重量はかなり増しているはず。もう立ち上がる力すら残されていないらしい。

レヴィが倒れるのはこの旅が始まって三度目の事だ。故に対処方法も熟知しているものの、助けるのには抵抗があった。この旅はレヴィが自らの力で乗り越えねばならないものであり、俺が手を貸す事は本来あってはならない。

聖騎士としての立場を利用すればこんな悪路を利用せずともそもそも済む話。だがあえてレヴィは自らこの道を選んだのだ。こんな雨の中ほうっておいたら、本当に死んでしまうかもしれない。弱りきった今のままでは尚の事である。

「はぁ……」

仕方ない――。荷物を担ぎ、片手でレヴィを抱きかかえた。昔はこんな荷物よりも重い装備であちこち駆け回ったのだ。この程度どうということもない。

旅の所為か、やせ細ったレヴィの小さな体は思っていたよりもずっと軽く、棺桶は思っていたよりもずっと重苦しいものだった。な

んにせよ休める場所を探さねばならない。とりあえずは当初の目的通り山小屋を目指す事にする。
子供一人抱えての行軍……。沈黙は俺に退屈を運んでくる。雨の中、ふと……俺はレヴィに出会った日の事を思い出していた。

#4　エトリアの魔女

ユーテリア大陸全土を巻き込んだ魔女戦争が終結したのは、聖クィリアダリア王国が武力介入をしてから二年後の事だった――。
圧倒的戦力、聖騎士団を所有するクィリアダリア王国は各国を見る見る制圧し、ヨト信仰と騎士の剣の下に人々を統治した。小さな領や国々がお互いの土地や資源を求めて戦争を繰り返していたのも、海に囲まれた小さなユーテリア大陸としては当然の結果だったのかもしれない。
信仰という脅迫的とも言える絶対命令を盾にクィリアダリアの騎士は退く事を知らない。皆勇敢であり正義感にあふれている。実際にその戦に対する武力介入がどのような意味を持っていたのか、末端の俺たちが知る事ではないが、少なくとも戦場で刃を振るった聖騎士たちは皆平和の為に祈りを込めて戦場を駆けた。
無論、俺もその一人だった。武力介入により俺が所属する騎士団も戦場に赴き、俺もこの手で人を斬り殺してきた。その時の俺には、イルムガルドなどという洗礼名ではなく、至極まっとうなフツーの名前があったわけだが、まあそんな日もずいぶんと昔のことだ。
さて、まずこの戦争がなぜ魔女戦争と呼ばれていたのかを語る必要があるだろう――。
クィリアダリアが介入する以前、ユーテリア大陸はザックブルム

帝国という国が最大規模の戦力を有していた。ザックブルムが近隣諸国に同時に戦争を吹っかけた事をきっかけに魔女戦争と呼ばれる長い戦争が幕を開けたわけである。

そのザックブルムが戦場で軍事利用し、兵器として諸国に猛威を振るったのが魔女、魔獣の類だった。魔物と呼ばれるそれらは人知を超えた能力を所有し、魔法や呪いを駆使して単騎で軍団をなぎ倒すだけの力を持っていた。

特に魔女は究極の兵器とされ、魔法を使って戦う魔女には熟練した兵を抱える騎士団でさえ手を焼かされた。とはいえ元々魔女の絶対数は限りなく少なく、それと対峙することはそれほど多くなかった。

ザックブルムの中でも魔女の立場は元々優遇されておらず、召使以下、家畜同然の扱いをされ、戦場で魔女を見殺しにする事も少なくなかった。故に常に彼女たちは命を賭けて戦い、望む望まずをかかわらず誰からも脅威と呼ばれるようになったのである。

これが魔女戦争と呼ばれる所以……。歴史上何度も繰り返されてきた魔女という存在が表に立ち、武力を振るう最後の戦争……である。

クィリアダリアの介入により、ザックブルムの魔女は皆殺しとなった。魔女の脅威を排し、一応の原因を取り除いた事で大陸の戦争は終結を見せる。しかしそれは一応の終結であり、実際にはまだクィリアダリアの事をよく思っていない国も少なくはない。なんにせよ、魔女を倒した聖騎士団を有するクィリアダリアと真正面から喧嘩をしたがるバカはいなくなったというだけのことだった。

それでも戦争の終了には違いない。二年間の戦場での生活はいつの間にか一般兵だった俺の階級を大きく昇進させ、聖騎士と呼ばれるまでになっていた。

その理由は一つ……。俺の隊が多くの魔女、魔獣を討伐したからである。そんなのとばかり戦っていたもので入隊当初からの顔なじみはほとんどいなくなってしまったのだが、まあそれも仕方のない

ことだ。俺も自分自身の手で魔女を二人、魔獣を三匹殺した事がある。おかげで武勲を得て、一気に出世コースうなぎのぼり、という事である。

何はともあれ聖騎士になった俺は、しかし戦争が一応の終結を見せた事により暇をもてあましていた。何せ元々はただの一平卒ゆえに神官や貴族の類には受けも悪い。各地で魔獣や魔女が出たら討伐に向かう……そんなのが主な仕事なのだが、そんなの頻繁に沸くはずもなく。。

話を戻そう。俺が聖騎士になるのとほぼ同時期に魔女狩りという出来事があった。これはクィリアダリアの王都であるオルヴェンブルムでの大量の魔女公開処刑の事を指し示す言葉なのだが、その裏には様々な出来事があった。

クィリアダリアはザックブルムに勝利するや否や、魔女は悪魔、人外であり魔性故にそれらは死の使い、神に仇名す者であると説き、人々に魔女迫害の概念を強く植え付けた。元来そんな事をせずとも魔女は嫌われ者だ。ザックブルムの軍事利用により一躍有名になっていた魔女を嫌っている人間は決して少なくはなく、魔女を見つけたら殺す――そんな新しい常識が生まれようとしていた。

国王は魔女をオルヴェンブルムに連れてきた人間、あるいは魔女の居場所を教会に告げた人間には報奨金を出すという御触れを出した為、世界中から魔女がオルヴェンブルムに集められる事となった……のだが、問題はその魔女狩りの内容にあった。人をさんざ殺した正真正銘の魔女が処刑されるのはともかく、報奨金を目当てに偽者を連衡してくるという出来事が相次いだのである。

しかし、魔女として疑わしき所あらば即処罰、という狂った考えに取り付かれたクィリアダリアは連行されてきた女性を全く確かめもせず次々に火刑の処した。これがこの事件が疎まれている理由であり、この事件のせいで家族を亡くした人々も少なくはない。

何はともあれその徹底的な処刑行為は大きなデモンストレーションとなり、魔女はこの世に存在してはいけないもの、という常識は

定着しようとしていた。俺に新たな指示が下ったのはそんな時のことだった。聖騎士に昇進した俺はオルヴェンブルムのはずれにある深い森……エトリアの森に足を向ける事になる。

内容は無論、魔女の探索だ。エトリアの森には大きな屋敷があり、物好きな貴族が珍しいものを集めて飾り立てているという噂があり、その中に希少種である魔獣や魔女の類も紛れ込んでいるのではないか、という疑いがかけられたわけである。ちなみにこの貴族、召使も一人もいない上に一人身だったため全く根も葉もない噂だったわけだが、新米聖騎士の仕事としては妥当だったのかもしれない。

数名の騎士を連れ屋敷に押し入る。中に住んでいたのは情報通り枯れた年寄り一人だけであり、俺たちはそのコレクションを調査することになった。屋敷中の部屋にわけのわからないへんてこなものが集められたその屋敷はまるで幽霊屋敷……。気持ちの悪い銅像やらがほとんどで、宝石のような高価なものはごくわずかだった。もっとも、気持ちの悪い銅像もおそらくは高価なのだろうが。

「イルムガルド様！」

「あん？」

振り返ると銀色の甲冑に身を纏った騎士が一人立っていた。名前はよく覚えていないが、騎士団から借りてきた修道騎士だろう。

「地下に続く扉を発見しました。ほかの部屋は大体見て回ったので、おそらくそこで最後かと」

「あっそう。まーどうせ魔獣なんかいやしねえんだ。さっさとそこだけ見て帰ろう」

「恐縮ですが、なぜ魔獣が居ないと思われるのですか？　地下牢で

したら魔獣を隠しておくだけの広さが……」

「そうか……。お前、新入りだろ」

騎士の肩を叩く。　面をを食らったのか、騎士は目を丸くしてうなずいた。

「じゃあしょうがねえ。ま、行くぞ」

魔獣なんかがこんな屋敷にいるはずがない――。魔獣の類がいたならば、たった一人の老人に管理出来るはずがないのだ。それどころか近隣の住民は今頃皆殺しになっているはずだ。そうじゃないのだから、まずありえない。魔獣はそういうものだ。見た事がないなら判らなくても仕方がないが。

地下への扉は南京錠で閉ざされているだけだった。やはり魔獣を入れておくには心許ないにもほどがある。剣を突き立て、さび付いた鎖を断ち切って戸を開く。

長い階段を下りていくと続いていたのは新入りの言うとおり地下牢だった。広いそこにはおそらく稀少なのであろう動物の類が大切に飼われているようだった。これを一人で育てているのだとしたらあの爺さんはすげえ頑張り家だな――なんて事を考えながら一番奥の牢屋を見て、俺は眉をひそめた。

そこには蒼い髪の少女が座っていたのである。両手足には枷、その先端に巨大な鉄球をつけ、一歩も身動きは出来ないようだった。うなだれるような格好で固定されている少女の伸びきった蒼い髪……。淡く光沢し、闇の中でもはっきりと見て取れる瞳。それらの特徴は紛れもなく魔女のもので、さらに決定的だったのが少女の背中に小さな翼がある事だった。

魔女とは魔獣と人間の混血を意味する。魔獣が人間を襲う時、ごくまれに人間の女を孕ませる事がある。そうなると魔獣の特性を受

け継いだ人間……つまり魔女が生まれるわけだ。その際、魔女は魔獣の身体的特徴を有している事がある。少女もまたその例外ではなく、背中に黒い鳥の翼を有していた。

「こ……っ！？　これはっ！？　イルムガルド様！　これは魔女では！？」

「魔女だなあ……。何でこんなところに居るんだろうな……。ああ、面倒くせえことになった」

ぼりぼり頭をかいていると、新入りは剣を抜いて牢の扉に手をかけた。その手を止めて後ろに下がるように制する。

「イルムガルド様？」

「今日だけの借り物とは言えお前は俺の部下なんだ。勝手に動くな。魔女が恐ろしいものだと知らないわけじゃないんだろう？」

「は、はい……。不用意に近づくな、という事ですね……」

俺の背後に下がり、新入りは額に脂汗を浮かべている。仕方のないことだ。魔女の類はこの距離で、両手足を封じられていたとしても平然と人を殺せる。だがそうしないことはわかりきっていた。この魔女は、小さな少女は、自らを閉じ込めている老人を殺しもせず、牢を壊しもせず、大人しく捕まっているのだから。

まあそれが功を奏したというべきだろう。暴れていたのならば先の魔女狩りでの発見は免れられず、今頃灰になっていただろうから。鍵を壊して扉を開ける。とたんに驚いて背後に下がる新入り。殺されるはずはないと確信はあるが、それは老人だけであり自らに敵対する騎士に対して命を保障はないかもしれない。何はともあれここ

で見詰め合っているわけにもいかないし、中に入る必要があるだろう。
少女は何も言わずにおびえた目で俺を見つめていた。剣の柄に手を置き、静かに目を伏せる。それから朱と蒼で彩られた輝く瞳を見つめていた。それは淡く輝きながら、ぐるぐると、光を渦巻かせて静かに俺を映している。

「おい、新入り……」

「はっ、はい！」

「ちょっとお前、席はずせ」

「――は？」

何を言っているのかわからない、という様子の騎士。思わず舌打ちしてしまう。

「気の効かない奴だな……。この魔女とんでもない上玉だぞ。持ち帰ったらどうせ殺されちまうんだし、楽しんでおくのは普通だろ？」

「えっ？」

驚いたのは騎士だけではない。少女もまた目を丸くし俺を見つめている。別に戦場じゃおかしなことではない。女子供なんて蹂躙されて当然だ……なんて、聖騎士が言うのは少々意外だったのかもしれない。
新入りは戸惑った様子で俺と少女とを見比べている。まあそれも仕方ない。少女というのもおこがましいくらいに小さい女の子だからな……。幼女……？

「あ、あの……それはいかがなものかと……」
「お前も混ざりたいなら別にかまわんぞ」
二人が再び同時に驚く。少女にいたっては泣き出しそうな顔をしている。
「い、いえ！　では先に上に戻って時間を潰しております！！　し、失礼しますっ！！」
敬礼してあわてて階段を上っていく騎士。爺さんを見張っている残りの連中と合流して上で待っていてくれるとありがたい。
「さてと……おい小娘」
「ひ……っ！？」
とまあ、悲鳴を上げるのも仕方のないことだ。ゆっくりと近づくとその長い髪に触れ、それからじっとその顔を見つめた。
「人払いは済んだ。理由を聞かせて貰おうか」
「……？」
「何故こんな所に大人しく捕まっている？　外に出ようとしない？　爺さんなんぞ魔女なら殺せるはずだ……。何故だ？」
少女は答えない。ただ悲しそうにうつむいたまま、俺の顔も見ようとはしなかった。格子に背を預け、腕を組む。少女はちらほらと

俺の様子を伺いながら、おびえながら声に耳を傾けていた。

「俺は戦場で魔女って奴に何度も会ったことがある。連中はみんな平然と俺の仲間を殺す化け物ばかりだった。いい奴も大体は死んじまったし、正直な心境を言わせてもらえば魔女なんぞ皆殺しにしてやりたいところだ……だが」

「……？」

「中には戦いたくないのに戦わされてるようなのも居た。そういうのは決まって“ごめんなさい”って顔して魔法を使うんだ。お前はそいつらと同じ顔してる。死ぬの時まで“ごめんんさい”って顔だ。気に入らねぇな」

俺が何を言いたいのかわからない……それが少女の正直な感想だったのだろう。俺も自分で何を言いたいのかよくわからないままだった。魔女に対する想いは一口では語りきれない。俺にだって、それなりの過去がある。

頭を掻きながら身体を起こす。改めて少女を上から下まで眺めて、訊いた。

「人を殺めた事はあるか？」

「……」

首を横に振る。

「殺したいと思った事は？」

「……」

今度はかなり強く首を横に振った。そんな恐ろしい事考えたくもないといった様子だ。

「質問を変える。人間を食った事はあるか？」

「……」

ぷるぷる震えながら泣きそうな顔をしていた。

「そうか……。だったらそれを正直に答えるんだ」

剣を抜き、少女を拘束していた錆びた鎖を叩き切る。少女は小首をかしげ、俺を見上げていた。

「これからお前をオルヴェンブルム大聖堂に連行する。そこでお前は魔女裁判にかけられる事になる」

魔女裁判、というのは本来魔女の罪を問う裁判だが、まあそんなのは形式上だけで言わば死の宣告のようなものだ。元々、誰も魔女の話などまともに聞くつもりはないのだから。

だが、先日の魔女狩りでの魔女誤認での一般人殺害はちょっとした反感を生み、魔女であるかどうかを一度くらい確かめろという声が強まった。故に魔女裁判などというものが生まれ、まず魔女と疑わしきものはその成否を審議されることになったのである。が、この少女は外見的特長からして魔獣の血を引いている事は明らかであり、魔女裁判では人に害のある魔女であるかどうかという部分が最大の論点になる。

人を殺した経験や食った経験があれば容赦なく火刑か打ち首になるわけだが……最近は温情で即死刑以外にも一つの手段が生まれた。

それが果たして希望となるのかどうかは、そいつ次第なのだが……。
「お前は裁判で死刑にされるのと、もう一つだけ選択肢が与えられる」
「……？」
「担当する聖騎士と共に大陸中の主な教会を巡り、身体に許しの刻印をもらう旅だ。そうしてすべての教会を巡れば、お前は迫害を受けず人間になる事が出来る」
――というのは教会のキャッチコピーであり、実際今までにそれが成功したという事例は一つもない。この制度が始まってまだ二年程度である事、そして旅をすべて終えるのに三年はかかることを考えると成功例が一つもなくてもおかしくはないのだが。
教会としてみれば温情などというのは本当にあってないようなものだ。体よく言えば勝手に野たれ死ぬようにと考えられた旅なのだろう。しかもこの贖罪の旅は十五歳未満の少女にしか与えられない選択肢だ。それ以上の魔女は強い力を持つとして危険視され、即殺される。
見たところこの少女はかなり小さい。体格からして歳は十五も行っていないだろう。その十五にも満たない少女に大陸をめぐれというのだから無茶な要求である。
まあ教会は生きて戻ってくることなど望んでいない。遠まわしな死刑である事に違いはないのだが、少女は俺の話を聞いて目を輝かせた。まるで星を入れたような瞳で俺を見上げ、暖かく微笑んで問うのだ。
「……そうしたら……わたしも……人間に、なれるんですか？」

「……ああ、そうだ」

「羽があっても……人間に、なれますか？」

首を傾げ、嬉しそうにそんな事を言う。だから俺はその無垢な瞳を見つめているのが辛くなり、視線を逸らした。

「ヨト神にお前の祈りが通じたのならばな」

これも教会の受け売りだ。そんな神様いやしねえのはもう判りきっている。そう、誰より俺たち戦争の経験者が……一番。だが人は心にそうした希望を抱いていなければ努力できない弱い生き物だ。故に俺も少女に偽りの希望を持たせる事にする。

本当に神の奇跡でも起きない限り、翼の生えた魔女が人間扱いなどされるはずがない。旅が終わったとしても、人として扱われるなんて俺には信じられなかった。人の意識は簡単には変わらない。翼があれば魔女だと一目でわかるように、一目で迫害を受けて当然だろう。そんなこともわからないのか、はたまた本気で神様を信じているのか知らないが、少女は目を輝かせ、嬉しそうに言う。

「……あなたは、天使様ですか？」

正直、返す言葉もなかった。散々人を斬ってきた俺が天使様とは……。神様に大きな声で言えないような事を山ほどしてきたのに、まさかそんな風に言われるとは。

「いんや、騎士だ。ただの騎士だよ、小娘」

「でも、私をこの暗い牢獄から救い出して、人間にしてくれるんですよね？」

「……まあ、概ね合ってるが」

「ありがとうございます……。　嬉しい……です」

にっこりを微笑む少女。俺は困ったように少女の手を引き、地下牢を後にする。それが、俺とレヴィアンクロウの出会いだった――。

レヴィアンクロウという名前は彼女の本当の名前ではない。教会に隷属し、命を握られ、そして呪われた存在である事を受け入れた証として、呪いの名前をつけられ本来の名前を奪われる――それが旅する魔女の宿命だ。

魔女裁判でその名前を告げられても、少女は臆することなく強く瞳を輝かせていた。少女は死ではなく旅を選択し、俺はその担当になることが決まった。もとより態度が悪く神官には不評だった俺だ。発見に携わった騎士として同行を言い渡されるのはそれほど不思議な事ではなく、十分予想していたことだった。

旅の支度を終えると俺たちは共にオルヴェンブルムの城壁を離れ、旅に出ることになる。少女……レヴィアンクロウはまだ見ぬ広い大地を前に、清清しい笑顔で俺に微笑みかけた。

「笑っているとは余裕だな」

「いいえ……。でも、イルムガルド様が一緒だから」

随分と懐かれてしまったようだったが、あくまでも俺は聖騎士。魔女の事が好きなわけではない。むしろ、俺とて魔女を呪う側の人間なのだ。

どんなに彼女が微笑みかけてくれても、それに応える事は出来ない。それにこの旅は、レヴィアンクロウが自らの生き方を探す旅でもある。実を言うと、俺はこの制度はそれほど悪くはないと思っている。教会側の意図はともかく、レヴィは広い世界を知って生きていく大変さを体験する必要があるだろう。

そうして一人で何でも出来るほどに強くなれたならば、人里はなれた場所でひっそりと暮らしていく……そんな事も可能になるかもしれない。尤も、そうやって逃げられないようにこの俺が存在するわけなのだが。

「いいか、レヴィ。最初にこれだけは言っておく」

蒼い髪の上に手を載せ、ぐりぐり撫でる。

「お前がどんなに苦しくても俺はお前に手を貸さないし、旅に必要なものは基本的にお前の力で働いて手に入れろ。これがルールだ」

「……はい」

「俺の力を借りずにゴールまで辿り着いて見せろ。もちろん相談には乗ってやるし、いろいろと教えてはやる。だが全部やるのはお前だ。だから俺の事は頼るな。お前が野たれ死にそうになったなら、容赦なく見殺しにするから覚悟しておけ」

「はい」

あっけなくうなずいた少女は俺よりも早く歩き出す。俺よりも前を、自分の意思で歩き出したのだ。その一歩はとても小さく、しかし偉大な一歩である。

「……」

もう少し悲しそうな顔でもすれば少しはこっちも盛り上がるというものなのだが、まるで当たり前のような顔をして歩いていく。だから俺はその半歩後ろに続きながら遅すぎるレヴィの歩幅にあわせてついていく。

レヴィが取っ手をつけて引っ張っている棺桶は、魔女が夜眠るのに使用するいわゆる寝床であり、教会から支給される唯一の装備だ。魔女は人間を食らう。故に見張りである騎士が眠る間、魔女はこの中に閉じ込めておかなくてはならないのだ。そして棺桶の中は魔女がこの世界で存在する事を許される唯一の場所であり、その鍵は俺しか持っていない。更には彼女たちが死んだ時、その寝床となるのもこの棺……。故に棺は安らぎの場所であり、終わりの場所でもある。

それをわざわざ自分で牽いて魔女は旅をしなければならない。それがこの旅のルールだから。常に死が隣にあり、死を意識して生きていく。非力な少女に大きすぎる棺桶は重く、汗をかきながら賢明に棺桶を引っ張る少女をしばらく俺は眺めていた。

そんな旅の始まり。レヴィは文句一つ言わず、黙々と棺を牽いて進む。時々俺の方を見ては、はにかんだ笑顔を浮かべて――。

「気がついたか？」

屋根を打つ雨の音の中、暖炉の前で本を読んでいるとベッドからレヴィが身体を起こした。山小屋に辿り着くとすぐさまレヴィをベッドに寝かせた。幸運なことに設備はしっかりとしている山小屋で、ほかに人の姿はなく静かだった。

「マスター……え？」

レヴィは自分の姿を見て顔を真っ赤にしてシーツの中に潜る。ずぶ濡れになっていたドレスはさっさと脱がせてしまったので、今は裸なのである。暖炉の前にかかっている自分の服と俺とを交互に眺め、もじもじしながらひょっこり顔をのぞかせる。

「別に裸見るのは今に始まった事じゃないだろう。それに、発展途上過ぎて襲う気にならん」

「……うう」

本を閉じてベッドに歩み寄る。額に手を当てると、熱はまだ引いていなかった。椅子を持ってきて近くに腰掛けると、レヴィは何かを探すように周囲を見渡し、それから不安そうな顔で、

「あの、マスター……」

「何だ」

「あの……その……」

「探し物はこれか？」

手渡したのは蒼い蝶の髪飾りだった。泥の中にぶっ倒れたせいで細かいところに泥がついてしまっていたが、壊れては居ない。

レヴィは旅の途中でもらったものを非常に大切にする。特にこの髪飾りは気に入ったらしく、にやにやしながら何度も手に取り眺めていたのでなくしてしまったのではないかと不安だったのだろう。シーツの布で髪飾りに詰まった泥を懸命に磨きながら、きっとこの

持ち主だった少女のことを思い浮かべてなのだろう――。目尻に涙を浮かべながら微笑んでいた。

「安心したか？」

「はい……。あと、あの……。ご迷惑を、おかけしました」

倒れても見捨てるというのが最初の約束だった。しかし実際に見捨てるわけにもいかないので結局は助けてしまった。何故見捨てるわけにはいかないのか……。それには色々と理由もあるが、とりあえず今はこの旅をそれなりに気に入っているからなのかもしれない。

申し訳なさそうに頭を下げるレヴィに頷いて応える。レヴィは懸命に髪飾りの泥を落とし、静かな時間が続いた。暖炉の中で薪が音を立てて割れる。俺はふと視線をレヴィに移した。

「そんなに気に入ったのか？　それ」

「はい。わたしの髪の事……気持ち悪いっていわないで、きれいだっていってくれたから…」

常識的に考えて、蒼い髪なんてあるわけもない。そんな髪色の人間が居るはずもない。人外である証拠――。見る人が見れば魔女だと指差されて当然の証。生きている限り逃れられない自分の一部をレヴィは嫌っていた。

しかし先日のリーベリア領主の娘との出会いのおかげで少しだけ自分を好きになれたようである。嬉しそうな顔で髪飾りを眺めるレヴィの背中に生えているはずの二対の翼は、今はもうない。その代償として大きすぎる傷跡が残され、白い肌にくっきりと現れている。

翼は、旅の途中で失った。理由は様々だが、レヴィは自ら望んでそうしたのである。それほどまでに自分自身のことが大嫌いだった

レヴィにとって、髪をほめられたのは余程の嬉しさだったのだろう。

「最近の旅は順風満帆でいい具合だな」

「はい。最近は、一度もばけものって言われてませんから」

しかしそれもここまでだろう。次に向かうのは巡礼する教会のある町、ホールズである。大きな教会があるということは、根強い魔女迫害の概念が存在していることも同時に意味している。そんな場所を巡礼しろというのだからその過酷さは並大抵ではない。旅の始まりから一年近くが経過し少しは旅慣れてきた今のレヴィでも倒れてしまうほどに。

嬉しそうな様子をずっと眺めていると、俺の視線に気づいたのか照れくさそうに、申し訳なさそうに笑う少女。俺は腰に挿しているナイフを抜き、それで指先を少し深めに斬り付けた。

床にぽたぽたと音を立てて鮮血が零れ落ちる。それをレヴィの前に差し出すと、少女の目の色が変わった。傷を心配する気持ちと、血を見る寒気と――それを食べたいという三つの感情が同時に沸き起こり、複雑な表情で俺の顔を窺うのだ。

「最近飲んでないから弱ってきてるんだろ。さっさと飲め」

「でも……」

「いいから早くしてくれ。でないと痛い」

「は……はうっ！　はい……あの……いただきます」

食事を前にするようにレヴィは両手を合わせて頭を下げる。事実、レヴィにとって血肉は食事のようなものなのでそれは当然なのかも

しれないが。一応それ俺の手な。
おずおずと口をあけ、小さなその中に指をくわえ込む。暖かい舌の感覚が傷口をなぞり、少しだけ痛みが走る。それを気にしてか、レヴィは優しく、丁寧に傷を舐め続けた。しかし一度血を飲み出すと本能的に止まらないのか、両手で俺の手をしっかりつかむとむさぼるように血を吸い続けた。
熱に浮かされるようにただその行為に夢中になり、音を立てて血を啜り続けるレヴィ……。しかし、傷はしばらくすると血を流さなくなる。魔女の体液にはどうも人間の傷を癒す効果があるらしい。魔獣なんかの生き血はそうした意味で非常に高価な値段がついたりするが、レヴィの唾液も同様に傷をふさいでしまうのである。
故にざっくり指を切ってしまったとしてもしばらく舐めてもらっていればふさがってしまうので特に問題はない。ふさがってしまった傷口を名残惜しそうに手放すと、物足りなかったのか懇願するような目で俺を見つめてくる。普段何も俺に求めないくせにこの時ばかりは我侭を言うのだからなんとも仕方のないやつである。

「もう人差し指はいやだからな……。違う指な……」

「ごめんなさい……」

結局中指をナイフで切る。レヴィは嬉しそうにそれを舐め、咽を鳴らして血を飲んでいた。そうしてその傷もふさがるころにはレヴィの顔色はすっかり血色よくなり、シーツに隠れながら微笑んで俺を見つめていた。

「ごちそうさまでした」

「飲んだらさっさと寝ろ。明日は今日の遅れを取り戻すぞ。早朝に出発だ」

「はい」

暖炉の明かりだけが部屋を照らす。心地よい暗闇の中、レヴィは静かに寝息を立て始めた。やはり疲れていたのだろう。目を閉じて数分であっという間に深い眠りに落ちてしまったようだ。

レヴィの唾液を布でふき取り傷口をなぞる。痕は残っているものの、もう完全に傷はふさがってしまっていた。恐るべきは魔女の力――か。何はともあれ、彼女は人間とは決定的に違う力を持っているのは事実である。

「……ふう」

何だっていいさ。今は旅を続けるしかない。

棺の中で眠らなければならない掟も、今日くらいはまあ仕方ないだろう。別に俺は掟とか実際はどうでもいいわけで……。久しぶりにベッドで眠るレヴィの蒼い髪を撫で、俺も眠りにつく事にした。

明日の朝になったら早くに出立し、何とかホールズにたどり着かねばならない。旅路は辛く果てしない。しかしそれでも行かねばならない。それは仕方のない旅だが、レヴィはそんな風には考えていないのだろう。

旅先で化け物だと罵られようが石を投げつけられようが関係ないのだ。たまに会える心優しい人々や、その先にある人間としての未来を信じていれば、旅を続けられる。その旅路の果てにどのような結末が待っているのか俺にはわからない。だが――。

「おやすみ、レヴィアンクロウ」

今だけは考えずともいいだろう。眠っているお前を苦しめるものは、今だけはなくてもいい。

安らかに眠り、また明日からは元気に旅を続けよう。今の俺はただそれだけを願っている。

雨音に包まれながら、レヴィの寝顔を眺めながら、椅子に体重を預け、俺も眠る事にした。明日の空が、晴れている事を祈りながら――。

#4　エトリアの魔女（後書き）

～そし魔女劇場　教えてレヴィ子さん～

レヴィ「……私の世話をしてくれていたおじいさん、今でも元気でしょうか」

イルムガルド「あんな妙な趣味の爺さんをまだ気にしてるのか」

レヴィ「……きっと、寂しかっただけだと思うんです」

イルムガルド「寂しいからって幼女牢獄に閉じ込めてワケのわからん動物と一緒にしておくのはどうなんだ」

レヴィ「……かわいがってくれましたよ？」

イルムガルド「動物としてだろ……。まあ、あの爺さんは魔女をかくまっていたんだからな。当然、打ち首に……」

レヴィ「えええええっ！？　う、うぅぅ……っ」

イルムガルド「……。冗談だ。あの爺さんは名のある貴族の一人だからな。今は没落してあんなところで隠居していたわけだが、貴族を裁く力は教会にもないからな」

レヴィ「どうしてですか？」

イルムガルド「教会の活動資金は、貴族がまかなってるからだ。貴族はパトロン……公平な審査なんてあるわけねえだろ」

レヴィ「……そうですか。よかったです……おじいさんが無事で」

イルムガルド「……そっちかい。まあ、なんでもいいけどな……」

#5　果て無き瞳

この世の中に平和を齎すのは一体何の力なのだろうか……？
そもそも平和とは何か。その定義はどこにあり、何を以ってして平和と断ずるのか。主義や主張はいつも色や形を変え、時代と共に人を翻弄する物。そうした漠然とした世界を前に、一定の平和などという言葉はまやかしでしかないのかも知れない。
聖クィリアダリア王国が世界を治め、ヨト教の布教が始まってまだ間もなく、世界が生まれ変わるには余りにも早すぎる。そしてまた、人が痛みを忘れるにも……。
憎しみや怒りを生む戦争は人の心に変えようのない大きな傷を残し、それらと人はどうにか向き合って生きていかねばならない。それは論ずるよりもずっと難しいことだ。教会なんて場所に勤めていれば、自然と目にするのは祈る人々の姿。しかし彼らの祈りは何処に通じ、そして誰の為のものなのかも判らない。
祈る事と戦う事はよく似ている。どうにかしたいと。ただ目前の状況から逃れたいと。ただ、行うのだ。人の行いに善悪があるのだろうか。それは誰にも判らない。結果として一人の人間がそれを悪だと指差す事も、指された本人にしてみれば正義かも知れない。
故にただあるのは痛みと悲しみだけ。この世界の多くを埋め尽くし、今も尚それらを広げんとする黒い闇。教会はそれらからわずかばかりの安息を得る事が出来る数少ない場所なのかもしれない。

「マドレーヌ司祭様。街の入り口に、魔女が現れたと……」

「そうですか。出来るだけ速やかに案内して差し上げてください。この、ホールズ教会に」

旅の魔女を迎え入れるのはこれで何度目だろうか。オルヴェンブ

ルムから近い教会の一つであるこのホールズに巡礼の魔女がやってくる事は珍しい事ではない。だが、この場所を訪れ、儀式を受ける彼女たちの目にあるのは大抵決まって恐怖や憎しみ……。心の中に暗澹と立ち込める暗い感情。それも仕方の無い事、彼女たち全てが咎人なのだとは、私も考えてはいない。

しかしこの世界を覆う平和や秩序という言葉は時に残酷なほど異端を嫌い、排除し、そして見せしめにする。昔からずっと続いてきた人の歴史の中、いつの世にもそうした存在は表舞台の影に存在していた。

世界の悪意を一身に受け、世界を憎み、恨みながら死んでいく――。その死に様さえ誰にも看取られる事の無い人々。今はそれが魔女だと言うのならば、私に平和という言葉を語る資格はないのだろう。この世の中に平和を齎すのは一体何の力なのだろう。それはきっと形のない夢の様な力。故に誰かを常に犠牲にして、搾り出した血で描かれている。

「……ままならないものですね。いつの世も」

目を閉じて思い出す。魔女という存在が私の中で未だに放つ鈍く、淡い輝きを。戦争が終る少し前。私はそんな闇の中で生きる一人の魔女と出会った――。

#5　果て無き瞳

かつて、ザックブルム帝国が世界を支配しようと武力による統一を試みていた時代。その時代も私はこのホールズの教会に勤めていた。

その頃から比較的ヨト信仰が一般的だったこの町において、教会

は様々な意味を持つ場所だった。例えばいざという時は避難所のような役割を果たすし、町長の相談を受けたり町の政を手伝う事も少なくはなかった。

都会と都会の真ん中にあり、しかしこれといって交易のルートにあるわけでもないホールズは、海沿いの小さな町だ。人口は年々減っていくし、心のすさんだ人間も居ない。ただゆったりとした時間が流れるだけの、世界から切り取られたようなこの街に置いて教会はただ祈りや儀式の場、というわけではなかったのである。

こんな田舎に配属されて大変だという街の人に、私は笑って首を横に振る。元々オルヴェンブルムの生まれである私ではあったが、あの町はあまり好きにはなれなかった。大聖堂の鐘が鳴り響くオルヴェンブルムの白い街並みは確かに美しかった。暮らす人々も純粋で、余計な欲を持たない慎ましやかな人々……。しかし、私はそれが何故か好きにはなれなかった。

ヨト教の教えもあまり私は好きではない。それだというのに司祭という立場に居るのは、単純に血筋のお陰である。だから私はこのままヨト教司祭という立場の子孫を残していくつもりにもなれず、特にこれといった恋もしないままホールズに足を踏み入れ、そのままその地に根を下ろし静かに朽ちて行く事を望んでいた。しかし戦火はホールズの付近にまで及び、オルヴェンブルムから近いこの町はしかし敵軍の攻撃からは遠く、ヨト教の町という事もありクィリアダリアの“聖戦”の対象にはならなかった。故に戦火を運んできたのは、ザックブルムの兵士だった。

その夜、森の木々はざわめき、荒波は危険を知らせようとしてるかのようだった。暗闇の中、戸を叩く小さな音を聞きつけ、私は読みかけの本を閉じて立ち上がる。それが、私の運命を大きく変えるきっかけになるとも知らずに……。

「どなたかしら？」

私の問い掛けに戸を叩く音は止まる。代わりに聞こえてきたのは若い女の声だった。

「夜分遅くにすみません。僅かな間で構わないので、ここで匿っては貰えないでしょうか？」

何となく騒がしい夜。窓の向こうを見ると、何だか嫌な空気が街に立ち込めているような気がした。

「……いいわ。今、扉を開けるわね」

素早い身のこなしで扉を潜り入ってきた女は黒いローブを身に纏っていた。その下から覗くのは金色の甲冑……。紛れも無くザックブルムの兵士の物だった。だが私が目を奪われていたのはそんな彼女の服装のことではなく、揺れるような淡い群青の髪だった。見れば剣一つ装備していないその姿は、紛れも無く魔女の物……。私は静かに溜息を漏らした。

「敵国の教会を堂々と正面から訪ねるなんて……。無茶なお嬢さんね」

「クィリアダリアの騎士に追われているのです。私の事を、彼らに突き出しますか？」

「そんな事はしないわ。この街にとって戦争は遠い物……。どちらに加担したところで戦争は戦争よ。それに教会を困って訪れた人を突き出しては、司祭の面目がないわ」

「……驚きました、司祭様でしたか。感謝致します。断っていたのなら、私も実力で貴方を黙らせねばなりませんでした」

随分と物騒な事を言いながら魔女は明るく笑っていた。その微笑には確かに人を魅了する魔性の力さえ感じられる。私は魔女を奥の部屋に案内し、椅子に座らせる事にした。春とは言え、その日は冷え込む夜だった。私は暖炉に火を点し、彼女はその炎の明かりをぼんやりと眺めている。

「貴方、魔女なのでしょう？　私をその力でどうにかしようとか、そういう風には考えないのかしら？」

「全ての魔女がそうした力を持っているわけではありません。それに、私は出来る限り人に力を使いたくはないものですから」

寂しげな笑顔を浮かべる魔女。私はその姿をじっと見つめる。“化け物”――。そう呼ばれて当然の存在だと幼き日から教わってきた魔女。しかし実物を見ても私はどうにもそうとは思えなかった。

少なくとも彼女は会話が出来るし、言葉が通じる以上分かり合う事も出来るだろう。だが今クィリアダリアは優勢。そして、魔女は皆殺しにしようとしている。

そもそも、それは魔女だけに限った事ではない。聖戦の名の下に行われる戦闘に置いて、騎士は皆敵に情けなどかけはしないだろう。どちらにせよ皆殺し――何も残る事は無い。それは彼女も例外ではないのだろう。この暗闇の中、騎士に追われこの場所に逃げ延びた……。逃げ延びた先が教会というのもまた少々おかしな話だが、これも何かの廻り合せだろう。

「司祭様。貴方の方こそ、私を匿ってよいのですか？　魔女の隠匿など、どの様な罰に処されるか」

「大丈夫よ。貴方には夜が明ける前に出て行ってもらうし、私は何

も知らなかった事にするから。それよりお話をしましょう？　こんな夜は、一人でいるには少しばかり寂しいわ」

「……同感です。では、何を話せば良いでしょうか？」

「そうね。魔女の……貴方の話を聞かせて頂戴。どんな事でもいいわ。今の貴方の正直な気持ちを伝えて頂戴。大丈夫、どうせ私たちは一晩だけの関わり……。他人なのだから、失うものは何もないわ」

彼女は苦笑を浮かべ、それからゆっくりと頷いた。それから語り始めたのはまず今の自分が居る部隊の事だった。魔女を編成する部隊には必ず護衛の騎士が数名着き、一つの小さな部隊を結成するらしい。

正面からの戦いになれば、並の兵士では魔女には傷一つつけられないと彼女は語る。そんな魔女も身体そのものは生身の人間とそう変わらない。故にその魔女の虚弱な身体を守る為に騎士が存在するのだという。

「私にも三人の騎士が居ました。一人は先日戦争で私の代わりに矢を受け死に、一人は私を逃がす為クィリアダリアの聖騎士と一騎打ちをして、もう二度と会うことはありませんでした」

「三人目はどうしたのかしら？」

「つい、先程……やはり私を逃がす為に。彼らは良い騎士でした。彼らより誇らしい騎士を私は知りません。少なくとも、私にとっては英雄でした」

魔女というのは、ザックブルムの中でも良い待遇を受けてはいなかった。人とは違う力を持つという事は、扱う側もそれによって被

害を受ける側も恐ろしい事であり、忌むべき存在には変わりないのだろう。
故に彼女たち魔女が生き延びるためには敵を殺し、自らの存在価値を高めるしかなかった。失敗すれば、中には味方の騎士に殺される魔女も居た程らしい。彼女たちにとって、生きることは殺す事だったのだろう。

「それに私たちは、魔物の血を継ぐ者です。時には人を食らいたいなど、恐ろしい考えを持つことがあります。それは自我で制御出来る程度のものですが、戦場はその自我を壊してしまう。死にたくないが為に……或いは辛い今から目をそらし、人である事を忘れる為に……。敵や味方の肉に牙を突き立ててしまう者も少なくはありませんでした」

「貴方もそうだったのかしら」

「勿論例外ではありません。ただ私は他の魔女より少しばかり人殺しが上手く、そして他の魔女より護衛の騎士に恵まれていましたから。血肉を食らわねば衰える性質を持つ魔女は、自然と騎士の身体に依存します。血を分け与えて貰い……時にはそれ以上の感情を抱く事もあります」

そう呟く彼女はとても寂しそうだった。今はもうこの世に居ない彼女の騎士たちは、一体何を思って死んでいったのだろう。それを思うと私も少しばかり物悲しい衝動に襲われた。戦争なのだから仕方が無いと、その一言で片付けるつもりは勿論無い。しかし彼女たちを救う力は私にはないし、生きていける場所を用意してくれるほど世界は優しくはないのだ。

「死んでしまいたいと思う事も少なくはありません。ですが、せっ

かくこの世に生を受け、そして誰かに守られ生き延びたのならば……。何か、この世界に自分の生きた証を探したいのです」

「……生きた、証？」

彼女は小さく頷き、それから目を閉じる。深く椅子に体重を預け、その指先はテーブルの上を小さく叩いていた。

「何の為に生まれ、何の為に死ぬのか――。それは分かりませんが、生きていたという証を……。この先も自分の生きた意味を残す事が出来たら、それ以上の幸せはありません」

「それは、例えばどういうものなのかしら？」

「絵や歌、なんていいかもしれません。ずっと後世まで受け継がれ、誰かが好きになってくれるかもしれない。子供を生む、なんていうのもいいですね。その子が幸せになれるかどうかはわかりませんが、私の生きた証には違いないでしょう。それから或いは……」

彼女は目を開き、窓の向こうを見つめる。風でがたがたと揺れる立て付けの悪い窓。彼女はその向こうに何を見ていたのだろうか。

「誰かの心の中に……。そんな場所に生き続けられたのならば、それはきっと幸せでしょうね」

そう語った彼女の笑顔は本当に素敵だった。掛け値なしの生きている笑顔。その先何度か魔女という存在を垣間見る事になる私の記憶の中でも、その魔女の笑顔は飛び切り忘れられないものになった。彼女の目は未来を映していた。いつ殺されてもおかしくない、世界の悪意を一身に背負った存在で……。それでも尚、明日を信じてい

た。
ふと、教会の扉を乱暴に叩く音が聞こえてきた。それが彼女の追っ手であることは最早疑うまでも無く……。故に私は立ち上がり、彼女の肩を叩いていた。

「お名前を聞かせて貰っても良いかしら？　貴方の事を、忘れてしまわないように」

「……“ウェルシオン”」

「……そう。ウェルシオン。またいつか、会えたらいいわね」

彼女は曖昧に微笑み、私の言葉を濁した。それが彼女なりの思い遣りだったのだろう。魔女と会うなんてことは、百害あっても一利なし。私の事を思えばこそ、彼女は頷けない心境に陥る。素直にそれが嬉しくて私は笑ってしまった。それから彼女に立ち上がるように促し、部屋を後にする。

「裏口からお逃げなさい。貴方の旅路がどこかに続いている事を祈るわ」

「司祭様のお祈りならきっと私を導いてくれる事でしょう。それでは……」

魔女は夜の闇の中に溶けるようにして消えていってしまった。それはそれで魔女らしいか……なんてことを私は考えていた。勿論、知らず存ぜずを貫き通し、教会を訪れた兵士は追い返してしまった。それはそれでまた司祭らしくはないのだろうが、まあ致し方の無い事である。司祭である前に一人の人間である以上、できれば付き合っていて気持ちのいい人間に肩入れしないと思うのは特に不自然で

もなんでもないと思うから。
その時私は、魔女という存在の未来に僅かな希望を見出していたのかも知れない。だが私の期待とは裏腹に世界は変わらなかった。むしろあの戦争の憎しみ全てを押し付けようとするかのごとく、世界は魔女を忌み嫌い殺し続けた。司祭という立場である以上私もそれに加担しなければならず、今はその憎しみが生んだ儚い唯一の恩情の旅に加担させられている。
教会を訪れる、騎士を連れた魔女の少女たち。十五歳にも満たない彼女たちは皆、私を憎んでいた。様々な少女がいた。私に疑問を投げかける者も居れば、恨み言を呟いた者も居る。それでも仕方の無い事を私はしてきた。
結局この旅に果てなどない。辿り着く許される場所など存在しないのだと誰もが本当は理解しているのだ。無論私も例外ではない。彼女たちが必死で旅をしたところで、待っているのは絶対に平和な世界などではない。ただ辛い旅を課せられ、そしてのたれ死んでいく。回りくどい、拷問のように。それでも中には本当に未来を信じて旅をする少女がいる。その日私の元を訪れたのも、そんな真っ直ぐな目をした一人の魔女だった。

「遥々ようこそ、ホールズへ。貴方も道中、大変だったようね」

ステンドグラスの光を浴びる場所に立つ少女の全身は泥だらけだった。その姿を見ただけで恐らく誰もが顔を顰めた事だろう。
神聖なる儀式を前に、不必要な人間は全て排除してあるこの空間の中、ただ彼女を笑う人間が居ないだけ。だから私にも、きっと彼女にも聞こえているだろう。人々の嘲笑の声と、彼女に向けられた確かな憎しみが。
共に旅をする聖騎士は若い男。一見気の抜けた表情で適当に立っているように見えるが、その状態には隙が無い。聖騎士は皆腕の立つ並外れた強さの戦士……。彼もまた全てを警戒し、彼女を守ろう

とする強き騎士なのだろう。この教会の中でも、警戒を怠らないほどに。

私は資料に視線を落とした。あらかじめやってくる騎士や魔女の情報は司祭の手元に送られてくる。それに目を通す事が出来るのは儀式の直前のみであり、それが済んだら即座に処分しなければならない決まりだ。資料を眺めて私は何となく騎士の不思議な気配の正体に近づけたような気がした。平民出身の一平卒――魔女、魔獣を討伐した経験のある最前線の兵士。彼もまた、恐らくはあの聖戦の中の真実を垣間見た存在なのだろう。あの夜の私のように。

この場所を訪れる聖騎士も様々な者がいる。さっさと魔女が死に、オルヴェンブルムに帰りたいといった様子の騎士がいれば、本気で魔女を守ろうと考える騎士もいる。男も居れば女も居るし、その年齢や出で立ちも千差万別だ。だが彼らには一つの共通点がある。それは魔女という重い存在を背負い、考えているということだ。彼らの背負う重い役職よりも更に重い魔女という憎しみの象徴を、彼らはなんらかの感情で背負っている。

気負っている、というべきなのかもしれない。だがこの若い騎士にはそれがなかった。ただ、そこにいる。ただ、少女を見守っている。背負うわけでも担うわけでもなく、ただ守っている。それは戦争の真実を垣間見た者の余裕なのだろうか。なんにせよ、彼女は良い騎士に恵まれたというべきだろう。中には魔女を奴隷のようにこき使い、殺そうとする者までいるくらいだ。美しい外見をした少女が多いという理由もあり、魔女の敵は何も魔女を憎むものだけではない。騎士もその例外ではないのだから。

「……蒼き魔女、レヴィアンクロウ。貴方の贖罪の旅の記録を」

肩からかけた小さなポシェット。恐らく彼女が持つ財産の全てが詰め込まれたそこから取り出したのは彼女が記した分厚い羊皮紙だった。全てを保存する必要はないが、彼女たちには旅の記録をつけ

る義務がある。その羊皮紙の束をしっかりと握り締め、少女は私の前に立つ。
私はそれを受け取り、素早く目を通していく。その間ずっと私を見つめる少女に、いくつか質問を繰り出す事にした。

「貴方はこの旅の先に、何を見ているのですか？」

少女は息を呑む。勿論、この質問も無意味ではない。魔女の現在の状況を確認し、このまま旅を続けても良いものかどうか、その判断を下すのも私の役目なのだ。故に司祭の問いかけには素直に、嘘偽り無く……しかし正しい答えを返さねばならない。少しだけ間を空け、少女はゆっくりと言葉を口にした。

「――――許し、です」

「人として生きていくための……ですか？」

「……はい。わたしは、生きていてはいけない存在ですから」

「それでも生きていたいと？」

「はい」

今度は即答だった。思わず顔を上げて少女の瞳を覗き込む。そこに渦巻くのは群青の光――。あの夜出会った魔女と、彼女はよく似ていた。鬱屈としたものが多い魔女の瞳……しかしまれに彼女のように美しく澄んだ瞳を持つ者がいる。未来を信じ、歩み続ける固い決意のようなもの……。そんな、幼い少女には似合わない決意を感じるのだ。

「魔女は許されざる存在であると同時に憎しみの象徴です。戦争の傷跡を残す人々も、平和を維持しようとする人々も皆、貴方を憎むでしょう。その傷も、きっとこの街に着いてからつけられたものでしょう？」

見ると少女は全身傷だらけだった。この町では当たり前のように魔女の迫害が行われている。ヨト教の町なのだから当然なのだが。特に魔女が公然と旅で訪れるようになってから、住人の魔女嫌いは加速した。彼らは皆魔女に近づく事を恐れ、自分たちのテリトリーに彼女たちが立ち入るのを嫌った。

だからよく物を投げる。この街に来た魔女全てが恐らくその洗礼を受けている事だろう。彼女も例外ではない。それでも彼女は真っ直ぐに私を見ていた。

「……旅は楽しいかしら？」

「……辛い事もあります。けど……それでも楽しいこと、嬉しいことはあります」

「そう……。では最後に、貴方にとって旅とはなんなのかしら？」

「……わかりません。でも、その答えを……いつか見つけたいと思っています」

彼女のそれは恐らく本音だったのだろう。迷いを抱き、しかし絶望はしていない。答えは見えず、しかし足を止めるつもりはないのだと――。

随分と滅茶苦茶な、闇雲な旅路だ。しかしそこに彼女は希望を抱いている。いつかの未来を、この絶望的な世界の中でも模索しようとしている。

「良いでしょう。レヴィアンクロウ、貴方に第四の秘蹟を授けます。さあ、こちらへ」

少女は頷き、祭壇の前に立つ。そうして自ら衣服を脱ぎ、肩を露出させるとそこには幾つかの焼印が姿を現した。教会をきちんと巡ったという印――。旅を継続する為の切符。それにしてはまるで、罪人に与えられるかの如き傷跡。

これをやる時が一番心が痛む。しかしやらなければ彼女の旅はここで終わり。私は役職に徹して焼印を彼女の腕に刻み込む。レヴィアンクロウは悲鳴を上げなかった。歯を食いしばり、必死で堪えていた。僅かな痛みの時間が終わり、彼女の旅は継続を了承された。

「儀式は終了です。よく頑張りましたね……。ごめんなさいね」

あらかじめ用意しておいた包帯を腕に巻き、そっと衣服を整える。するとレヴィアンクロウは目を丸くして私を見つめていた。

「私にだって人の心はあるわ。貴方のような少女が傷を背負って旅をするのなんて、本当は嫌なのよ。誰も居ないところでしか本音は話せないけど、でもそれが私の素直な思いだわ」

「……司祭様」

少女の前に膝を着き、その小さな身体をそっと抱きしめる。いつ壊れてしまってもおかしくない傷だらけで泥だらけの身体を、私はあと何度見送る事になるのだろうか。しかしそれも私に与えられた役目であり、そして良い機会なのだと思う。せめて私くらいは、彼女たちの存在を覚えておいてあげなければならない。

あの日、暗闇の中に消えた魔女……。彼女のように、彼女たちも

また、生きた意味と証をどこかに求めているのだろうから。

「聖騎士イルムガルド。貴方はこれからも彼女と共に旅を続けるのですね」

「それが任務ですから。それ以上でも、以下でもなく」

「そうかしら？　私には貴方が、この子を本当に大切にしているように思えてならないのだけれど」

「お言葉ですが、そういった言葉は侮辱に値します。発言には気をつけたほうが宜しいかと……。私以外には、ね」

「そうね。そうでしょうね。ええ、気をつけるわ。ありがとう、イルムガルド」

騎士は肩を竦めて笑う。私はもう一度少女の頭を撫で、出来る限り優しく微笑んで見せた。

「今夜はここに泊まって行きなさい。そして貴方の話を聞かせてくれたら嬉しいわ。どんな事でもいい、今の貴方の素直な気持ちを教えて頂戴」

「……はい。ありがとうございます、司祭様……」

柔らかく、穏やかに微笑む泥だらけの少女。嬉しそうに私に飛びつく少女の姿を、騎士は腕を組んだまま黙って眺めていた。彼女は物静かな……しかしとても明るい、無邪気な少女だった。一生懸命に旅の話を聞かせてくれる彼女の言葉を私は丁寧に聞き、丁寧に感じ、丁寧に返事をした。

騎士はさっさと寝入ってしまっていたが、あれは私を信頼してくれたという事なのだろうか。それとも、魔女がその気になれば人間なんてどうにでも出来るからなのか。いや、きっと魔女は誰もが人間をどうにかしようと考えているわけではないのだ。そう、彼女がそうであったように。

「……生きなさい、レヴィアンクロウ。貴方の旅の果てに、貴方の望む幸せがあることを祈るわ」

「……司祭様は、魔女が恐ろしくはないのですか？」

「ええ、怖いわ。でもね、魔女全てが恐ろしいものではないって事を私はもう知っているのよ。きっと貴方の騎士もそうなのでしょうね」

「イルムガルド様は、とてもお優しい方です！　エトリアの森に居た私を救い出してくれたのも彼でした。旅の途中でも、何度も私を助けてくださいました。イルムガルド様は、私にとって天使様なんです」

嬉しそうに語る少女に私は微笑を返した。しかしその騎士もまた、多くの命を奪い彼女の仲間である魔女さえもその刃で斬り捨ててきた男――。しかしそんなものは関係ないのだろう。そして彼女の幸せそうな笑顔を見ていると、私はまたどこか希望のようなものを抱きたくなる。

少女に好かれ、少女を守る騎士。生きる事を諦めず、未来を信じる少女。二人の旅路はもしかしたら、魔女と人間にとって大きなものを残す結果になるかもしれない。今までにも何組かそうした二人を私は見てきた。彼らの旅の中で、この世界がゆっくりと変わっていったらどれだけいいだろう。そんな夢のような想いを抱かずには

いられない。

「貴方は人間が恐ろしい？」

「……はい。でも、全ての人が恐ろしいわけではありません。私の事を友達と言ってくれた人も、妹だと言ってくれた人も居ました。だから私は旅を続けられます。たとえそれがどんなに恐ろしくても」

「そう。それはとても素敵な事ね。今の気持ちをずっと、忘れないでね」

少女は微笑んで頷いてくれた。夜はあっという間に明け、彼女たちも直ぐに旅立つ事になった。人通りの少ない明け方ならば、彼女たちも新たな傷をこさえず町を抜けられる事であろう。

朝日に照らされながらレヴィアンクロウは振り返った。肩口から覗く白い包帯……。しかし彼女は笑顔で私に小さく手を振った。

「ありがとうございました、司祭様。また……また、いつか」

「ええ。またいつか……そうね。会えたらとってもうれしいわね」

彼女は素直に頷いて、素直に走り去っていった。そこは大人と子供の違い、というものなのだろうか。朝日を背に騎士が振り返る。それから困ったような表情で首をかしげ、口を開いた。

「貴方の所為で、レヴィはまた旅を続ける元気を取り戻してしまいました。私の苦労ももう少し続きそうです」

「そうね。余計な事をしてしまったかしら？」

「余計な事、かもしれませんね。ですがたまにはそういうものも……」

「ええ――。悪くはないわ」

剣の柄に手を当てたまま騎士は頷く。それから風を受け、マントを靡かせながら背を向けた。

「達者でね。隻眼の聖騎士」

彼は振り返らなかった。そして遠く、丘の上で待つ少女の下へとゆっくりと歩いていく。その姿が遠く丘を越え、山に吸い込まれていくのを見送り私は静かに溜息をついた。

あと何人、こうして魔女を見送る事になるのかわからない。しかしそれらはいつか、彼女たちの望む旅の終わりへと続く大切な一ページなのかもしれない。私という存在がその思い出の中の一つになり、そして私が彼女たちを覚えている限り、少なくとも未来へと継がれる何かがそこにはあるのだろうと思う。

与えられるものは何も無く。得られる物は微かでしかない。それでも私はそれしか出来ないのだから、司祭として。今出来る事をやるだけだ。

「願わくば、貴方たちの旅が未来を作るものでありますように」

祈りではなかった。では、願いだろうか。不思議と悪い気分はしない。私もまた朝日に背を向け、教会に向かって歩き始めた。

しかしふと思い当たる事があり、足を止める。群青の魔女、レヴィアンクロウ――。そういえば四日ほど前、その名前を他の魔女から聞いた覚えがある。確か紅い髪の魔女だった。歳はレヴィアンクロウと大差はないだろう。明るく活発な、元気のいい魔女だった。

「嫌だわ、すっかり忘れていた。もし蒼い魔女が来たらって言伝を承っていたのに……」

歳には勝てない。が、その伝言は恐らく必要ないだろう。紅き魔女も蒼き魔女も、行く先は同じ。次の旅の目的地は……恐らく商業都市ゲリア。

山を越えた向こうで群青の少女が友に会える事を祈りつつ、私は教会の扉を潜る。次に訪れるであろう魔女はどんな少女か……。そんな事に、想いを馳せながら――。

#5　果て無き瞳（後書き）

～そし魔女劇場　教えてレヴィ子さん～

レヴィ「あの、司祭様」

マドレーヌ「あら？　何かしら？」

レヴィ「魔女の秘蹟って、いくつあるんでしょう？」

マドレーヌ「そうね……。片田舎のホールズ教会にあるくらいだから、一体いくつくらいあるのか検討もつかないわねぇ……」

イルムガルド「何百もあったりしてな」

レヴィ「ひっ！？」

マドレーヌ「あら……大変ねぇ。もし本当にそうだったら、レヴィの全身は紋章だらけになってしまうわ」

レヴィ「そ、そっちの心配なんですか……？」

イルムガルド「秘蹟は焼印だからな。いちいち痛みに耐えなきゃならんというのが酷なもんだ」

マドレーヌ「中には泣いてしまう魔女や、悲鳴を上げる魔女もいるのよ。いいえ、それが普通……。貴方はとっても我慢強いのね」

レヴィ「はい、ありがとうございます！」

イルムガルド「（……前日俺の血を飲んで力が上がってただけのような気もするが……黙っておくか）」

#6　魔法の絵の具と魔女の旅（前書き）

書き方を変えてみるテスト。

#6　魔法の絵の具と魔女の旅

旅をしていると、様々な物に出会う事がある。それは時に自らの命を脅かすほどの危険や、我が目を疑うほどの感動を伴い、なんの唐突も無く……そう。目前に現れ、はいこんにちはと。容赦無く世界の中に現れる。

人生はストーリーだと、僕は考えている。一つ所に留まっていては風は吹かない。新しい物語の頁を捲る風が。扉を開け放ち、外の世界に足を踏み出した時……世界は少しだけ色を変える。

自分が信じていた物や願っていた夢など、とても些細なものなのだと旅は教えてくれる。有限と無限の狭間、価値と無価値の真ん中をふらつく停滞しない世界の流れは、時に残酷なまでに僕の胸を打つ。

飢餓や貧困。戦争や差別。抵抗と革命。平和と嘘。信仰と裏切り……。世界は人間の沢山のストーリーで溢れかえっている。それを混沌と呼ぶ事を僕はなんら躊躇わない。

僕はストーリーが好きだ。本人にとってはどうにも意味の無いように思える行いも、誰かにとっては是となるし、その逆も在り得る。人々の擦れ違う思いの様や流浪する願いの行き着く先……そうしたものを想像しただけで胸がわくわくしてくるのは、きっと僕だけではないはずだ。

だから旅が好きだ。人々の物語に少しずつ干渉する事の出来る人生はどれだけ楽しいだろう。誰かの記憶の片隅に残り、そして僕の知らない場所でまたそれが新しい物語の息吹となるのなら、それほど幸福な事は無い。

さて、では僕は物書きなのかというと、実はそうではない。僕は何を隠そう、絵描きなのだ。

背負う物は常にカンバスと筆、それから必要最低限の旅の道具だけと決めている。それでも旅をする為には荷物が重くなる。勿論そ

れは道理だよね。
だからこうして時々僕は道端に行き倒れる。これは勿論、ここ数日間飲まず食わずで街道を歩き続けた所為なのだろうけれど。
それにしたって、予定ならもう三日前にはこの商業都市ゲリアに到着しているはずだった。ではなぜ今頃入り口に到着し、死に掛けているのか。
理由は単純。ここに来るまでに何度も道に迷ったのだ。近道しようとして鬱蒼と生い茂った森に足を踏み入れたのが運の尽きだった。道すがら何だか魔物みたいなのにも追いかけられるし、いつもながら本当についていない。
神様にも何度かお祈りをしてみたものの、都合よくこんな時ばかり祈る僕のそれがヨト神に届くはずもなし。そもそも僕はヨト信者じゃないし。

「は、腹へったぁ……」

死にたくない……。リアルにそんな事を思う。
脳裏に浮かぶ様々な景色。この旅を始めて何度目か判らない走馬灯に、思わずげんなりしながら目を閉じる。
ああ、誰も振り返ってもくれないし、足を止めてもくれないし、声をかけてもくれない……。ま、そりゃそうか。こんな得体の知れない旅の絵描きを助けてくれるようなお人よしなんかいるわけもない。
だがもしも、もしもこんな怪しい男を拾ってくれるとしたらそれはきっと……そう、神様か天使様か。まあそのあたりになるんだろうなぁ。

「……あの、大丈夫ですか？」

ぼんやりとくだらないことを考える頭が揺さぶられる。最後の力

を振り絞り何とか重い瞼を開くと、そこには美しい蒼の瞳が。

「……君は……？」

「……あの、旅の者です。あの、どうかしたのですか……？」

少女の問い掛けに答えるよりも早くお腹が思い切り悲鳴を上げた。恥ずかしくて思わず苦笑する僕の目の前にパンを差し出し、少女は困ったような顔で首を傾げる。

「これで……良ければどうぞ」

迷わなかった。即座に起き上がり、パンを貪る。恐らく相当情けない姿だったろうけど、もうこれは生きるか死ぬかの瀬戸際。女の子に引かれても食うのをやめるわけにはいかんのだ。

正直量は全然足りなかったけれど、見れば少女は旅の者。僕と同じく路銀には困っているはず。他人に分け与えるどころか自分のパンさえ怪しいところなのだろう。

「助かったよ……本当にありがとう。君はまるで天使様だね」

ようやく人心地ついた。文字通り生き返ったという状況か。深く息を吐き出し、現世に留まる事が出来た事を心から喜ぶ。

少女は目を丸くしていた。僕の言葉が何かおかしかっただろうか。それとも僕の見た目が怪しいのだろうか。まあ多分両方だろう。

立ち上がり、荷物を背負い直す。全身の埃を叩いて落とし、僕は小さな救世主の顔を覗き込んだ。

揺れるような蒼い瞳。髪は淡く光沢し、光を吸い込んで放さない。夜の闇の中でも月明かりさえあればきっと彼女を見つけるのはとても容易だろう。

そして僕はその美しい外見に見覚えがあった。少女の髪を指先でつまみ、僕は出来るだけ小さな声で呟いた。

「――――君は、魔女だね？」

優しく微笑んだつもりだったが、彼女は死刑宣告を受けた罪人のように身体を震わせていた。

付き添いの騎士の手が剣の柄に触れるのを視界の端で捕らえ、僕は両手を上げる。

「そう怖い顔をしないでよ。僕はただの絵描き……君たちをどうこうするつもりはない。むしろ命の恩人だ。何か恩返しをさせてほしいんだけどな？」

少女は迷いを秘めた瞳で僕を見上げ、それから付き添いの騎士を見やる。騎士は何も言わずに剣から手を放し、肩を竦めた。それが何かの合図だったのだろうか。少女は小さく頷き、それから消え入りそうな声で言葉を紡いだ。

「……あなたのお名前は？」

「僕かい？　僕はしがない旅人のルクスン・ホークという者だよ。職業は――そうだな。魔法の絵描き、とでも言っておこうかな」

僕の言葉に彼女は再び目を丸くする。そんな小さな魔女様の頭を撫で、僕はもう一度彼女に微笑みかけた。

＃６　魔法の絵の具と魔女の旅

商業都市ゲリア――。この街が商業の流通の為物凄く栄えているのは言うまでもなく、南東に自治領リーベリア、北には城壁都市ゲヒトゥム、西には聖都オルヴェンブルムと様々な大都市との仲介地点として旅人にとっても非常にありがたい街の一つだ。

旅人を始めてもう十年近くなるが、この街の世話になったことは数え切れない。どこに行くにもここを仲介するのが一番安全であり、旅人にとっては重要な稼ぎ場でもある事がその理由である。

ゲリアはオルヴェンブルムに負けないほどの巨大な都市だ。特に中央に一本通った十字の大通りには商人や旅人の露店が立ち並び、売るにしても買うにしてもとても賑わっている。

物流の街だけあり、そのラインナップは相当な幅広さを持つ。各国から持ち寄られた珍しい品物が当たり前のように日替わりで軒先に並ぶのは壮観で、思わず不必要なものまで買ってしまわずには居られないような、そんな強い活気を感じる。

商人と旅人の呼び声が飛び交い、買い物客でごった返すその道の中、少女はそのあまりの人通りに目を白黒させながら僕の後についてきていた。

「こういう街に立ち寄るのは初めてかい？」

問いに少女は小さく頷いて答える。人に流されそうになる度僕は彼女の手を取り、そっと人気の無いほうへと誘導する。

やがて辿り着いたのは中央に巨大な噴水を構える広場だった。度の芸人などが当たり前のように芸を繰り返すその真っ只中、僕らは空いていたベンチに腰を下ろした。

「えーと、そっちの大きいお兄さんは？　この子の保護者でいいのかな？」

「いいような、悪いような……。護衛ではあるが、基本的にそいつの行動には不干渉だ。一目見て魔女だと見抜いたんだ、魔女の旅については知っているんだろう？」

僕は曖昧に苦笑を浮かべる。護衛の騎士――魔女の騎士、といった所か。昔から魔女には騎士が付き物だった。彼もその魔女を守る役目を持つ騎士なのだろう。あまりうかつな事を言うとこっちの寿命がいくらか縮まりそうだ。

魔女の旅……。それがクィリアダリアの正式な儀式であるというのに、その知名度が低いのには訳がある。まず基本的に魔女の絶対数が少ないという事。そしてクィリアダリアがその旅が行われているという事を公表していないこと。最後に魔女そのものを見て認識できる人間が少ないという事がある。

戦争が終ってまだたったの二年程度。魔女という存在は人々の中に恐怖の象徴として刻み込まれはしても、実物の存在を知る人はいない。故に時に魔女は虚言の存在とまで呼ばれ、教会もそれを否定はしない。

できれば忘れてしまいたいという気持ちは理解できる。そして魔女も自らの存在を人に知られたくはないのだろう。正面から人間と出会う事は、迫害してくれと言って周る様な物。

そもそも戦争中、魔女という存在と相対して生き残ることが出来た人間は圧倒的に少ないのだ。魔女の存在が一般的にあまり認知されていないのも仕方の無い事。

故にこんな街中で平然と立っているこの小さな少女が魔女であるなどと誰も思わないのだろう。特に人の流れが激しいこの街で、たかが一人の少女を頭の片隅にとどめておく事は難しい。

「旅の魔女が立ち寄るにはここはピッタリのような、都合が悪いような……。とりあえず、フードは被って髪を隠した方がいいよ。目も左右で色が違うとちょっと不自然かな。布でも巻いておくといい」

「え……っと？」

「ああ、理由？　この町は商業の街だ。商業と一口に言っても色々ある。珍しい物を売り買いするヤツも居れば、人身売買するやつとかもね。そういうのは珍しい存在である魔女の事を知っている可能性とかもあるし、見るやつから見れば君は明らかに魔女だからね。僕が一目で君の正体を見破れたように、同じような境遇の人間が居るかもしれない。旅人は見識が広いからね」

「……わかりました。ありがとうございます……ルクスンさん」

「ルクスンでいいよ。それよりちょっと待ってて。君はマーケットに顔を出さない方がいい。何か食べ物を買ってくるよ。実は行き倒れてただけで、お金はそこそこあるからね」

二人を残し僕はマーケットに引き返した。そこでとりあえず今すぐ食べられるようにと肉の串焼きを購入する。店先で一本無我夢中で貪り、そのあと自分の分を含め三本購入する。

それから帰りがてら見つけた雑貨屋で小さな小瓶を購入した。まさかこう急に必要になるとは思わなかったから、瓶の持ち合わせが無かったのだ。

さて、さっそく広場に戻るとすでに少女は全身をすっぽりと布で多い尽くしていた。影から覗く瞳も片方だけで、それでも蒼い瞳はきらきらと輝いてどうにも具合が悪い。

「まあ、しょうがないね。はいこれ串焼き。護衛のお兄さんもどうぞ」

「……お前、もうすでに一本食ってるだろ？」

「え！？　ど、どうして……？」

「口の周りにタレがついてるぞ」

「あははは。まあ、そんな事もあるって事で」

二人に串焼きを渡し、自分の分も一気に平らげる。ああ、これでようやく本当に生き返ったという感じだ。

少女の隣に腰掛け、おいしそうに肉を頬張るその横顔を眺めていた。彼女もそれに気づいたのか、ちょっと顔を赤らめて視線を反らす。

「さて、本題に入ろうか。何かお礼をしたいんだけど、困っている事とかないかな？　僕も旅人だし、何か手伝えるかも知れない」

「え、っと……。特には、無いんですけど……」

それは困ったな。お礼もできないまま、というのは良くない。

「じゃあ、何かあげるよ。女の子が好きそうなものはそんなにないけど……」

鞄を引っくり返す。出て来たのは雨具とナイフ、それから筆とオカリナ。丸めてある絵がいくつか……。

ポケットに手を突っ込む。小銭が少々。腰から下げたベルトポシェット。絵の具の入った瓶と画材と……またナイフ。

「……参ったな。ろくなもんがない」

途方に暮れていると、少女は筆とオカリナを手にしていた。これは何？　とでも訊きたいような瞳に僕は頷く。

「それはオカリナっていう楽器だよ。そっちは筆。僕は絵描きだからね」

「絵描き？」

「うん。あ、そうだ。良かったら似顔絵でも書こうか？　そういえば売ろうと思っていた絵がいくつかあるんだ。見るかい？」

「はい」

少女は嬉しそうに微笑んだ。何だかこっちまで幸せな気分になってくる。

さて、まずは地面に布を敷く。そこに販売用の絵を広げ、値段をつける。まあどうせ早々売れるもんでもないので放っておいて、少女の前にカンバスを構えた。

「とりあえずは下書きだね」

「えっと、私はどうすれば……？」

「あー。じっと座っててくれればそれでいいよ。よーし、じゃあ書くよー」

「は、はい！」

スケッチが始まった。

いきなりカンバスは無視してがりがりと紙に少女を描いていく。

まぁそれには色々と理由があるのだが、割合するとして。
騎士は欠伸をしながらベンチの上で目を閉じていた。寝ていたのかもしれないし、寝ているフリをして僕を警戒していたのかもしれない。まあどちらにせよ僕は集中して作業に没頭する事が出来た。
一方少女の方は肩に余計な力が篭っている。緊張しているのか、表情も硬い。冷や汗が頬を伝い、どうにも自然な状態のあの柔らかい笑顔は引き出せそうにもなかった。
しかし僕が黙っているせいか彼女も一言も口を利かなかった。それはそれで随分と我慢強いのかも知れない。小さな女の子に動くなと言ってそれが罷り通る方が少々不思議な物だろうし。

「うん。じゃ～ん、こんなかんじ」

さくっと書いた絵を見せると少女はぱあっと目を輝かせた。それが本当に嬉しそうで僕もまた嬉しい気持ちになった。
正直な話、僕の絵がそれほど上手くはない。この世界を旅して思ったけれど、それは客観的な事実だ。僕の絵は世界の中では大した価値を持たない。
だからこそ今僕はカンバスを使わなかった。少女は微笑みながら僕の顔を覗き込む。

「うん。あげるよ。プレゼント」

「……ありがとうございます！」

「……えっと、そんなに嬉しい？　下手じゃない？」

「ううん、とっても上手です。何ていうか……凄いんですね、ルクスンさん」

「あはは、そうでもないよ。でも君にそういってもらえるとちょっと自信が出て来たかな」

勿論嘘だ。しかしまんざらでもない気分なのは事実。少女の頭を撫でると、笑顔はもっと明るく花開いた。

しかし少女の視線が捕らえたのは全く売れる気配のない僕の絵。たまに人が通っても見向きもしないし、手にとったとしても購入にまで漕ぎ着けるのは難しい。

不安そうな少女の瞳。僕は苦笑して絵の前に膝を着いた。

「もう十年近くこうして絵を書きながら旅をしているけど、まあいつもこんなもんだよ。収入源とするには、ちと心許無いかな」

「……」

「そんな顔しなくても大丈夫！　あ、そういえば君たち路銀はどうしてるの？」

「……たまに大きな街に長く滞在して、働いたりしています。自分のお金は自分で稼ぐのが、魔女の旅ですから」

「そうなの？　じゃあ、ちょっと待ってて。えーっと……」

手にしたのはオカリナだった。最近吹いていなかったのでちょっと汚れている。上着でごしごし乱暴に擦り、小さく息を吸い込んだ。

奏でたのは旅先で知ったメロディ。オカリナの音が鳴り始めると同時に少女は目を丸くした。片目を閉じ、僕は旋律に身を委ねる。優しく穏やかなその音色は北の地方に伝わる子守唄だった。

演奏の最中、少女はずっと僕を見て嬉しそうな顔をしていた。音色に誘われるようにちらほらと人が集まり始める。僕は演奏を中断

し、オカリナを少女に差し出した。

「吹いてみるかい？」

「い、いいんですか？」

「どうぞどうぞ。ここをこう持ってね。ここに口をつけて、息を吹き込む。音色を奏でる事を意識してね。ただ闇雲に吹き込めばいいってもんじゃないから」

「は、はい！」

がちがちに緊張した様子の少女は案の定思い切りオカリナを吹き、掠れた音が広場に響き渡る。

顔を真っ赤にしてうろたえる彼女を見て、ああ、多分楽器の才能はないんだろうなあ……なんて事を僕は冷静に考えていた。

「楽器や芸には疎いのかい？」

「は、はい……」

「あー、そうなんだ。旅をするなら芸の一つや二つは出来た方がいいよ。ちょっと待ってね」

カンバスと共に鞄に括りつけていた箱を開き、そこから古びたギターを取り出した。もうろくに手入れもしていない古びた品物で、捨ててあったものを拾っただけというとんでもない由来の品だが、音が若干外れている事さえ気にしなければまだまだ現役である。

同時に取り出したのは幾つかの紙の切れ端。紙はこの辺りではまだまだ高価なものの、東の方に行けばわりと普通に売ってたりする

のでまとめ買いしておいたのだ。
その紙に描かれているのは手書きの楽譜である。旅先で知った楽曲をそのまま書きなぐったもので、どうにも手書き感溢れる本来ならば人に見せるようなものではない代物だ。

「楽器は直ぐには無理だろうから、歌ってみるかい？」

「え、えぇ！？　わ、私がですか……？」

「難しい事じゃないよ。歌は直感的なものだからね。僕の後に続いて歌ってみて。じゃあ行くよ」

戸惑う少女を置き去りに弦を弾く。
穏やかで切ないメロディが流れ始め、僕はゆっくりと歌い始めた。こういうのは耳慣れた物から始めるのがいいと思うのだが、彼女がどんな歌を知っているのかわからないので選曲は適当である。
実は僕は絵よりも歌や楽器の才能の方がある人だったりする。ゆっくりとしたリズムに最初は戸惑っていた少女も次第に声を上げていく。
やがて少女が歌詞を覚えたと思う頃、僕は歌うのをやめて演奏に集中する。少女の物覚えはとてもよかった。魔女だからなのか、それとも彼女の集中力が凄いのか。どちらにせよそれは凄い事だと思う。
あっという間に歌を覚えた彼女は途端に凄まじい速度で上達し、あっという間に周囲には人だかりが生まれていた。こういった広場では芸人が多く、中々通る人々も耳が肥えているものだが、少女の歌声にはそれでも人をひきつける魅力があった。
恐らくそれは魔女故に。魔女の外見は魔性の美しさを持ち、その行い、一挙一動が全て美しく人の限界を軽く踏破している。まるで作り物や夢の如く、奇跡を体現して止まない彼女たちの存在は多く

の人間をひきつけるのだ。
少女は楽しそうに歌っていた。それは純粋に楽しくて歌っていたのだと思う。人を集めようなど考えてもいなかったであろう。しかし人々は鞄に次々に小銭を投げ込み、彼女に拍手を浴びせた。
戸惑い、照れくさそうに。しかしにっこりと微笑んだ少女は本当に幸せそうだった。僕は演奏の手を止め、街行く人々に褒められる彼女を眺めていた。

「彼女との旅はどうですか？　お兄さん」
僕の問いに彼は不機嫌そうに顔を上げる。
少女は今は楽譜を覚えるのに必死で、僕の売れない絵に囲まれながら布の上に腰掛けている。ベンチの上に座った僕らは彼女を眺めながら静かに言葉を交わした。

「魔女の旅……ということは、あなたは聖騎士なんでしょう？」
「随分と魔女に詳しいな」
「旅をしていれば色々と噂を耳にしますからね」
「お前は魔女が恐ろしくはないのか？」
男はきっと冗談でそう口にしたのだろう。僕は目を閉じ、首を横に振る。
「魔女は僕にとって恐ろしい物には成り得ませんよ。あなたもあの戦争で、魔女の真実を知ったのでしょう？」

男は少しだけ驚いているようだった。僕は顔を上げ、少女を眺めながら目を細める。

「僕はザックブルムの騎士の家系でした。生まれた時から騎士として育てられ、あの戦争にも参加しました。尤も、途中で脱走してしまったんですけどね」

「ザックブルムの騎士……か。お前もしかして……」

「はい。僕は魔女の騎士でした」

僕は十年前。まだ十歳そこそこの頃、家を飛び出し旅人になった。その理由はシンプルだった。幼い頃からずっと僕の傍に居た人がいなくなって、その人を追いかけて家を出たのだ。

子供一人の旅は悲惨なもので、何度も死に掛けたり騙されたりを繰り返した。やがてザックブルムとクィリアダリアの戦争――魔女戦争が始まり、僕はそれに巻き込まれザックブルムの兵士になった。

「家に一度戻されましてね。父親に言われるがままに魔女の騎士になりました。しかし大戦途中で、僕が守っていた魔女は殺され……。後は気ままな旅人生活です」

「……何故それを俺に話した？」

「ええ。まあ、そうなりますよね。単刀直入に申し上げると、あの子を僕に譲ってもらえないかと」

「無理だ」

「ですよね」

会話は即座に終了してしまった。苦笑を浮かべ騎士を見やると、騎士もまた苦笑を浮かべていた。

「魔女に、ね。会いたかったんです。子供の頃、僕の傍に居てくれたあの人に……。戦場で守る事になったのは別の魔女でしたが、僕の心の中に魔女の姿は色鮮やかに刻み込まれ、今でも焦る事無くその美しさは僕の心を支配して止まない」

幼き頃、彼女は僕の剣の稽古によく付き合ってくれた。

ザックブルムでも魔女は好かれたものではなく、彼女はホーク家の使用人だった。僕は生まれた時から彼女の美しさに触れ、その純粋な心に惹かれていた。

美しい容姿と気高い心。騎士道に通じるものをそこに見出した僕は、本気で騎士になれたらいいと思っていた。そしていつか彼女を……。

しかし彼女はいつの間にか僕の街からいなくなった。それを追いかけ飛び出して、また出会ったのは魔女。そこは戦地で、彼女は血を浴びながらも毅然とそこに立っていた。

魔女の持つ危うい美しさは僕の心を完全に支配し、僕は彼女たちの為に何でもしたいと思うようになった。彼女たちが戦争で死に絶えた後も、何とかその美しさを形として残そうと今でも暗中模索を繰り返している。

「あなたにとって魔女とはどんな存在ですか？」

「魔女だ。それ以上でも以下でもなく」

「私にとっては神です。そして世界であり……美しさの極限です。だから僕は魔女が欲しい。魔女の全てをこの手にしたいと、そう願うんですよ」

「あんな小さいのでもいいのか？」

「はい」

「ロリコンだな」

「誇らしい言葉です」

流石に呆れたのか、騎士は肩を竦めて溜息を着いた。

立ち上がり、僕が取り出したのはナイフ。振り返ると彼は既に剣に手を伸ばしていた。殺意に近い、しかし緩い警戒心を浴びながら僕は苦笑する。

「大丈夫、彼女には何もしません。ちょっとお願いするだけです」

少女に近づき、僕は優しく微笑む。それからナイフを少女に渡し、両手を合わせて頭を下げた。

「ちょっとお願いがあるんだけど、聞いてくれないかな？」

「……はい？」

「この小瓶に、君の髪の毛と……それから血を少し分けて欲しいんだ」

少女は当たり前だが戸惑っていた。しかし理由を今話すわけには行かない。
無茶苦茶なお願いだ。拒否される事も考えていた。しかし少女は小さく頷くと、長く伸びた後ろ髪を少々切り分け、それから指先をナイフで切り、小瓶に血を注いでくれた。
それほど大量ではなくてもそれで既に十分意味がある。僕は小瓶に蓋をしてナイフを受け取った。

「ありがとう。今日はこの街に滞在するんだろう？」

「はい」

「それじゃあ明日の同じ時間にここで待ち合わせよう。その時いいものを見せてあげる」

小指を差し出すと彼女も小指を絡め、約束を交わす事が出来た。
それから僕は彼らと別れ宿を取り、部屋の中にカンバスを置いて小瓶の蓋を開ける。
蒼く光沢する髪と血。そこに注ぎ込むのは特殊な油と樹液。蓋をした瓶を念入りにシェイクし、熱湯で瓶ごと暖める。
それからもう一度かき混ぜ、ランプの傍で冷やす。そうして僕は筆を手に取り、カンバスの前で呼吸を整えた。

翌日。遅刻ギリギリに広場に駆けつけると、少女と騎士は時間通りに僕を待っていた。

「やあ、お待たせ。寝ずに書いたからちょっと疲れたけど、でもお陰で見せてあげる事が出来る」

布を被せた絵。少女の前でそれを解き放つと、二人の表情が驚愕へと染まっていく。
そこに描かれているのは紛れも無く魔女の少女――蒼い髪の君。しかし彼らが驚いているのは描かれている人物ではなく、その絵が放つ凄まじい美しさにだろう。

「これは……まさか」

「うん。魔女の血と髪から作った魔法の絵の具で書いた絵だよ。この世界にあるあらゆる色彩の中で最も美しい蒼だ」

それから僕は次々と絵を披露していく。そこに描かれているのは全て魔女の姿であり、その全ての絵が未だに輝きを放ち、見る者を魅了する美しさを持っている。
これら全て、僕は魔女の血と髪から生成した絵の具で描いている。絵の実力は大したことの無い僕でも、この絵の具を使えば見る者全てを感動させるような作品を描く事が出来る――。それほどまでに、魔法の絵の具は凄まじいものなのだ。

「旅の途中で会った魔女や、戦争中に死んでいった魔女から作った絵の具でね。君のお陰で蒼を加えることが出来た。ありがとう」

ベルトポシェットに詰め込んだ小瓶には様々な色が淡い輝きを放っている。世の中広しともここまで魔法の絵の具をそろえたのは僕くらいのものだろう。

「……魔女を探して、旅をしているんですか？」

「そんなところだね。出会った魔女を絵にする旅、と言い換えた方がいいかな。彼女たちの美しさを……存在したという証を残す旅。

そういうのも、悪くはないでしょ？」
自らが描かれた絵を眺め少女は目を細める。彼女から生成した蒼の絵の具は美しく、光を浴びれば光沢し、不思議なきらめきを見せる。それは彼女の蒼い髪そのものであり、まるで生きているかのような絵を描ける理由となる。

「……美しい蒼、ですか」

「ありゃ、きれいじゃないかな？　他にも沢山の色の魔女を見てきたし、絵にしてきた。君はこれをみても美しいとは感じないのかな？」

「いえ、そういうわけじゃありません。そうじゃ、ないんですけど……」

「……君は美しいよ。誰の目から見ても、ね」

絵に布を被せると少女は顔を上げた。その不安げな表情に微笑を向ける。
魔女は自らの姿を描かれるのを嫌う事も多い。死んでいるのならば妨害される事はないが、生きた魔女なら絵を台無しにしようと考えるかも知れない。
それでもわざわざ本人に見せるのは、それが美しいものである事を教えたいからだ。そして事後承諾という形になるにせよ、題材とさせてもらった礼儀は正さねばならない。

「この絵は捨てたほうがいいかな？」

「……」

「君が望むのなら、この絵はもうこの場で燃やすなり破るなりしよう。でも君が良いというなら、僕はこの絵を持って旅を続ける。またいつかどこかで、君以外の魔女に出会った時……仲間の姿を見せてあげる為にね」
少女は迷っているようだった。ふと顔をあげ、それから他の絵を眺めて呟く。

「――笑ってる」

「そのほうがいいでしょ？　だって人間、笑っている時が一番綺麗だもの。君も例外じゃない。彼女たちもね」

死して既に笑う事も出来ない笑顔も中には少なくない。だが彼女たちは優しく微笑み、絵の向こうから今にも飛び出してきそうなリアリティを持っている。
旅を続け、魔女に出会えば僕はまた同じ行いと質問を繰り返すだろう。そうしていく事で魔女の存在と美しさを残し、そしてどこか遠くの魔女にそれを伝えることが出来るのなら、これ以上有意義な旅は僕にとって在り得ない。

「……連れて行って、ください。私の笑顔も、一緒に」

少女はそういって照れくさそうに微笑んだ。はにかんだ笑顔は可愛らしく、できれば本人を連れ去りたくなる。
騎士を見やると彼は当たり前のように剣をいつでも抜ける体勢を取っていた。担いで逃げるわけにもいかず、仕方なく下らない欲望は諦める事にする。

「安心して。この絵は売らないし、誰にも見せない。魔女以外には、

ね」

「はい……あれ？　その絵は？」

僕が片付ける絵の中、一枚の魔女の絵を指差す少女。僕はその絵を手に取り、首を傾げる。

「彼女がどうかしたのかい？」

「えっと……彼女とどこで？」

「ああ。リーベリアの西の森でね。ショートカットしようと足を踏み入れたら魔獣に襲われて……その時助けてくれたのが彼女と付き添いの騎士だったんだ。なんだ、知り合いなのかい？」

「は、はい！　あの、何か言っていませんでしたか？　次はどこに向かうとか……」

「うーん……。いや、話の通りならこの街に着いてると思うけど。ここを経由して北に向かうらしい事だけは聞いたからね」

少女は騎士を見つめる。二人はそれだけで通じ合ったのか、仕方なさげに溜息を漏らす騎士。少女はぺこりと僕に頭を下げた。

「ありがとうございます。彼女を少し、探してみようと思います」

「そうかい？　それじゃあここでお別れだね。僕はもう一泊この町で休んだら、明日の早朝に発つ事にするよ」

「はい。ルクスンさん、お元気で」

慌てて走っていくその後姿を見送り、鞄を背負う。騎士はゆっくりと彼女の後を追い始め、それから一度だけ振り返った。

「……これからも、魔女を探して旅をするのか？」

「ええ。それが僕の旅ですから」

「そうか。ならまた会う事もあるかもしれないな」

「その時を楽しみにしていますよ」

騎士は肩を竦め、それから早足で少女を追いかけていった。

二人の姿が遠く見えなくなる頃。僕もまた歩き出し、広場を後にした。

「また、どこかで」

呟いた言葉はきっと届かない。何はともあれ、あの紅い髪の魔女と彼女が出会える事を今は祈るとしよう。

徹夜で描いたせいで、今はとにかく眠い。

宿に帰ったらさっさと寝よう……。そんな事を考えながら、小瓶の中で揺れる淡く輝く蒼い絵の具を眺め、僕は頬を緩ませた。

#6　魔法の絵の具と魔女の旅（後書き）

～そし魔女劇場　教えてレヴィ子さん～

レヴィ「ルクスンさん、本当に魔女の事が好きなんですね」

ルクスン「僕の初恋、そして青春は魔女そのものだったからね……」

イルムガルド「アホくさ……」

ルクスン「そういう君だって魔女には因縁の一つくらいあるんだろう？　あの魔女戦争を生き抜いたんだからね」

イルムガルド「魔女の騎士ってのは皆そんななのか……？　これからの世の中、ただ生き辛くなるだけだ」

ルクスン「生き易さ生き辛さは関係ないさ。僕は僕の信じる道を歩む……。ところでレヴィ？」

レヴィ「はい？」

ルクスン「やっぱり、僕と一緒に楽しく旅を……ごふっ！？」

レヴィ「ルクスンさん！？　な、なんで斬っちゃったんですか！？」

イルムガルド「いや、なんとなく……。安心しろ、峰打ちだ」

レヴィ「それ、両刃剣ですよイル様！！！！」

ルクスン「がく……」

#7　紅き雫と追われる者

僕は、魔女を憎む――。何故魔女などというものが生まれてきたのだろうかと、そんな答えの無い疑問に囚われる事も多々ある。

聖クィリアダリアという国に生まれ、オルヴェンブルムの鐘の下で育った僕は、生まれた時から神の存在を疑う事も無く、当たり前のように信じていた。世界はヨト神の名の下にいつか一つになり、平和が訪れる……。そんな夢物語を、ずっと信じていた。だから騎士になろうと思った。神の国を、理想を現実にする為には力が必要だったから。

でも、段々と大人に成るにつれ僕は知って行った。この世界には神なんていないって事も、僕の行いが正しく無いという事も。戦争が始まって、戦場で血の匂いを嗅ぎ慣れるにつれて真実の足音は近くなった。敵も味方もない……。皆等しく傷ついて、死に絶えて、涙を流していた。

だから僕は魔女が嫌いだ。沢山の命を奪い、想いを無残に踏みにじる。魔女の存在さえなければ、あの戦争はきっともっと早く終っていただろうから……。

「レムリス……？　レムリスったら！」

思わず考え込んでいた思考の渦の中から意識を引っ張り出し、視線を落とす。そこには僕が最も忌み嫌う存在が僕を見上げていた。

「……どうかしたの？」

「どうかしたの？　じゃないでしょ！　さっきから道端でずうっと立ち尽くしちゃってさ。あたしの声だって聞こえてないみたいじゃない。どういうつもりよ、レムリスったら」

「いやぁ、ごめんごめん……。ちょっと考え事をしていたんだ」
「……いっつもそうやってぼうっとしてるからすぐ怪我とかするのよ。しっかりしてよね、もう」

曖昧に笑顔を返すと彼女は腕を組んで溜息を漏らす。その仕草は一々可愛らしく、僕はなんともいえない気分に陥る。
魔女――。そう、魔女。彼女は僕が守らねばならない紅き魔女……。紅の髪と瞳を持つ、十五歳にも満たない少女だ。その美しく可憐な姿を見る度、僕はやりきれない気持ちになる。彼女はきっとそれに気づいていない。曖昧な笑顔で濁す僕を見て、明るく無邪気に笑いかける。
戦場で見た憎しみに囚われた悪魔のような姿とは大いに異なるその姿に、僕は戸惑いを隠せない。彼女と旅を始めてもう一年はとうに過ぎたのに、僕は彼女を受け入れられないで居た。
商業都市ゲリア……。この大きな流通の街ならば、彼女の目的の手がかりもあるかもしれないかと考えたが、状況は難航している。既に一週間近くこの街に滞在している所為で路銀も底を尽きそうな勢いである。そろそろ目的を後回しにしてでもお金を得る方法を考えなければならない。
両手を鎖で繋がれ、背中には自らがすっぽり入れるような巨大な棺桶を背負っているというのに彼女は元気よく街を走っていた。あまり目立つといい事がないと言うのを彼女は良く理解しているはずなのに、どうしてああも元気でいられるのだろうか。
背負った巨大な剣。僕の荷物といえば、そんなところ。彼女よりもずっと軽い……しかし重くて仕方が無い大剣。それを静かに担ぎ直すと、正面に見覚えの有る姿が迫っていた。聖騎士に与えられる礼式装備を携えた騎士の姿……。旅の為か僕と同じく軽装。一見すれば神父にしか見えないその男はポケットに突っ込んでいた手を挙

げ、軽く僕に挨拶する。その影から飛び出してきた蒼い髪の少女がうちの姫様と抱き合い、なにやらはしゃいでいるのが見える。僕は小さく溜息を漏らし、旧友の名前を口にした。

「……やあ、イル。元気だったかい？」

友は苦笑し、それから肩を竦めた。それだけでお互い苦労を重ねてきた事は、何となく分かってしまった――。

#7　紅き雫と追われる者

僕らは無難に宿を取る事にした。既に僕らが世話になっている宿の隣の部屋だ。理由は単純明快、聖騎士と魔女の組み合わせはただでさえ目立つのだ。それが二組もそろって道端で話していたら騒ぎになりかねない。

イルの担当する魔女はどうやら従順らしく、きちんと髪と目を隠していたようだけれど、僕の方はそうはいかない。うちの姫様は自己主張の激しい女の子で、髪も目も一切隠そうとしてくれないのだ。自分が損をするだけだというのに、全くどうしてなんだか。

「ゲリアにはいつ着いたの？」

「昨日だ。怪しい男に絡まれて一日無駄にしちまった」

「怪しい男？」

「魔法の絵描きとかいうやつだ。魔女の血と髪で絵の具を作って歩いている」

「ああ、彼か。彼、魔獣が出る森を一人でウロウロしててね。偶然助けた時、怪我をしてた姫様の傷口から血を採取してたな。何だ、絵の具を作ってたんだね」

「……そのリアクションはどうなんだ？　というかあいつ、魔女には見せてるって言ってたが」

なら、姫様は見たのかも知れない。僕はそれを知らなくても……まあ、知らないことがあってはいけないのだろうけど、特におかしくはない。僕は基本的に姫様を守らないし、ただついていくだけ。聖騎士は同伴が目的であって、旅の内容に関しては特に込み入った決まりはない。

旅における魔女と騎士とのルールは、それぞれがお互いに作り、お互いに課すものであって強制ではない。故に僕は特に彼女との間にルールは作っていなかった。かなりの放任状態が長い間続いているので、彼女の知らない一面は日に日に増えていく。僕はそんな彼女との距離感を感じる度、どこかほっとした気持ちになる。

近づきすぎれば火傷をするのが魔女の旅……というのは僕の持論である。なんにせよこうして旧友と出会えたのだ。語りたい事は尽きない。

「旅は順調？　イルの事だから、厳しく接しすぎて彼女泣いてるんじゃない？」

「今のところあいつが泣いたのは二回だけだ」

「……泣いてるんじゃないか。もっと優しくしてあげればいいのに。妹さんには、すごく優しかっただろ？」

「……その話は止せ。そっちは相変わらず尻に敷かれているのか」
「その言い方はどうかと思うけどね。まあ、振り回されっぱなしなのは変わらないよ」
僕の姫様――ステイルガルドはとても元気が良くて気が強い。魔法もバンバン使うようなとんでもない魔女で、特に僕に対しては容赦というものがない。
一応、大分年上だと思うのだけれど、彼女は僕を呼び捨てにするし何かとあれば厄介事を僕に押し付けるのだから中々苦労の耐えない旅である。そこを言うとイルの連れている――エトリアの魔女は、とても大人しくてかわいらしい雰囲気の女の子だ。一緒に旅をするのもさぞ楽なのだろうなあ。
「ん～～っ！　レヴィ、元気してた？　人間になんかされなかった？　痛いとこはない？」
「へ、平気だよ……。ステイは元気そうだね。また会えて嬉しい」
「あたしもよ、レヴィ。そういえばあんたの騎士……名前は忘れたけど、あいつに変な事されなかった？　聖騎士って変なヤツ多いから心配で心配で」
イルは眉を潜めて片目を閉じていた。流石に突然斬りかかったりするような出来ていない大人ではないらしい。だからといって何でもかんでも寛容出来るほど大人でもなさそうだけど。
「……そういうお前は、もう少し厳しくしたらどうだ？　甘やかしすぎるのも、どうかと思うぞ」

「あははは……。でもまあ、僕は彼女が好きに出来る旅がいいと思ってるんだ。どうせ僕にしてあげられる事は……なんにもないからね」

ベッドの上に転がっては足をぶらぶらさせ、礼儀正しく腰掛ける蒼き魔女に一方的に話し続ける姫様。その表情はここ最近ずっと見ることが出来なかったような快晴の笑顔で、明るくはしゃぐその声を聞くのも随分と久しぶりだった。

僕の思い違いでなければ、彼女も最近の不毛な旅に疲れを覚えていたはず。日に日に少なくなる口数は疲労を……しかし態度には出さないその強さが余計に彼女を苦しめる。他人の心を解きほぐし、穏やかに癒してくれる……そんな笑顔を浮かべる蒼き魔女。彼女との再会は、姫様にとってきっととても大きな活力になるだろう。

「ねえ、レムリス！　今夜はレヴィと一緒に寝てもいいでしょ？　一晩中話したって足りないくらい、いっぱいいっぱい言いたい事があるの。レヴィもそうでしょ？」

「……あ、あんまり無理は言わない方がいいんじゃないかな……」

「何言ってんのよ！？　他の人間たちには無理どころか水一滴だって恵んでもらえないあたしたちなんだから、騎士くらいは利用するもんなの！　それくらいの権利ってもんをあたしたちは持ってるの！」

「そうかなあ……」

「そ！　う！　な！　の！　とにかく、今日は一緒に寝るからね、レヴィ～♪」

レヴィアンクロウ、とか言っただろうか。蒼き魔女を抱きかかえ、髪をくしゃくしゃに撫で回す姫様。確か姫様はレヴィアンクロウより二つ年上だったはず。恐らくは同じ目的のために旅をする仲間であり、妹のような存在でもあるのだろう。

安いベッドの上をコロコロと転がる二人を眺めていると、イルは静かに背を向ける。部屋の出入り口まで歩いていくと、彼は僕を手招きした。一緒に部屋の外に出ると、イルは廊下の壁に背を預け、腕を組む。それから小さく溜息を漏らし、首を横に振った。

「お前のとこの魔女のお陰で今晩はルールを犯す事になりそうだぞ」

「……そうだね。まいったな」

魔女の旅に小難しいルールは無いが、だからと言って全くないわけではない。最低限のルールは勿論必要なのだから。

人を食うべからず。殺めるべからず。旅を止めるべからず。人に逆らうべからず。聖騎士と離れるべからず……。この辺りは当然の事だろう。手錠と棺もこのルールの中に含まれる。

魔法を使うべからず、というルールはない。生きるために必要最低限の魔法の使用は許されている。しかしそれを人間に向けたり危害を加えた場合、即刻聖騎士は魔女の首を刎ねる義務を持つ。魔女の旅の残りの多くの部分は聖騎士の判断に任されるアバウトな部分が大きい。聖騎士は元々強い権力……司祭にも匹敵する発言力を持つ。多少の無理は簡単に通す事が出来る。

故に僕らのように、全ての教会を巡らず、他の目的のために遠回りする事も可能である。定期的に教会に顔を出す必要はあるものの、それさえパスすれば殺される事も無い。そもそも旅をする目的は苦難を乗り越え、清い心と信仰心を高め、神に許された純粋なる存在へと昇華する事にあり……。その最終目的さえ果たせればそれで良いのだ。

ただしかし、どうしても破ってはならない重い罰則というものも幾つか存在する。それは暗黙のルールでもあり、同時に魔女の心を試す法でもある。その中の一つを今、僕らは破ろうとしている。

「――他の魔女と旅を共にするべからず。会って話すくらい問題ないだろうが、一晩同じ屋根の下っていうのはどうだろうな」

それは人間が魔女を恐れているという証拠でもある。魔女が二人以上同時に行動すれば、その脅威は何倍にも膨れ上がる。聖騎士二人ではどうにも阻止できないような、そんな脅威が人の身に降り注ぐ可能性も十分考えられる。

教会にしてみれば、魔女という存在はもう忘れたいもの……。しかし脅威である以上放置も出来ない。だから僕たちが監視をするのだ。

「……噂になると面倒だね。仕方ない、少し街から離れた場所に野宿するってのはどう？　人気のないところなら、二人もリラックスして会えるだろうし」

「まあ、それが無難か。幸いこっちはまだ部屋を取る前だし、レヴィはお前の部屋だ。さくっと連れ出して出て行くとするか」

意外にも彼は僕の提案をあっさりと聞き入れてくれた。僕が持ちかけたのは曲りなりにも共犯の要請である。しかし、彼はまるで最初からそんな事はどうでもいいと言わんばかりだった。

「……ふふ」

「……何がおかしい？」

「いや……。やっぱり、イルは優しいんだね」

「掟と名の付く物全てが嫌いなだけだ。それに、あいつらは人の不幸になるような事に魔法を使ったりはしないだろう」

それが彼がこの旅の中で育み、そして判断した事だった。後に彼に話を聞いて発覚する事なのだが、レヴィアンクロウは人間相手に何度か魔法を使用している、との事だった。勿論それはルールに違反する事だ。だが、それはうちの姫様も同じ事だ。

時に、魔女は人を救う為、何かを護る為……人間に向かって魔法を使う。これは重大なルール違反であり、掟を破った魔女の首は僕ら聖騎士が断たねばならない……。だが今の所、僕らはそれを執行するつもりはなかった。

一体それが何を意味しているのか……。教会への、クィリアダリアへの、ヨト神への反逆……。神罰が当たるとかそんな風に言われても仕方のないことだと思う。だが、神はこの世界にはいない。ヨト神なんてもの、この世界にはいないのだ。

イルムガルドも僕も、あの戦争で多くのものを失った。どうしようもなく、失った。それは絶対に取り戻せないし、何かで代用できるものでもない。だから僕らは永遠にこの傷と向き合って生きていく義務がある。

彼は魔女との旅の中でその答えを模索しているのだろう。それは僕も同じ事だから、何も言わなくてもわかるのだ。魔女は魔女なりに。騎士は騎士なりに。揺らぎ、惑い……答えを探している。

「――教会なんぞクソ食らえだ。お前だって本当はそう思ってるんだろ？」

口元を吊り上げるように、彼は笑いながら言った。その言葉はどこか自虐的で……しかし、共感出来る。

「……そうだね。クソ食らえだよ」

教会はもう、本当は魔女の事なんてどうでもいいのかもしれない。先の魔女狩りで魔女らしき者は真偽問わず皆殺しにしたのだ。たかが十五程度の少女に一体何が出来るというのか。

結局の所、この旅は厄介払い……。聖都に魔女を置いておきたくないから、都合の悪い聖騎士を追い出すのと一緒に纏めて行われる……。制度もずさんで、こうして僕らは自由に旅が出来る。そんな教会がテキトーに作った儀式を心から信じ、毎日努力を続ける魔女を見るのは辛い。その先に救いがないことなど、火を見るよりも明らかなのだから……。

あの魔女戦争と呼ばれた戦の中で、どれだけの悲しみが生まれただろう――？

僕が彼、イルムガルドと出会ったのは戦場の中での事だった。十代で戦線に投入され、僕らは騎士としての武勲を立てた。やがて戦の中で驚異的な速さで昇進し、聖騎士になり……。それから僕らは対魔女戦専用部隊として運用される事となった。

戦争末期、敵の頼みの綱といえば正に魔女、魔獣だけであった。実際、魔物の類は戦線に一度投入されれば甚大な被害を与え、文字通り戦況をひっくり返すだけの力を持っていた。そんな化け物専用の戦闘部隊としての僕らの日々は、ひどく過酷なものだった。

最初は十三人の聖騎士がいた。しかし最終的に生き残ったのはたったの四人……。倒した魔物の類の数はゆうに二十を超える。恐らくあの戦線の中で最も活躍し、最も武勲を立てた部隊だったのだろう。だがしかし生き残った僕らはそんな事には微塵も興味がなかった。

魔女との戦いの日々は僕らの心を壊していった。どうしようもない過酷な戦場の中、僕らは己を壊す事でしか生き永らえる事が出来なかった。今でも眠りに付けば夢に出てくる荒れ果てた大地の姿……。かつて森であった場所でさえ、魔女との戦いで夜を明かせばそこには荒野が広がっていた。

丘の上、全身に様々な武器を突き刺され、串刺しになって風に吹かれる魔女の亡骸はまるで何かのオブジェのようだった。僕はその亡骸の前で崩れた重苦しい甲冑を脱ぎ去り、折れた剣を片手に戦場を見渡していた。

戦争が終わったのだと知った時、僕の中にはその景色だけが残された。ようやくオルヴェンブルムに帰った僕たちは賞賛の声で迎え入れられた。だがそれがとても空しく、上っ面だけの物に過ぎないことは誰よりも僕らが一番良く判っていた……。

聖騎士は戦争の中で魔女をも越える絶対的な力として世界に知れ渡った。それと同じ数だけの憎しみと悲しみを背負い、僕らは生きている。魔女に突き刺した剣の鈍い感触も、魔獣に立ち向かい腕の一振りで圧し折られた身体も、全部忘れる事は出来ない。

それからの日々は、まるで地獄だった……。あの戦争の後にある平和……それが血塗られた物にしか思えなくなっていた。僕は……それから何をするでもなく、教会の言うとおりに働いた。他にする事は何もなかった。

イルムガルドも僕と同じく、平和な世の中をもてあましているかのようだった。戦場の中で死んでいく覚悟を決め、死んで行く仲間たちを見送ってきた。なのに僕らは生き残り、この残酷な世界の中で生きていかねばならない。もてあますのは平和だけではない。この、鍛えに鍛えた力も……。

生き残った四人の聖騎士がそれぞれ別の任務を与えられるまで、それほど時間はかからなかった。そして僕らは何も告げずに判れ……そして全員が魔女の旅の護衛という形で一堂に会する事となったのだ。

僕に与えられた新しい使命、それは魔女の騎士……。僕らが散々殺し、いたぶり、燃やしてきた世界の異端者……。それを今度は護れと言われた時、僕は笑顔を取り繕いながらも腸が煮えくり返る思いだった。

散々殺せと言ったくせに、今更殺さず護れというのか？　あの戦争の中で、どれだけ生きるべき者が死に、死すべき者が生き延びただろう。正義などこの世界には存在しない。あるのは神の名には似つかわしくない、権力と欲望の渦巻く都だけだ。

だが、それも悪くないのかもしれない。旅をする事になれば、この呪わしい都に住む必要もなくなるだろう。少年の頃描いていた理想は簡単に燃え落ちて、僕の手の中に残ったのは小さな少女一人だった。

「――――ねえ」

旅が始まる日、彼女は僕を見上げて問いかけた。

「貴方、なんていうの？」

真っ直ぐに、悲しむことなんて知らない強い瞳……。僕はどんな表情を浮かべていただろう。己の名を名乗ることさえ憚られた……。彼女は美しく、そして僕が殺してきた魔女たちもやはり美しかったのだと再認識させられるから。

「……レムリス。レムリスって言うんだ」

「……ふうん。レムリス……かあ」

少女は少しの間思案した後、にっこりと太陽のような笑顔を浮かべて僕を見つめる。そしてそっと、小さな手を差し出した。

「いい名前ね。これからよろしくね、レムリス」

差し出された小さな小さな手。傷だらけの手……。それが小刻みに震えているのは、きっと僕の事が怖かったからなのだろう。当然の事だ。聖騎士は魔女を殺す存在……その代名詞なのだから。だというのに懸命に恐怖を押し殺し、きっと……沢山の気持ちを押し殺し。僕に手を差し出した少女……。

僕は黙ってその手を強く握り締めていた。両手でそっと包み込むように……。何故だかその時、少しだけ救われた気がしたから。この子を護ろうと、そう思った。そこに理由はなかったのかもしれないし、あったのかもしれない。でも僕は漸く自分の役目にめぐり合えたと思った。彼女と共にいる事……そしてその先に、僕の探す答えはあるのだろうか……？

旅が始まった。その中で僕は彼女の事を知り、彼女に少しずつ惹かれていった。しかしそこには必ず距離があるように心がけ続ける。これからも恐らく僕らの距離はこれ以上縮まる事はないだろう。

僕は彼女の傍に居る資格などない人間だ。人殺しという言葉では表現しきれないほど、僕はあらゆる物を殺し断って来た。いつか彼女の旅が終わる時、それは僕の旅が終わる時でもあるのだろう――。

そんな過去の事を思い出しつつ、僕はイルムガルドと一緒に町から離れた森の中でマグカップを傾けていた。堅苦しい礼式装備を脱ぎ去り、僕らは共に遠巻きに焚き火を眺めながら星空の下で呼吸を共にしていた。

焚き火では二人の魔女が肩を並べて座り込み、お喋りに興じている。この調子なら一緒に寝るなんて必要はなさそうだ。一晩中だって話し続けているだろうその勢いに思わず笑みが零れる。イルムガルドはカップを傾け、それから周囲を見渡した。

「しかしいいのか？　この森は魔獣が出るって噂だったんだろ？」

「ああ、それなら心配いらないよ。その魔獣だったら、もう倒してしまったからね」

「お前がやったのか？」

「……いや、うちの姫様だよ」

僕の言葉に彼は流石に驚いたのか、僅かに眉を潜ませ姫様へと視線を向けた。彼が驚くのも無理はない。魔獣という奴は聖騎士が部隊を組んで漸く討伐出来る代物なのだ。それを魔女が一人で倒したというのならば、驚異的以外の何者でもない。

力をつけ、戦に成れた魔女は文字通り鬼神の強さを誇る。しかし現在の魔女たちは戦争など経験していないただの少女であり、魔法が使えるといってもそれほど大した物ではないのだ。だが、うちの姫様は違う。彼女は夜な夜な魔法の特訓を行っているのだ。勿論、それは脅威とも受け取れる事である。だが僕はあえて見て見ぬフリをしてきた。

結果的に彼女の魔法は先日一人の旅人を魔獣から助けたのである。完全に息の根を止めたとは言わないが、かなりの手傷を負わせる事に成功したのだ。あの傷ならば、魔獣ももう姫様に寄って来たがらないだろう。

仮にまた魔獣に襲われたとしても、姫様一人で事足りるというものだ。それに付け加えその気になればここには魔獣狩りのエキスパートが二名……更には蒼の魔女もいる。魔女部隊二つにも匹敵する戦力なのだ、どこだって堂々と歩いて問題ない。

「魔法の訓練か……。確か、あのガキは炎の魔法を使うんだったな」

「炎の魔法は、とても攻撃的な魔法だからね。戦の時代ならば重宝

されたんだろうけど、今の世の中じゃ邪魔以外の何者でもないよ」

「それを鍛えているんだろう？」

「うん。まあ、護身って事もあるんだろうけどね……。彼女の目的の為には必要な事なんだ」

そう、彼女には魔女の旅以外にどうしても果たさねばならない一つの目的がある。その目的への手段として魔法のレベルアップは必要不可欠な事だったのだ。それだけではない。彼女は僕に時々剣を教わっている。魔女だけあり、飲み込みは驚くほど早い。この調子なら彼女は立派な魔女兵になれることだろう。

しかしそれにイルムガルドはいい顔をしなかった。まあ、当然の事だろう。力を持った魔女の末路などいつのご時世も相場は決まっている。だからこそ僕は彼女の旅を見届けねばならないのだ。もしも道を誤った時、彼女の命を奪ってあげられるように。それが僕が彼女に力を与えた責任というものになるのだろう。

「そういえば、レヴィはどんな魔法が使えるんだっけ？」

イルムガルドは暫く考え込み、それから空を見上げおざなりな態度で答える。

「わからん」

「……使った所を見た事があるんでしょ？」

「ああ。だがわからないものはわからない。上手く言葉に出来ないんだ」

「……どういう事？」

「さぁな……。ま、それを確かめるのが俺の目的といえば、あながちハズレでもないな」

紅茶を口にしながらイルムガルドはそう語る。彼の意図する事は僕にはわからなかったけれど、まあ得てしてそういうものだ。魔女の旅とは。騎士の旅とは。秘密と危険、そしてそれぞれの過去に導かれる物なのだから……。

姫様は飽きもせずずっとレヴィアンクロウとのおしゃべりを楽しんでいた。僕らは顔を見合わせ、交代で見張りをしながら眠る事にした。夜の闇の中、しかしここは人の寄らない魔獣の森……。光の下を歩けない彼女たちにとっては心の安らぐ場所だったのだろう。

夜の密会は文字通り夜明けまで続いた。そうして僕らは朝を向かえ、別れの時がやってきた。時間は必ず進み、滞る事はない。二人の魔女は朝焼けの景色の中向かい合い、強くお互いの身体を抱きしめあっていた。その温もりを、においを、存在を忘れてしまわないように。

「また……また会いましょう、レヴィ！　気をつけてね……。元気でね」

「……ステイも、元気でね……。危ない事しちゃだめだよ？　レムリス様に、無理も言わないでね」

「もう、そんな余計な心配はしないの！　それじゃあ……またね。また会いましょうね。きっと……必ず」

「うん……。必ず。約束だよ」

二人は指と指を絡め、強く誓い合った。辛く苦しい旅はこれからもずっと続いている。その旅の中、二人はお互いを想いあうのだろう。遠く離れていても、魔女はお互いの事を感じ取れるという噂を聞いたことがある。彼女たちもまた、お互いの命の火を感じているのだろうか。

旅立ちの時、僕はイルムガルドと肩を並べていた。彼はこれからもきっと彼女との旅を止めはしないだろう。いつかはきっと、お互いに何らかの答えに辿り着く……。その時まで、暫しの別れだ。何も心配する事はない。僕たちの傍に魔女がいる限り、また彼との再会は約束されているようなものなのだから。

「それじゃ、俺たちはもう行くぞ」

「うん。僕らはもう少しこの町で情報を集めてからにするよ」

「サボりもほどほどにな」

「……ははっ！　君の方こそ、真面目にやるんだよ？」

イルムガルドは僕の肩を叩き、微笑を浮かべながら背中を向けた。黒い装備が風に靡き、蒼い魔女の髪もまた揺れている。魔女は棺を担いで歩いていく。何度も何度も振り返り、姫様に手を振りながら。

二人の背中が遠く消え、小さくなって見えなくなるまで僕らはその場に立ち尽くしていた。やがて邂逅は終了し、僕は姫様へと視線を向けた。彼女は泣き出しそうな顔をしていた。目尻に涙を浮かべ、必死に涙を堪えている。

「……良かったのかい？　奴の事を話さなくて」

「……いいの。これは、あたしの罪……。あたしだけが罰を受けれ

ば済む事だから」

「彼らに協力してもらえば……奴の足取りだって」

「それはだめっ！！　レヴィが……あの子が危険な目に合うのだけは、ぜったいにだめ……っ」

少女は胸の前で手を合わせ、強く目を瞑っていた。きっと自分に何度も言い聞かせているのだろう。何を言い聞かせているのか……僕はそれをあえて考えなかった。

旅立ちには良く似合う、空の晴れた日の朝の事だった。姫様は涙を拭い、振り返る。そしてさりげなく僕の手を握り締め、身を寄せた。僕は彼女の手を握り返し……それから空を見上げる。

「……行こうか。奴を探しに」

「……ええ」

少女はまた歩き出す。棺を背負い、歩き出す……。僕は鮮明に覚えている。あの日は強く雨が振っていた。道端に行き倒れた一人の騎士……その手を握り締め、彼女は叫んだ。その言葉はきっとずっと忘れる事は出来ないだろう。

その時から僕らの旅には大きな罪と目的が生まれた。全てはどこかへ消えてしまった、あの男を捜す為に……。僕は少女の半歩後ろを付いていく。彼女はこれからどんな選択をし、どんな答えを見つけ出すのだろう。

終わりの時、傍に居られたら嬉しいと思う。それは……イルムガルドも同じだろうか？　僕らは今日も旅を続ける。同じ、この空の下で……。

#7　紅き雫と追われる者（後書き）

～そし魔女劇場　教えてレヴィ子さん～

レヴィ「
丸々一年ぶりに次話が投稿されました！」

ステイ「ったく、どんだけサボれば気が済むのかしらね、作者は」

レヴィ「ここまでは書き溜め分なので、次から新作になるんだよね」

ステイ「そういう事……。文章が変わってそうで怖すぎるわ」

レヴィ「全然変わってないかもね」

ステイ「……それはそれで全く成長してないって事じゃない……？」

レヴィ「ステイは、また出てくるんだよね？」

ステイ「そうね。またそのうち顔を出すから、その時まで覚えておきなさい！」

レヴィ「またステイに会えるんだね。嬉しいな」

ステイ「あたしもよ、レヴィ～～っ！！　すりすり！　すりすり！！」

レムリス「……なんだか、この景色どっかで見たような気がするね。蒼海の――」

イルムガルド「止めろ！　それ以上何も言うな！！！！」

レムリス「……だね」

#8　月影牢

確か、あの日もそう。今日のように、しっとりと雨が降り注ぐ日の事だった――。

この重苦しい牢獄の中で、長い……気が遠くなるほど、長い年月を過ごしたわたしにとって、稀に訪れる来訪者の存在はとても希少だった。その日、わたしの前に現れたのは一人の少女だった。遅れて一人の背の高い男が続く。

深い、洞窟の奥にあるこの場所に何故二人がやってきたのか……それはわたしにはわからない。もしかしたら、この降り注ぐ雨の所為だろうか……？　少女は……蒼い髪をしていた。闇の中でもはっきりと認識する事の出来る美しい輝き……成る程、納得できる。彼女は……わたしと“同類”なのだ。

少女は格子の向こうからわたしに手を伸ばした。何か……懸命に伝えようと叫んでいる。けれどもわたしにはその言葉の意味が判らなかった。長い間、生きているのか死んでいるのかも判らない日々が続いた。どれくらいの年月が過ぎ去り、わたしは今……どうなっているのか。

そっと伸ばした手……。これは、夢なのだろうか。ずっと、長い間、誰もここにはやってこなかった。誰もがきっと、忘れたがっていたから……。わたしは知っている。人間は、決して異形を受け入れたりはしない。だから人間は閉じ込める。追い払う。弾劾する……。

少女の指先が、わたしの乾いた指先に触れる。その瞬間、わたしは沢山の事を思い出していた。脳裏を過ぎる千の、万の、夜の記憶……。少女がわたしの指先を、小さく白い指で絡め取る。何故……この子は泣いているのだろうか。

見ず知らずのわたしの為に、こんなにも悲しい顔が出来る……。彼女は……わたしの知っている人間とは違う。わたしの知っている

……魔女とも違う。
時代は……変わったのかもしれない。わたしが生きていたあの頃、魔女戦争と呼ばれる物があった。そしてわたしはここで、長い長い年月を隠れ、生き延びたのだ。そう、彼のお陰で……。

「……お姉ちゃん、どうしてこんなところにいるの？」

あの日……。天から月明かりを取り込む以外には何の役にも立たない穴の上から落ちてきた少年は純粋な瞳でわたしにそう問いかけた。わたしの腕の中、彼はわたしを恐れる事も、不気味がることもなく……。ただ、静かに問いかけたのだ。
指先に誰かが触れる事の嬉しさと気恥ずかしさをわたしは何年かぶりに思い出していた。少年の目はわたしの姿を映し出している。自分の姿を数年ぶりに見つめ、わたしは途端に居ても立っても居られないほど……急激に、恐ろしくなった。
この岩戸に閉じ込められてから、どれだけの年月が流れただろう……。世界にとっては刹那の出来事でも、わたしにとっては永久に等しい……。知る事がただ幸福ではなく、絶望さえも運んでくると悟ってからは、ただ月の満ち欠けを数えるだけの日々に終止符を打つ事にした。わたしは、時を数えない。
だが、少年の瞳に映りこんだわたしは確かに時を感じさせた。自分を見つめる事のない闇の世界……。その日は雨が降っていて、太陽の光はとても微かだった。それでも頭上から降り注ぐ光の中、わたしたちは確かに見詰め合っていた。

「……僕……助かったの？」

少年ははるか頭上を見上げ、そう呟いた。わたしの腕の中から逃れ、少年はじっと黙って空を見上げ続ける。かつて、ここに封じられたばかりのわたしのように……。

何もなく、時の止まった永久の世界。そこに落ちてきた少年に触れた指先が、急速にわたしに時を取り戻していく。時は魔女戦争の渦中……。わたしは、絶対に在り得ない恋をした――。

#8　月影牢

「それじゃあ、ずっとここにいるの？」

頷くわたしに彼は心底驚いたと言った様子だった。この岩戸は、村から離れた山中の洞窟に存在する。退魔の術式が幾重にも施された異様な洞窟の奥底、降ろされた格子の向こうでわたしは生きながらえてきた。

ここには何もない。何もない。何も在るはずがない。ただ、岩肌が露出した狭い室内に、わたしだけが存在している。この孤独すぎる檻の中でわたしは何年も過ごしてきた。人と言葉を交わすのは久しぶりすぎて、上手く喋る事が出来そうにもなかった。仕方がなくわたしはぽつりぽつりと、本当に小さな声でゆっくりと語るしかなかった。

彼はやはり村の人間だった。しかし、わたしの事は知らないのだという。それも仕方のないことなのかもしれない。村の人々にしてみれば、わたしの存在は忘れたいだけの物なのだろう。忌々しい記憶に蓋をして忘れ去り、次の世代には語らぬ事で封殺する……。実に理に適っている。

「山の奥には、危ないから入っちゃダメだってみんな言ってた。でも、女の人がいるなんて聞いてなかったよ」

少年は岩の壁を背に、小さく膝を抱えて丸くなっていた。それも無理の無い事だ。今日は……冷える。冬、というわけではないのだろうが、もう秋ではあるだろう。森に続いている天井の穴からは変色した落ち葉が落ちてくるのだ。少年が寒がるのも仕方が無い事だった。

しかし、わたしには彼に貸し与える服も、毛布も、何一つ持ち合わせていない。わたしの身体を覆う黒い布切れは、元はドレスだったものだ。しかしこの長い長い、気の遠くなるほど長い年月の中……既に洒落た面影はどこにも残されてはいない。何も出来ない。わたしには……。

「お姉ちゃん、そんな格好で寒くないの？」

「……うん、大丈夫」

何年ぶりだろうか。他人から血の通った言葉をかけられるのは……。それだけで嬉しくて涙が出そうだった。ぐっと堪える事が出来たのは、相手が子供だったからだろうか。それでも声は震え、変なトーンになってしまった。

恥ずかしかった。恥ずかしいなんて気持ちをどれだけ久しぶりに感じるだろうか。羞恥心など持っていては生きていけない人生だった。だから何でもやった。何でもやったのだ。だというのに何故だろう？　このぼろぼろの服装も、何年も何年も水浴びをしていない身体も、伸びきってだらしなく地面に擦れる長い髪も……何もかもが気恥ずかしくて仕方がなかった。

そんな時代があったわけではないのに、なんとなく、まるで乙女に戻ったようだと感じていた。少年と出会ってからどれくらいの時間が過ぎただろうか？　誰かが助けにやってくる気配は今の所ない。当然か……。わたしがここにいるのだから。

「そういえば……お姉ちゃん、ありがとね」

「……？」

唐突に彼がそんな事を言う。しかしわたしはまるで理解が出来ず首を傾げてしまった。少年は頭上を見上げ、穴を指差す。

「あんなに高くから落ちてきたんだよ？　もしお姉ちゃんが受け止めてくれなかったら、僕死んじゃってたかもしれないじゃないか」

少年は悲鳴を上げながら落ちてきた。すごい勢いだったので慌てたけれど、わたしの身体はなんとか付いてきてくれた。もしも彼が叫んでくれなかったならばきっと気づけなかっただろう。そうしたらここに、確かに成る程……。わたしのほかにもう一つ、死体が転がる事になっていただろう。

わたしは首を横に振った。しかし少年は照れくさそうに微笑を浮かべるのだ。わたしは何となく、何度も何度も繰り返し見上げた夜空を見上げた。子供一人ならば通れるだろう、しかし小さな竪穴の向こう、雨が降り注ぎ続けている……。

「……どうして、山に？」

わたしが問いかけたことが驚きだったのだろうか。少年は目をぱちくりさせ……それから項垂れ、気を落とした様子だった。何か、聞いてはいけないことを聞いてしまったのだろうか……。

「……お母さんが、病気で。山に、薬草を取りに来たんだ。皆、山に入りたがらないから、一人で」

しかし、少年の手の中に薬草はなかった。何もこんな夕暮れ時に山に入ったわけではないのだという。昼間からずっと、薬草を探していた。それでも見つからなくて……。薄暗くなるまで探し回り、ここにあった穴に気づかず落ちてしまったのだという。

彼はずっと、そわそわしていた。それはきっと、病に臥せっている母親の所に早く戻りたいからなのだろう。彼には小さいなりに強い使命感があった。わたしは小さな少年の母への心遣い、そしてこんな闇の中に落とされて直泣く事も喚く事もないその勇気にいたく感心した。

どうにかして、ここから彼を出してあげたい……。しかし、ここは魔物を閉じ込める岩戸の奥底……。堅牢な格子の向こうにある異界だ。地上に出る為には、幾重にも張られた退魔の結界を貫かねばならない。だが、それはわたしにとっての問題であり……人間である彼には何の障害にもならないだろう。

最大の問題は、この古びて直頑丈さを失う気配の無い格子……。わたしは格子の前に立ち、その冷たい感触に指を這わせた。何年ぶりかに触れる格子はあの頃よりざらつき、そしてやはり冷たくわたしの感覚に滲んで行く……。

「……ここから、出たい？」

問いかける言葉。まるで自分に語りかけているかのようだった。少年は強く頷き、それから正直な気持ちを訴えかけた。

「出たい……！　早く帰って、母さんの看病がしたい！」

「……そう、わかった。じゃあ……貴方をここから出してあげる」

「で、出来るの！？」

出来るとは思って居なかったのだろう、彼は驚きの声を上げた。勿論――出来はしない。だがそれはわたしにとってはという事であり、彼にとって障害となるのはたかが鉄格子くらいのものだ。

己の掌をじっと見詰める。わたしは異形――。その気になればこの格子も、そしてあんな陳腐な結界も突き破る事が出来る。だからわたしは己の意志でここに閉じこもったのだ。いつか……外の世界に出たいと思える日が来るまで。

その答えはまだ判らない。だが、少年をここから出してあげたいという気持ちは確かだった。鉄に手をかけそれを握り締める。わたしは振り返らず、少年に問いかけた。

「わたしがここを開けるから、その間……どうか、目を閉じていてほしいの」

「え……？　開けるって、どうやって……」

論ずるよりも、わたしは片手を差し出して彼の言葉を遮った。少年は暫く黙っていたが、やがてそっと両手で視界を遮り、それからわたしに背を向けた。

わたしは……ずっとこの力が嫌いだった。恨む事はあれども感謝した事など一度足りともなかった。けれども今、少しだけ嬉しく思う。力――誰かの為に使う事が出来るのならば……。

少年の笑顔を思い浮かべ、わたしは格子を破壊する。握り締めた鉄は簡単にひしゃげ、一瞬で形状を変化させる。この衰えた細腕にも、まだこれだけの力が残っている。恐ろしいものだ……魔女というものは。

凄まじい音に驚いたのか、少年は背中を丸くしていた。わたしは静かに彼の背後に立ち、そっと声をかける。

「もう、大丈夫……。さあ、格子は外れたから」

「え……？　ほ、ほんとだ……ど、どうやったの！？　すごい！」

少年は恐る恐る振り返り、それからすぐにぱあっと明るい笑顔を浮かべた。わたしは嬉しくなって……一緒に笑いたかった。でも、笑う事は出来なかった。長い間動かす事をしなかった顔の筋肉は笑顔の形さえ忘れてしまったのだろうか。

わたしは少年から母親の病状を詳しく聞いた。山に入るのは危険だが、ここは山中……それに帰り道に彼の求める薬草がある事をわたしは知っていた。驚く彼だったが、当然の事だ。魔女などという生き物は、普段から人里離れた場所で生きている物……。わたしが外で生きていた時代と森が変わっていないのであれば、そこに彼の目的は存在する。

「ありがとう、助かったよ……！　本当にありがとう！」

二度、礼を言ってから。彼はそっとわたしに手を差し出した。意味がわからずに黙り込むわたしに彼は当たり前のように言う。

「何やってるの？　ほら、一緒に行こうよ！」

「え――」

絶句してしまう。その手をその時ほど魅力的に思った事はない。わたしの体の中に流れる魔女の血は、この世界に解き放たれる事を望んでいた。魔物として、命を貪る事を常に望んでいる。わたしは……その宿命を封じたかったのだ。

簡単すぎる事だ。だから絶対にやってはいけなかった事をわたしはしてしまった。格子を外す事など容易く、何の問題もなく……。

そうであると知る事を恐れ、それをしなかった。わたしは……外の世界が怖かった。
村の人間がわたしの事を忘れたとは限らない。大人たちはまだ、わたしの事を覚えているかもしれない。外の世界に出れば騒ぎは広がるだろう。わたし自身、何をしでかすかわからない。ここに閉じ込めた人間たちに復讐をしたがる可能性もある。何しろわたしは化け物……自我の制御など、時の運なのだから。

「お姉ちゃん？」

少年の眼差しにわたしは首を横に振って応える。格子の奥に戻り、闇の中に座り込む。少年は拒絶の所為か、寂しげにわたしを見つめていた。胸の奥が少しだけ痛んだ気がした。でも、わたしと一緒に居ない事こそ彼にとっての幸福に他ならない。

「……どうしても、ここに残るの？」

「……」

「わかったよ……じゃあ……もう無理に連れ出したりしないよ」

少年は頷き、それからわたしに背を向けて去っていく。洞窟の中へと消えていく後姿を見送り、わたしは膝を抱えていた。もう、会うこともないだろう。
しかし少年は途中で引き返してきた。そうして格子に捕まり、わたしにもう一度手を伸ばしたのだ。指一本だけを立て、少年は無邪気に笑う。

「じゃあ、また会いに来るよ！　お礼をしなきゃけないでしょ？　だから待ってて！　約束だよ！」

どんな言葉で、応えれば良かったのだろうか……。
ただ立ち上がり、わたしは手を伸ばして少年と指を絡めた。それが約束の証……。少年の小さな手はわたしの指を強く絡め、上下に揺さぶっていた。わたしは急に泣きたくなって、でも泣く事はなかった。
小さな足音が遠ざかっていく。わたしはただ、ずっと格子の奥で……結んだ指を見つめていた。雨はいつの間にか止み、頭上からは月の光が差し込んでいる。これは、何かの罰なのだろうか。或いは、わたしにとっての救いなのだろうか――？

「お姉ちゃんって、何でも知ってるんだね」
感心するようにそんな事を語りかけてくる彼に、むしろわたしの方が関心してしまう。もう、彼は二度とここには来ないだろう……そんな不安と期待の入り混じった時間は、たったの三日で過ぎ去ってしまった。
無事に薬草を入手し、母親の具合もよくなったのだという。それから三日後、少年はわたしのところにきちんと顔を出しにきた。彼の手には森の中で取れる果物があった。少年もどれが食べられるのか判らなかったらしいのだが、わたしはその名前とどんな味なのかを彼に教えてあげることにしたのだ。
森の中で暮らしていたのは、今からもう随分と前の事になる。だが森の歴史に比べればわたしの歴史など浅い物なのだろう……。少年の手から果物を受け取り、数年ぶりに食べ物を口にする。しかし……その味はわたしには判らなかった。

「ねえ、お姉ちゃんはどうしてここにいるの？」

その質問は以前にも受けた事がある。だがそれを説明するのはとても長く、そして悲しい事も思い出さねばならない。何より彼にとって、決して良い事ではないのだろう。

ここでこうして彼と一緒に居るだけで、わたしは強い罪悪感に苛まれていた。わたしが人間と一緒にいるなど、絶対にありえない。あってはならないのだ。だが、彼は歴史を知らない。世界を知らない……。わたしを何かの枠に入れる事が出来ず、正常に判断出来ずにいるのだ。

「そういえばお姉ちゃん、頭から角が生えてるよ？　山羊……みたいなの？」

自分の即頭部に手を伸ばす。そこには忌々しい魔物の証が残されていた。魔女として生まれた時から常にわたしの傍にあり、わたしを苦しめてきたものだ。それを彼に見られるのが嫌でわたしは両手で角を隠そうとした。しかし角は手よりも大きく、全てを覆う事は出来ない。

彼からは純粋に感謝の気持ちを受ける。そこには何の裏表もないのだろう。だがわたしは魔女としてそれを信じて良いものか、判断に困っていた。結局わたしたちはろくに言葉を交わさずその日が終わり……しかし、少年は何度も何度もわたしの所に足を運び、姿を見せてくれた。

人間扱いをされるのはどれだけ久しい事だっただろうか……。彼はわたしの為に服を用意してくれた。暗い穴の中で、彼にしかお披露目することの出来ない服……。勿論、今までわたしが着ていたのよりましなだけで、世間的に見ればどうしようもないぼろ布同然の物なのだろう。だが、それでもわたしにとっては久しく感じていなかった人の生き方そのものだった。

わたしは彼に様々な事を教えた。山の中で取れる食べ物、生活の

知恵……。彼と言葉を交わす内、次第にわたしにも言葉が戻ってくるのを感じた。止まっていた時計の針が動き出し……それがまたわたしを苦しめていく。

一度動き出した針はもう止める事は出来ない。気づけば彼が来ることだけを生き甲斐にしている自分がいた。永劫そのものであった時の流れは本来の重さを取り戻しわたしの両肩へずっしりと圧し掛かる……。忘れ去っていたはずの寂しさや悲しさ、そうした感情が喜びと共に戻りつつあった。

なにも、最初からわたしはここで暮らしていたわけではなかった。穴倉に押し込められる前は、どこにでもいる田舎の苦しい村に住む子供であった。しかし、この角がそれをわたしにとっての普通にはしてくれなかった。

わたしが生まれるより前、村は一匹の魔獣の襲撃を受けた。そこで村は一度壊滅し……わたしの母は魔獣の子を身篭ったのだ。結果生まれたのがわたしである。しかし、それでも母はわたしに優しかった。魔獣と戦って死んだという父……。夫を殺した魔獣の娘を育てるのは、どれだけの葛藤があったかわからない。それでも母は優しかった。わたしは母が大好きだった。

しかし、村ではわたしの姿がより異形の特色を色濃く出すような年代になってくるに連れ、わたしを魔獣の再来と恐れる声が上がり始めた。母はわたしを庇ったが、わたしは自ら母に迷惑をかけないためにこの暗く深い洞窟の中へと足を踏み入れたのである。

あれから、母とは一度も会っていない。恐らくは死んだのだろう。わたしは、“死”さえも従える力を持つ魔女……。全ての魔女がこれだけの力を持つのかどうかはわからなかったが、わたしはわたしの元になった魔獣の力の所為で安息な死からさえも拒絶された存在となった。

闇の中で暮らすうちに、時は流れ流れた。全てが遷ろう世界の中で、わたしだけを取り残し世界は変わっていく……。人であるならば絶対に逆らうことの出来ない時の濁流に、母も例外なく飲み込ま

れ朽ち果てて行ったのだろう。
母の事を思い出したのがまずかった。わたしは急に何もかもが怖くなった。少年は何度もわたしに会いに来る。そうして、何も変わらないわたしだけを取り残して少年は育っていく。気づいた時には彼は背も伸び声も低くなり、初めて会ったばかりのあどけなさは消え去っていた。

「……もう来るなって？　どうして……？　エリーゼ」

わたしの名前を呼ぶ彼。格子を背に、彼は果実を齧りながら首をかしげる。わたしの足元に転がる果実……それを手に取り、わたしは空を見上げた。
夜の空には月が浮かび、竪穴から光を吸い込んで降り注がせている。彼が落ちてきたのも、こんな夜だった……。ふと、林檎に目を向ける。それは紅く瑞々しく、甘い香りを放っている。まるで彼のように……。

「エリーゼは、僕の事が嫌いになったのか……？」

「……そうじゃない」

「だったらどうして？　村の事なら心配ないよ。バレないようにちゃんとこうして夜に抜け出してるんだからさ」

「そういう事じゃなくて……」

「……。だったら、どうなんだ？　僕はやっぱり、エリーゼを放っては置けないよ。君は僕の命の恩人だし……何より僕は君を大切に思っている」

「……ライル」

「そんな悲しい事は言わないで、エリーゼ。僕はまたここに来るよ。ここに来る事でしか、僕は君に会えないのだから……」

寂しげに微笑んだ彼の後姿が印象的だった。それから何度かの太陽と月がわたしの頭上を通過した頃の事だ。彼がわたしに会いに来ている事が、村で発覚したと知ったのは……。

新たに封印が施され、壊れていた鉄格子は修理された。天井に空いていた穴が塞がれ、月の光さえもが遮られた。完全なる闇の中……。わたしはどこに壁があるのかもわからない世界の中、膝を抱えて待ち続けた。気づけばいつの間にか、また彼がやってきてくれる事を期待している自分が居たのだ。

穴倉の中、黒以外の一切の色彩が存在しない世界……。悲しかった。寂しかった。ずっと同じ事を繰り返してきたはずなのに、彼にもう会えないのではないかと思うだけで胸が張り裂けそうだった。

子供の頃から無邪気な笑顔を見せて、楽しそうに世界の事を語ってくれたライル……。また来るよと言ってくれた。本当は、とても……。とても、嬉しかったのだ。

ライルに会いたい。そう思ってしまうと、もう忘れることは出来なかった。どうして見つかってしまったの……？　何故……？　自然とやり場の無い怒りや悲しみは村の人間へと向けられた。わたしなら、この穴倉の中からでも村人を殺戮出来る。それだけの力を持っている。魔女の魅力はわたしの脳裏を焦がし続けた。

復讐したいと思う気持ちと、人を殺してはならないという気持ちがせめぎあっていた。人を殺せば、自らライルとの再会を拒絶することになってしまう。これまでやってきた事、積み重ねてきた時が全て無駄になってしまう。

押し殺してきた魔女として当然の殺戮本能がわたしのなかでふつふつと音を立てて煮えたぎっていた。それでもわたしは我慢した。

我慢して我慢して……。刹那の出来事であったかのような時の流れが異様に長く、長く感じられた頃……。
既に生き物としての全てを忘れ、闇に溶けた肉体……。解き放つかのように重く塞がれていた出入り口が開かれ、二人が姿を現したのだ。小さな魔女と、一人の聖騎士……。

「大丈夫ですかっ！？」

わたしに格子越しに駆け寄り、手を伸ばす少女……。感じる。強い魔力を持っている。幼いけれども強力な魔女だ。だが、何故だ？
何故教会の礼式装備を携えた聖騎士が魔女と共にいるのか？
わけがわからない。何が起きたのだろうか？　魔女戦争はどうなった？　何故魔女と聖騎士が一緒にいる？　時間は？　時間はどれだけ過ぎたのだ？
声帯は震えなかった。乾いた空気だけが喉からひゅうひゅうと音を立てて漏れていく。わたしは口を何度も開いては閉じ、伝えようとした。その時、少女の背後から銀色に輝く剣がわたしへと突きつけられた。

「マスター！？」

「下がれレヴィ。この魔女は普通じゃない」

「止めて下さい、マスター……！　村の人に頼まれたのは、封印の再施行だけのはずですっ」

「俺もそれだけのつもりだったが……こいつは駄目だ。生きている限り、確実に人間に害を成す」

二人はわけのわからない会話を続けていた。しかしわたしには何

の話なのかわからない。そもそも、言葉が通じているのだろうか……？　わたしの思考は魔物の方によってしまっているのかもしれない。人の言語がまるで呪文のように聞こえてくる。意味は理解出来ても、ただそれだけだ。

少女は懸命にわたしを庇うように両手を広げていたが、騎士の剣の一撃が腐食していた鉄格子を、少女の頭の上スレスレで両断する。怯える少女を押し退け、騎士は牢獄へと足を踏み入れる。限りなく闇に近い漆黒の中、騎士はわたしへと剣を向けた。

「時の魔女、エリーゼだな――？　覚悟してもらおう」

わたしは何も言えないまま、剣だけをじっと見上げていた。それが鋭く振り上げられ、一気にわたしの首目掛けて振り下ろされる……。しかし、それはピタリと静止していた。わたしの前、震えながら飛び出した少女の姿があった。

少女はじっと騎士を見上げていた。その目にはいっぱいの涙を溜め込んで……。騎士は魔物刈り取る者の目からゆっくりと人の目へと戻っていく。そうして剣を鞘に収め、わたしたちに背を向けた。

「そこまで言うなら好きにしろ。その魔女は魔女狩りの際村の連中が差し出さなかった魔女だ。触れる事を恐れてな……。魔女狩りに非協力的であった時点で、あの村を助けてやる義理は無い。行くぞ、レヴィ」

「……マスター」

「いいから行け……。二度目は無い」

少女は俯いたまま、何度かわたしを気にして背後を顧みた。やがて少女の姿が洞窟から消えると、騎士は静かに溜息を漏らす。

「……お前の人生だ、お前の好きにしろ。だが、お前のその生き方の責任は取れ。それが魔女だろうが人間だろうが、共通した生者の責務だ」

騎士はそう言い残し、去っていった。ふと、洞窟に光が差し込んだままであることに気づく。格子は騎士が壊してしまった。封印の術式も……停止したままだ。

光がとても魅力的に見える。夕暮れなのだろうか？　茜色の割合が多い光……。それに手を伸ばし、気づけば洞窟から足を外へと踏み出していた。眩い光に目が潰れそうな程激しい痛みを覚えた。しかし、わたしは歩みを止めなかった。

森を抜け、山を下りる……。村の場所が変わっていないのならば、帰り方はまだ覚えている。何もかもが懐かしい……。ライルはまだ生きているだろうか？　村の連中はどうしているだろうか……？

何故だろう、身体がとても重い……。ずるずると、何かを引きずっているような……。木々がとても邪魔だった。わたしは村へ向かっていく。そうして全てを知った。何もかもを理解した。

村があった場所には、ただ廃墟だけが残されていた。何も、何一つ残ってはいない……。村の様子はわたしが居た時代からは様変わりし、何もかもがまるで別世界のようだった。

夕焼けの光の中、わたしはただ立ち尽くした。どれだけそうして立ち尽くしていたのだろう？　いや、どれだけの時間が流れてしまったのだろう……？　わたしが闇になってから何日？　何年？　何度月と太陽が光を降り注がせれば、こんな事になるのか。

わからなくなる。何の為に生きていたのかわからなくなる。全部が無駄だった。ライルの姿はどこにもない。何もなくなった。わたしは何故生きているのだろう？　わからない。わからない、わからないわからないわからない――。

『この村は、魔女戦争でザックブルムの魔女に焼かれたのだ』

背後、声が聞こえた。首だけを回して背後を見やる。そこには漆黒の甲冑に全身をすっぽりと包んだ一人の騎士の姿があった。騎士はその手に巨大な剣を携えている。直感的に理解した。あの剣の大きさは、重さは、人を斬る為のものではない。魔物、魔女……ばけものを殺す為の武器なのだと。

『聖騎士は貴様を斬らなかったか……。腑抜けた物だ』

黒衣の騎士は肩に大剣を乗せ、顔を上げる。わたしには判る……。これは、わたしたちと同じ物だ。同じ化け物……。それが、人の形をして鎧を纏い、剣を持っている。酷く滑稽で、矛盾している。だがどうだろう？　あの中身が人であるかどうかなど誰にも判らないのだ。あの中身が魔物だろうが、カラッポだろうが――誰にも判らない。

『見ての通り、この世界に貴様の居場所は最早存在しない……。首を落としてやろう、化け物。己が姿を鑑みよ……。時の魔獣よ』

わたしはそっと、自分の両手を見つめた。それは黒く塗りつぶされていた。白すぎた肌は最早どこにもない。それどころか、なぜかうでがよんほんある。なんだ、これは？

あしも、よんほん。しっぽがあって、はねがある……。つのがのびていて、かおはひとのかたちをしていない。なんだ、これは？

“わたし”はどこにいってしまったのだ？

『憎しみが魔女を魔物に近づけるのだ。貴様の憎悪、闇は貴様の原型を忘れさせるに十分なだけの力を持っていた……。世界にお前の事を知る人間は最早どこにもいない。絶望したならば死ね……。そ

れだけが貴様への手向けとなろう』

騎士が片手で巨大な剣をわたしへと突きつける。わたしは……大人しくその場に座り込み、首を差し出す事にした。わたしはもう、わたしではなくなっていた。もう何もかもどうでもいい。恐れていた事が全て現実となった。

母は時の流れの中で死に絶え、ライルも消えてしまった。村は無くなり、わたしはもうどこにも帰れない……。これ以上生きているのはただの苦痛に他ならない。いっそ、楽にしてほしかった。首がなくなれば、楽になれるのだろうか。

大剣が振り上げられる。わたしは目を閉じ、全てを思い出していた。永劫と闇、そして胸の奥にかすかに芽生えた人らしい感情……。

ああ、なにもないな。これが、わたしの終焉なのか。酷く不恰好で、寒々しい……。だが、とても安らかだ。何もないのだから。そう、何もないのだから――――。

俺は花束を片手に廃墟に立っていた。魔獣の死体が発見されたのは、例の巡礼の魔女がやってきた数日後の事だった。

魔獣の正体がなんであったのか、俺にだけはわかっている。きっと彼女が時の闇の中であんなおぞましい姿へと変わってしまったのだろう。

もっと早く、俺が彼女を救うことが出来たならば……。後悔は恐らく永遠に続くだろう。風の中、俺は静かに溜息を漏らし煙草に火をつける。彼女と別れてから、もう八年になる。

戦争があり、戦争は全てを押し流していった。村を失い、そして戦場に駆り出された俺は故郷に戻ってくる事も出来ず、その日その日を生き延びるだけで必死だった。彼女の事を……エリーゼを忘れてしまうくらい。

全てが終わり、俺はエリーゼを解き放つ為に彼女の事を調べた。彼女は、俺の先祖に当たる人物の娘であるという事……。そして、彼女は俺の何十倍もの時間を生きていたという事。時を操り、物を腐らせ蘇らせる術の使い手であった事……。彼女の事を知った。

結局俺に出来た事など何もなかった。幼い頃抱いていた淡い子供染みた感情は、今はどこかに消えてしまった。彼女を救いたかった。でも、こうして死ぬ事が彼女にとっての救いだったのかもしれない。

今の時代、魔女は余りにも生き辛すぎる。化け物になってしまったというのならば、直の事だろう。聖騎士が、首を落としたのだろうか。いや、並の人間に化け物を殺す力はない。だとすれば、騎士の仕業なのだろう。

しかし不思議と彼を恨む気持ちはなかった。むしろ、彼女を解き放ってくれた事に対する感謝の念さえ覚えている……。そんな事を言ったら、エリーゼはどんな顔をするだろうか……。

花束を手作りの墓標に備え、俺は空を見上げた。ここならば光が降り注ぐだろう。四季を感じることが出来るだろう。あの穴倉の、月影牢の中では感じ取れなかった時を感じることが出来るだろう。

俺は彼女と果たせなかった約束を、これから果たしていこうと思う。また、会いに来るよ……。今度は、何があっても。君に会いに来る。だから……エリーゼ。

「おやすみ……」

あの魔女と騎士は、旅を続けるのだろう。なんの救いもないと知りながら。あの少女は、どんな最期を迎えるのだろう？

森の奥深く、彼女の生きた場所を思い出す。悲しいのに涙はこぼれなかった。エリーゼは、どんな気持ちで逝ったのだろうか。できれば伝えてあげたかった。君は一人なんかじゃないのだと。助けられなくて、すまなかったと。

風の中、墓標の前に飽きる事無く俺は座り続けていた。今度は俺

の番だ。俺の背中に、時の重さがずっしりと圧し掛かっている。彼女を救えなかった十字架の重さを、より強く重ねながら……。それこそ、永久に。永劫に――――。

#8　月影牢（後書き）

～そし魔女劇場おしえてレヴィ子さん～

イルムガルド「暗ッ」

レヴィ「……。真っ暗ですね、色々な意味で……」

イルムガルド「闇一色だったな……」

レヴィ「エリーゼさんって、歳をとらないんですか？」

エリーゼ「……うん。わたしは、時を操る魔女だから……」

レヴィ「……なんだか、すごいんですね」

エリーゼ「すごくないよ。時間の感覚がズレていくだけ……。触れるだけで風化させる事も、巻き戻す事も出来る……。嫌な力」

レヴィ「……エリーゼさん」

エリーゼ「でも、いいの。ライルとは、また会えるから……」

レヴィ「……ぐすっ！　マスター！　なんでこんないい人殺そうとするんですかあっ！！　ばか！　ばか！！」

イルムガルド「どう考えても危険だったろ、俺らが見た時は……」

エリーゼ「……聖騎士は全く」

レヴィ「まったく！　イル様はまったく！！」

イルムガルド「え、えぇ～……」

エリーゼ「……そんなわけで、ばいばい」

#9　魔物を殺す者

“魔物”――それは文字通り人ならざる物。魔獣、そして魔女を意味する言葉だ。

かつての魔女戦争以前からこの世界に存在し人々を苦しめ続けてきた悪魔……。魔物は魔女戦争時、ザックブルムの手によって量産が謀られた。あの時代、魔物は大量殺戮兵器として非常に優秀だったのだ。

戦時中人々を苦しめた魔物、それも既に繰り手であるザックブルムが滅びた今では数は激減し目撃情報も殆ど無くなった。それは戦後大聖堂が下した魔女狩りを初めとする徹底した魔獣の抹殺命令の賜物である。

だがこの世界から魔物という種を根絶出来たというわけではない。戦後暫くが経った現在でも、各地で時折魔物は出現する。

私が修道騎士となったのは家柄故に当然の事であった。貴族の次男として生まれた私は家の事は兄に任せ、兼ねてより憧れであった騎士となった。

騎士になる事が出来るのは高貴な家柄の人間か、或いは教会の関係者だけである。魔女戦争中には平民出の武勲を立てた英雄が騎士となる事もあったがそれは稀な例となる。

家柄の力で騎士になった私ではあったが、魔物によって苦しめられている人々を救い、そして世の平和を守る騎士の仕事は非常に充実した、文句のつけようの無い日々であった。

そんな幸福な日々が続いたのはあの日、あの事件に遭遇するまでであった。私は修道騎士としてまだ未熟であり、そして余りにも無謀だった。

報告書にどんな風に記載すれば伝わるのかはわからないが、私はあの事件の事を大聖堂に報告しなければならない。たった数日前の事だ、その気になればすぐに思い出せる。

元々、商業都市ゲリアの北部では魔物が出るというのはよくある話であった。
ゲリアの北部は魔女戦争時に激戦が繰り広げられたゲリア高原が広がっている一帯であり、鬱蒼と生い茂った森や険しい山道等人間が普段立ち寄らないエリアも多い。
そんな北部、元々ザックブルムとの国境付近であった山中で私は魔物使いの噂を確かめに来ていた。修道騎士の役割は世の平定、そして魔物の調査である。単独でそこへやって来たのは私の独断先行であり無謀以外の何者でもなかったのだが、それも止む無い事だった。
山中から出現するその噂の魔物は人間の町や旅人を何度も襲撃し、死傷者の数は既に二桁。その魔物を人間が飼い慣らしているというのだから、緊急事態である。
だがその報告が来ても大聖堂は動こうとはしなかった。準備がどうだの信憑性がどうだのとごねるばかりで調査隊すら差し向けない彼らの態度に業を煮やし、私の独断で調査にやって来たのが事の発端だ。
聖騎士程とは言わずとも修道騎士にもある程度の独断と単独行動が許されている。私は人々を苦しめている魔物の証拠を掴み、大聖堂に持ち帰るつもりだったのだが――。

「……情けない話だ。あっさりと捕まってしまうとは」

山中にある古い館の地下、私が捉えられた牢獄があった。結論から言うと山中に潜んでいたのま魔獣ではなくただの人間の盗賊団だったのである。
勿論それだけではなかったのだが、私は彼らをその場で捉えようと押しかけてしまった。剣の腕には自信もあったし、人々を苦しめる彼らを許せなかったからだ。
盗賊連中を相手に大立ち回りした所までは覚えているのだが、背

後から急に凄まじい未経験の衝撃が逆り気絶。気付けばここにいたわけだ……。
そうして彼らに捕まり、殆ど放置されたまま恐らく数日が経過した頃だ。その二人組はまるで当たり前のように、あっさりと私の前に姿を現した。
一人は女――。片腕を覆うように鋼の鎧を纏い、腰からは聖騎士の証でもある聖剣を携えていた。顔に傷のある、しかし美しい女だった。
一人は少女――。口元を覆うように黒い布を巻いた、碧の瞳と碧の髪を持つ少女だ。それが魔女であり、女の方はその護衛の聖騎士である事は明らかである。

「こんな所に居たわね……。あなたがそう？　大聖堂から連れ戻せって命令があった騎士さんは」

「貴女は……？」

「わたしは聖騎士のアイネンルース。こっちは魔女のシャルルヴィアーノ。あなたを助けに来たわ」

「聖騎士アイネンルース……？　まさか……」

聖騎士と一口に言っても様々である。現存する聖騎士の数は限られており、そしてその名前は私にも聞き覚えがあった。
あの魔女戦争を生き抜いた英雄の一人。四人しか存在しない魔獣討伐のプロフェッショナル……。四人とも魔女を連れて旅をしているとは聞いていたが、まさか本物に会う事になろうとは思いもしなかった。
こうして私は魔物を連れた彼女に出会い、そして魔物と呼ばれた存在のその言葉の意味を知る事となるのである――。

＃9　魔物を狩る者

「これで良しと……。さあ、脱出するわよ」

彼女はそう言って牢屋から私を出そうと手を差し伸べてくる。だが待て、今何をした――？

鍵を使って扉を開けたのではない。鉄格子に彼女は片手を添え、まるでゴムか何かをゆがめるくらいの様子で鉄格子を曲げて見せたのだ。

唖然とする私の前、彼女は鋼の片腕を軽く振って微笑む。強引に私を引っ張り出すと、背中を軽く叩いてきた。それでも十分すぎる衝撃だったのだが。

「あなた、聖騎士と会うのは初めて？　まあ仕方ないわね……今じゃ四人になっちゃったんだもの」

「アイネンルース様……その、何故わざわざ聖騎士がこんな所に……？」

「何故って、そりゃあなたを助けに来たからに決まってるでしょう？」

当たり前の事を訊くなとでも言わんばかりの彼女の態度に私は納得が行かなかった。

私を迎えに来たのは何故だ？　人々が蹂躙され助けを求めていた

のに大聖堂は動かなかった。それが僅か数日で私に迎えを寄越す……それも最強の一角である聖騎士様とは……。
騎士は片手を腰に当て静かに息を吐いた。それから壁に背を預け、腕を組みながら言う。
「随分と無茶をしたわね。たった一人で盗賊の根城に踏み込むなんて。殺されなかったのが不思議なくらいよ」
「金目の物は鎧も武器も奪われましたがね」
「命があれば次があるわ。あなたはまだ子供なんだから」
その言葉に思わずむっとするが、だがそれが事実だ。私はまだ未熟――彼女を前にすると嫌でもそう思い知らされる。
この敵地の真っ只中でこの余裕、そして一挙一動に不思議な威圧を感じる。堂々としているのだ。今この瞬間も危険を危惧している私とは大違いに。
「それで、いたの？　いなかったの？」
「は？」
「魔物よ。居るなら殺して来いっていうのが命令でね。全く、お陰でシャルと一緒に久しぶりにゲリアでゆっくり出来ると思いきや……とんだとばっちりだわ」
「私が見た所、魔獣らしい気配はありませんでしたが」
「魔獣はね。当たり前でしょ、魔獣なんかこんな小さいアジトで飼えるわけないじゃない」

失笑と共に彼女はそう告げ、私はまたちょっとむっとする。私の態度など気にも留めず彼女は話を続けた。
そもそも魔獣は本能的に人間を殺戮し食い荒らす存在だ。それが人間と共存出来ない事は古より決まった明白な事実なのだ。
私もそれは理解している。だが人間が魔物を使役していると言う話なのだから、居るのならば居るのだろう。勿論それを怪しんで大聖堂が兵を出さなかったのも頷けるのだが……。
「そもそも魔獣は自分より強い存在の言う事しか聞かないのよ。つまり魔獣を使役出来るのは、魔女だけ」
「魔女……ですか」
思わず小さな少女を眺めてしまう。異国の装束を纏った碧の少女は相変わらず一言も喋らず、何処を見るでもなくただ突っ立っている。その様子からするとただの人形か何かのようだ。
「魔女は魔獣を操る力を持っているわ。まあ個体差はあるけど……ザックブルムはそうしていたわ。まともな人間が魔獣を使役しようとしたら、手馴れた兵士が五十人くらい必要なんじゃない？」
「では、やはりここに魔物は居ない……という事ですか？」
「そうとは限らないわ。居るのが魔獣ではなく、魔女かもしれないでしょ」
魔獣と魔女の大きな差は理性の有無だ――彼女はそう教えてくれた。
魔獣は本能の赴くまま、ただ肉を食らい殺戮を犯す。だが魔女は

そうではないのだ。人間らしい感情を、人間らしい心を持っているという。
貴族の息子として生きてきた私にとってその言葉は受け入れがたい物だった。魔女はバケモノ、それが当たり前の世界だ。碧の少女も今は大人しいが、どのような本性を持っているかなどわかりはしない。

「魔女はしかも女だから、恥ずかしがりもするし痛がりもするわ。そういう人としての弱さに付け込んで、支配するしかないのよ」

そう語る聖騎士の横顔はどこか寂しげだった。魔女戦争を実際に体験した彼女にはそれなりに思う事もあるのだろうか。

「仮にここに魔女が囚われているのだとしたら全ての辻褄が合うわ。操っているのがザックブルムの騎士か、盗賊かって違いしかない」

「では……やはりこの館に魔物が……？」

「それを調べるのがわたしたちの仕事よ。その前にあなたを外に連れ出さないとね」

「待って下さい！　仮に魔物が人々を苦しめているのだとしたら、それを正すのが騎士の務め！　私も同行します！」

「剣も鎧も無いのに？　それにあなたを無事にオルヴェンブルムに帰すのがあたしの任務なんだけど」

「しかし……！」

聖騎士は私の言葉を遮るように唇に指を当ててきた。何事かと沈

黙すると通路をこちらに向かって近づいてくる幾つかの足音が聞こえた。

「少しはしゃぎ過ぎね、少年」

「……すみません」

「まあいいわ。少し下がってなさい」

剣を抜きながら彼女が笑う。まさか一人で戦うつもりなのか――そう口にしようとした時、背後からカソックの裾を引かれ振り返った。碧の瞳が私を見上げ、下がっていた方が良いと通告する。

魔女に触られているという事実に一瞬恐怖が過ぎるが……何と言うか、この子は普通の女の子にしか見えない。魔女と言えばバケモノ、もっと恐ろしいものを想像していたのだが……。

両手を手錠で拘束されているし、特に害はないのだろうか。いや、手足を縛った状態でも人を殺せるのが魔女だと噂を聞いたことがある……なんて考えながら振り返り私は唖然とした。

そこには綺麗に寸断された盗賊の死体が二つ転がっていたのである。見たところ、この牢獄の扉を開けて直後殺されたと言った様子だ。聖騎士は既に剣を鞘に納めており、返り血の一つも浴びず美しいままである。

「脱出するわよ。長居してもいい事はないわ」

私の手を引き彼女は走り出した。魔女の少女も後ろをついてくる。牢獄の中に居た方がまだ安全だった気がしてくる。殆ど音もなく二人の人間を殺せる騎士と、魔物の類……その間に囲まれて走る日が来ようとは……。

彼女は既にこの館の内部構造を理解していたのか、私達は特に迷

う事も無く真っ直ぐに館から出る事に成功した。夜の闇の中、木々に合間に隠れて腰を落とすと呼吸を整える。が、息が乱れているのはどうやら私だけらしい。

「成程ね。人の立ち寄らない山中にある館……ザックブルムの詰め所か何かだったんじゃない？」

腰に手を当て彼女は館を見上げる。レンガ造りのところどころ崩れた、しかし未だに光を灯したその館は確かに妙だ。戦争の遺物だとすれば確かに辻褄が合う。

夜の闇に風が吹き木々の葉を揺らしていく。同時に聖騎士と魔女の髪も靡き、二人は私を残して前に出た。

「さて、ここからは聖騎士の仕事よ。あなたは夜明けを待って山を降りなさい」

「ま、待って下さい！　仮に魔女がいるとして、それを貴女一人で相手に出来るのですか！？　ここは増援を要請して、万全の体勢で……！」

「別に魔女を殺しに行くんじゃないわよ。ただ確かめに行くだけ……。それにわたしは魔女を殺す気はないわ」

それは一種の職務放棄である。魔物を殺すエキスパートである彼女が、魔女を殺す気は無い……それは決して口にしてはならない言葉だ。何故なら平民出の彼女達は、魔物を殺すからこそ英雄足りえるのだから。

「魔女を殺さず……それで、どうするつもりですか？」

「勿論、話し合うのよ。説得して、魔女にまだ生きる道があるのならば……大聖堂へ連れ帰る」

「既に魔女は人を殺しています！　死傷者が出ている以上、まともな話し合いが出来る状況では……！」

「だからそれはやってみないとわからないわ。それに人を殺したとしても、それは人間がやらせた事かもしれない。そうであればまだ救いの道はあるかもしれないわ」

それは綺麗事だと、叶うはずの無い理想だと彼女も理解しているはずだ。

魔女は一人でも人を殺していれば。一人でも人間を口にしていれば。それだけで極刑――その場で殺されて当たり前なのだ。

旅に出られる魔女は不殺の少女のみ、それ以外は全て魔獣として処断される……。連れ帰った所でもう既に可能性などありはしないというのに。

「理解出来ないって顔ね。大聖堂に連れ帰っても無駄かもしれない。でもわたしはもう魔女を殺さないと決めたの。そう、決めたのよ」

「馬鹿な……。人間と魔物の共存は不可能……それは貴女も理解しているはず」

「不可能だと口にするのは簡単よ。あれは違う、あれは殺さなければならない――そう思うのも簡単。容易い方向へ転べば、人は何処までも堕落してしまう」

目を瞑り彼女は静かに言った。それは聖騎士に有るまじき発言である。

聖騎士は司祭に匹敵する権力を持つヨト信仰の象徴だ。その聖騎士が魔女や魔物を肯定するという事は、教義に対する重大な反故になる。

彼女にそれを言おうとした時、館の中が騒がしくなったのが分った。恐らく私達の脱走、そして仲間が殺されているのが奴らにも分ったのだろう。

「さあ、隠れてなさい。武器も持たないあなたに出来る事は何もないわ」

「しかし、いくら聖騎士と言えども一人では……」

「大丈夫よ。この世界でわたしを殺せるのは……そうね。多分、イルムガルド……あいつくらいだもの」

彼女はそう言って鋼鉄の鎧を纏った腕で聖剣を握り締めた。ヨト信仰の中にある魔を弾く“聖なる言葉”を刻まれた刃は魔物に対しても有効な武器だと聞く。

碧の少女の頭を軽く撫で、聖騎士アイネンルースは歩き出した。当たり前だが館からは次々と武装した盗賊が姿を見せる。その中の数名が矢を放った事で戦いが始まった。

私は咄嗟に碧の少女の手を引き物陰に引き込んでいた。教義でバケモノと教わっている彼女に何故そうしたのかは分らないが、彼女に対してどうというよりはむしろ今戦っている聖騎士の為だったのかもしれない。

彼女は恐らく、この碧の魔女を傷つけたくないと願っている……。この僅かな間、数回しか言葉を交わしていない私にもそれはわかった。だから彼女は今、一人で戦おうとしているのだ。

いくら聖騎士、戦争の英雄と言えども人間の女――。盗賊達を相手にどう戦うのか……等という事を心配していたのだが、それは私

の杞憂だった。
飛来した矢を彼女は刃で薙ぎ払う。そこから違和感が始まり、それはどんどん強くなって行く。
次々と襲い掛かる敵を彼女は呼吸も乱さずに斬り殺していく。長い栗色の髪が風に揺れ、返り血の一滴も浴びず彼女は刃を振るい続ける。
私の知っている戦いというのはもっと血生臭い、凄惨な物であるはずだった。だが彼女はそれを踊るようにこなして行く。自分の腕が未熟であると痛感させられると共にはっきりと認識した。これが、魔物を狩る剣の動きなのだ――と。

「ま、ざっとこんなものかしらね」

血振りをしながら溜息混じりに彼女が呟くまでものの数十秒――。十人以上居た盗賊は全員が切り刻まれ大地に倒れていた。私はただその情景を呆然と眺めるしかない。
全てが終わった――余りにも早すぎる決着だ。彼女に声をかけようと物陰から身を出そうとしたその時、今度は碧の魔女が私の体を引いた。
直後、何かが轟いた。青白い光が視界の全てを支配し、耳を劈くような音と共に大地が焦げ付く匂いが漂ってくる。薄っすらと目を開いて正面を見ると――。

「アイネンルース様――！？」

つい先ほどまで驚異的戦闘能力で盗賊を蹂躙していた彼女は、今は焦げ付いた大地の上に倒れていた。何が起きたのか理解が追いつかない私の隣、魔女が囁く。

「……雷撃魔法」

その言葉の真偽を確かめるより早く、館からは一人の少女が姿を現していた。それは魔物――だが聖騎士の推測は正しく、それは黄金の髪の少女であった。
俗に言われる金髪とそれは余りにも違いすぎる。正に金色に輝くその髪と瞳は何らかの力を帯び、淡く輝いているかのようだ。ドレス姿の少女は倒れた聖騎士に歩み寄り、その焼け付いた身体を見下ろして言った。

「――馬鹿な女。私を殺しに来るからそうなるのよ……。ここに現れなければ、死ぬ事も無かったのに……」

ゆっくりと私も状況を理解しつつあった。そう、この館にやって来た私を背後から攻撃したのは彼女だったのだ。
視覚的に認識、反応不可能な魔法攻撃――。雷撃が彼女の力なのだとすれば、文字通り反則だ。いくら卓越した剣の腕があったとしても、“光”に対しては無力である。だが――。

「……いきなり躊躇い無く人間に魔法を使うって事は……強要されて人を殺していたわけでも無さそうね」

立ち上がったのだ。雷撃を受けたはずの聖騎士は立ち上がり、黄金の魔女を見下ろしているではないか。私も驚いたが、魔女の驚きは尋常ではなかっただろう。
咄嗟に後退し魔女は片手を翳す。頭上より光が迸り騎士を穿つ――この間に一秒たりとも間は存在しなかった。私もそれをしっかり見たわけではないが、少なくともこういえるだろう。

「私の雷を――剣で払った……！？」

「わたしはオルヴェンブルム大聖堂所属、聖騎士アイネンルース。あなたの話を聞きに来たの。わたしは敵じゃないわ」

「大聖堂の……聖、騎士……？　やだ……いやだっ！　来ないでぇえええっ！！」

魔女は絶叫と共に発光――直後無数の雷撃が降り注いだ。館も、木々も、私達が隠れている岩も吹き飛ばそうと衝撃が何度も何度も炸裂する。その人知を超えた猛攻の中――聖騎士はやはり立っていた。

「な、なんで！？　どうして！？」

「落ち着きなさい。あなたの話が聞きたいだけなの」

「そんな事を言って、私を殺すつもりなんでしょ！？　大聖堂の言う事なんて信じられない……！　近づかないでっ！！」

今にも泣き出しそうな表情で恐慌状態にある魔女に聖騎士の言葉は届かない様子だった。当たり前だ、届くはずがない。だが――聖騎士はあっさりと交渉の為、その身を危険の中に曝け出した。

手にしていた聖剣を放り投げ、両手を広げて見せたのだ。自殺行為以外の何者でもないその行いに私は絶句した。聖騎士アイネンルースは腕を広げたまま、ゆっくりと魔女に迫っていく。

「わたしは敵じゃない。怖くない。あなたをいじめたりしない。大丈夫だから――こっちに来て」

黄金の魔女は涙を拭い、ゆっくりと顔を上げた。それからあどけない瞳で聖騎士の微笑を見つめ――自らも笑い、そして言った。

「――ばぁあああ～～かっ！！」

雷撃の矢が放たれた。これまで以上の最大級の威力で。

無防備な聖騎士の身体を貫くだけでは飽き足らず、雷撃は周囲全てを焼き尽くしていく。夜の闇を森を焼く炎が照らし、空に魔女の笑い声が響いた。

アイネンルースは黒焦げになって倒れていた。今度はもう起き上がる気配もない。死んだ――間違いなく死んだ。一度目の奇襲も剣で防いだのかもしれない。そもそも剣で雷を斬るというのが理解の範疇を超えているが、それでも防げたのかもしれない。だが今度は違う。今度は武器を自ら投げ捨て無防備だった。防ぐ手段が――生き残れる可能性が、ない。

「あはははは！　死んだ？　ねえ、死んだ！？　大聖堂の！　聖騎士……っ！　私が強要されて魔法を使った……？　ええ、違うわ。私はここの人間を力で支配していたのよ。全部私の物！　盗んだ物も、奪った物も！！」

焼死体となった聖騎士を相手に魔女は叫んでいた。許せない――そう思った。武器も持たないただの修道騎士があの魔女に立ち向かう……普通なら考えられる事ではない。あれだけ恐ろしい力を目の当たりにして逃げ出すのが当然だろう。だが私は彼女を放置出来そうにもなかった。

魔女を信じようとした騎士がいたのだ。魔物と理解し合えるかもしれないと、希望を捨てなかった騎士が居たのだ。それが目の前で殺されて黙っていられるほど、私は大人ではなかった。岩陰から飛び出そうとしたその時、しかし私より早く闇に声が木霊する。

「……本当にきみは、そうしたかったの？」

姿を現したのは碧の魔女であった。口元を覆っていた布を指先で下ろし、静かな口調と眼差しを黄金の魔女へと向けている。
二人の魔女が見つめあう奇妙な状況下、私はまた言葉を失っていた。いや、何と無く理解していたのかもしれない。これは――私が口出しできる事ではないのだと。

「あなたも魔女……？　どうして聖騎士と一緒に居るの……？」

「……償う為……生きていく為。人である為」

「人……？　私達が人間だって言うの？　馬鹿言わないでよ、人間であるわけないでしょ……ううん、人間になるなんて御免だわっ！　あなたも魔女なら知ってるでしょう？　人間がどれだけ恐ろしく、冷酷な存在なのか……！」

人間は魔女を弾圧する。それは理解の及ばないバケモノだからである。
教会がそうしろと、世界がそうしろと言っているから。そして教義であるという事実を盾に、人間は己の罪を自覚せず人の形をした物を傷つけることが出来る。
魔女に石を投げようが、魔女の首を刎ねようが、魔女を焼き殺そうが、全ては教義……神の為、ひいてはこの世界全体の為なのだと。

「わたしは人間の見世物になって生きていくのなんてイヤ！　人間にいたぶられて死んでいくのなんてイヤ！」

「だから……奪ってもいいと言うの？　殺しても……いいと」

「いっぱいいっぱい痛い思いをして、怖い思いをしてっ！　やられ

たからやり返しているだけ、それの一体何が悪いの！？　人間だって私達を殺すわ！　私のパパとママでさえ、私を殺そうとしたのよ！？」

「だから……理解し合えないと。手を広げて近づく人間でさえも……？」

「理解しようとした！　したよ！　仲良くなろうとした！　でも駄目……駄目だったじゃないっ！！」

絶叫と共に雷が放たれる。碧の魔女は丸腰――いや、武器があればという問題でもないのだが、光は確かに瞬いたのだ。それこそ私が助けに入る余地もない。

だが次の瞬間、髪をなびかせながら碧の魔女は前進していた。その身体は無傷――黄金の刃は彼女を傷つけず、ただ大地を抉っただけであった。

「う、そ……？　ちゃんと狙ったのに……」

「人間は確かに……とても恐ろしい。でも、何かを受け入れる気持ちを持ってる……。ぼくたちも、持ってる……」

「こっちに……こっちに来ないでっ！！」

「人である為に……。人の心を忘れない為に……。ぼくたちは、それを捨てちゃいけない」

次々に雷の刃が放たれた。だがその悉くが彼女には命中しなかった。

光の雨の中を悠々と歩くその姿は脅威を超えてむしろ幻想的です

らある。私はただ、轟音の中静けさに染まっていく視界でその様子を眺めていた。
美しい……ただそう思った。そして同時にとても悲しくも見えた。どれだけ避けんでも、どれだけ涙を流しても、金色の魔女の声は誰にも届かないのだ。
やがて碧の魔女は金色の魔女へと辿り着いた。その手で泣きじゃくる魔女の身体を抱き、そっと頬を寄せる。密着してしまえば雷は放てず……そして、言葉を伝えるにはそうするしかなかったのかもしれない。

「――――」

碧の魔女はもう一人の魔女に何かを囁いた。そこから先の事は遠巻きに眺めていただけの私には理解出来ない事だった。
一言二言、二人は小さく何かをやりとりしたようだ。そして碧の魔女は涙を流しながら目を瞑る金の魔女へ、自らの唇を重ねた。
二人の魔女は暫くの間そうして口付けを交わしていた。やがて金の魔女は力なく倒れこみ――碧の魔女はその体をそっと横たわらせる。

「終わった……のか？」

慌てて飛び出して駆け寄ると、金の魔女は涙を流しながら眠っている様子だった。だがその体に手を伸ばそうとすると碧の魔女が首を横に振る。

「放って置いてあげて……」

「え……？　いや、しかし……」

「死んでるから、もう」

口元を布で覆い、彼女はもうそれっきり何も言おうとはしなかった。恐る恐る金の魔女の脈を計ってみると――確かに彼女は死んでいた。眠っているようにしか見えない。苦しむ素振りなど一つもなく、安らかに息を引き取っていた。

「シャルの魔法は“毒”……。シャルの口付けは特定の相手を苦しめずに殺す為の最良の方法なのよ」

と、当たり前のように背後から声が聞こえ慌てて振り返ると、何故か死んだはずの聖騎士が起き上がってピンピンしていた。

わけが分らず立ち尽くす私の目の前、聖騎士は剣を拾って鞘に納める。そうして碧の魔女の髪を撫で、小さく笑った。

「剣で殺されたら痛いでしょう？　だからわたしの代わりにやってくれたんだよ……ね、シャル」

「毒の、魔女……？　では……」

「雷を避けたのは毒でこの子の神経系を駄目にしてたからよ。あとは運……あなたも近くに居たから、ちゃんと飲んでおいた方がいいわよ？　解毒薬」

聖騎士はそうして私に小さな小瓶を投げ渡してきた。彼女自身は既に魔女との旅が長く、抗体を魔法で作られているから影響がないんだとか。

成程、普段口元を隠しているのはそれが“必殺”だから、と言う事らしい。言葉を紡いで唾液が飛ぶだけで相手を殺す……そんな魔女なのか。

「まさか、貴女もわざと……」

「わたしもあのまま攻撃され続けたらちょっと危なかったしね。死んだフリしておくのが一番よ」

けろりと笑う聖騎士アイネンルースの一言で事件は幕を閉じた。二人はそのまま私の前から立ち去り、私は傷一つなく山を降りる事に成功した。

後の調査で分った事だが、事件を起こした魔女はゲリアで見世物として商売の道具にされ、丁度売り買いされる所を脱走した物らしい。

魔女を隠れて育てているだけで裁かれる世の中だ。その闇商人はこれから私が責任を持って追求していくべきだろう。そうでなければ意味がない。

黄金の魔女は当然、悲惨な人生を送ってきたのだろう。碧の魔女は彼女に傷一つつける事は無かったが、彼女の遺体は“傷だらけ”であった。

動物以下の扱いをされ、折の中で一部の金持ちの道楽につき合わされてきた彼女がどんな気持ちで人間に力を向けたのか……それは察するに余りある。

あそこで彼女を連れ帰った所で、魔女裁判により火刑に処されていたのは間違いないだろう。人を殺しすぎた以上、救いの道はどちらにせよなかった。そう考えると……あの碧の魔女のした事は酷く甘く、優しい事だったのかもしれない。

聖騎士は言っていた。“シャルはこの世界で一番人を優しく殺せる魔女だ”と。口付けを交わす間に相手に幸福な幻想を見せ……夢に溶け込むように、苦痛も無く眠るように死ねるのだという。本当にそうなのであれば……いや、それもただの感傷だろう。

碧の魔女も、あの聖騎士も旅を続けると言って去っていった。私

は……相変わらず貴族の権力で騎士を続けるだけの未熟者だ。
魔物と聖騎士の闘争――そして人々が魔女を弾圧する世界の闇の一部を垣間見てしまった私に何が出来るだろうか？　そんな事を思う。
恐らく私に出来る事はそう多くはないのだ。考え方が変わったわけでもなく、魔女を救う力も、殺す力も無いただの人間だ。だが、そんな私にもまだ出来る事がある――。

「随分な有様だな……。何があったんだ、こりゃ」

山中を歩いてきた一人の男が山火事で荒れ果てた景色を眺めていった。私は彼に歩み寄り、声をかける。

「聖騎士イルムガルド様……で、あっていますか？」

訊ねるまでもない。腰から下げた刃は聖剣――傍らには蒼い髪の魔女の姿がある。修道騎士の装備を見て、彼もまた私を関係者であると認識したようだ。

「言伝を承っています。聖騎士、アイネンアース様から」

その名前を聞くや否や、彼はげんなりとした様子で溜息を漏らした。彼女に言われた通りの反応だ。

「アイネか……。あの馬鹿力女が何だって？」

「彼女はこれから南の方に行くそうです。もし追いつくようだったら一緒に食事をしようと」

「……よしレヴィ、北だ。俺達は北に行くぞ……」

「えっ？　でも、アイネ様は南にいくって……。シャルちゃんも……」

「うるせえ、北に行くったら北だクソが！　あいつの顔なんぞ見たくもねえよ！」

急に不機嫌になった男はそのまま北へ向かう道を歩き始めた。やや遅れ、礼儀正しくお辞儀をして蒼の少女も去っていく。その背中を見送り私は小さく苦笑した。

「……言われた通りにしましたよ、アイネンアース」

自分が南に行くと言えば、イルムガルドは必ず北に向かうだろう。だから、北で待っている――彼女はそう言っていた。

さて、二人の聖騎士は出会う事が出来るのだろうか。そしてこれが彼女に対するわずかばかりの恩返しになるのか……それは私の知るところではないが。

崩れ去った館の前、小さな墓標が風を受けている。小さな木を切って作られた、小さな墓標。そこにかけられたわずかばかりの願いを、私は見届けてみたいと思う。

時が過ぎ、いつかは魔女の旅も終わる。大聖堂も、この世界も変わる。そうなっていく切欠を作るのはきっと……私達、一人一人なのだ。

その途方も無い歴史に一筆書き加える事――それが、魔物の現実を知った私の責務。せめてもの、償いなのだから。

#9　魔物を殺す者（後書き）

～そし魔女劇場おしえてレヴィ子さん～

レヴィ「一年ぶりの更新なのに出番が……」

イルムガルド「ああ、なかったな」

アイネンルース「まあ今回はふつーにバトっただけの気もするしね」

イルムガルド「この小説にバトルとかいらねえから」

シャルルヴィアーノ「まあ……久しぶりの更新だから」

レヴィ「もう一話くらい近々更新するらしいですよー」

イルムガルド「……信用ならねぇ……」

シャルルヴィアーノ「信じる事を……諦めるの？」

イルムガルド「そういう問題でもねえ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8477d/

そして魔女は祈りを謳う

2010年12月13日13時00分発行